

3.11 東日本大震災の救護記録

必ず起こる災害に備えるために伝えたい



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

香川県支部



忘れること
出来ない記憶
人を救うため全力を

3.11 東日本大震災の救護記録

必ず起こる災害に備えるために伝えたい



津波の高さを物語る（大槌町）



津波でうちあげられた漁船（石巻市）



津波に飲まれた町（東松島市）



ビルをも飲み込む津波の破壊力（女川町）



津波の威力に言葉を失う赤十字ボランティア（石巻市）

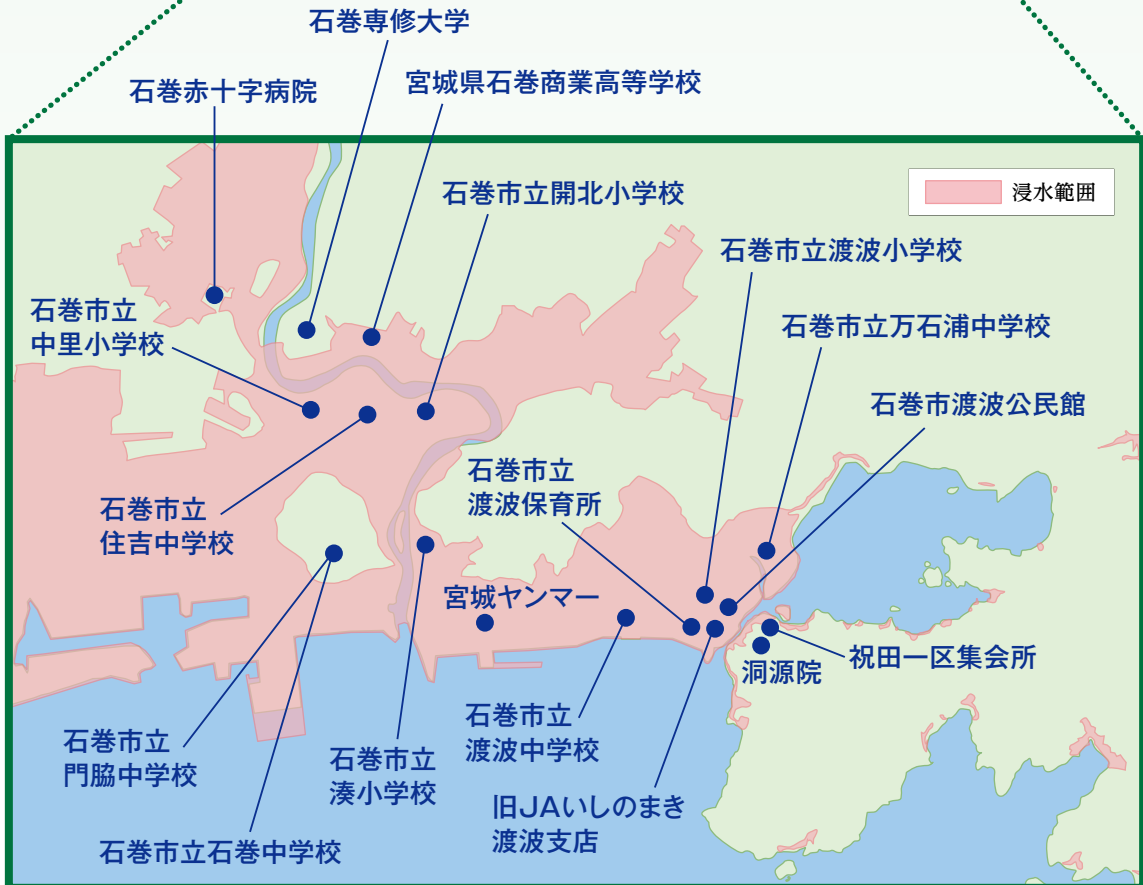
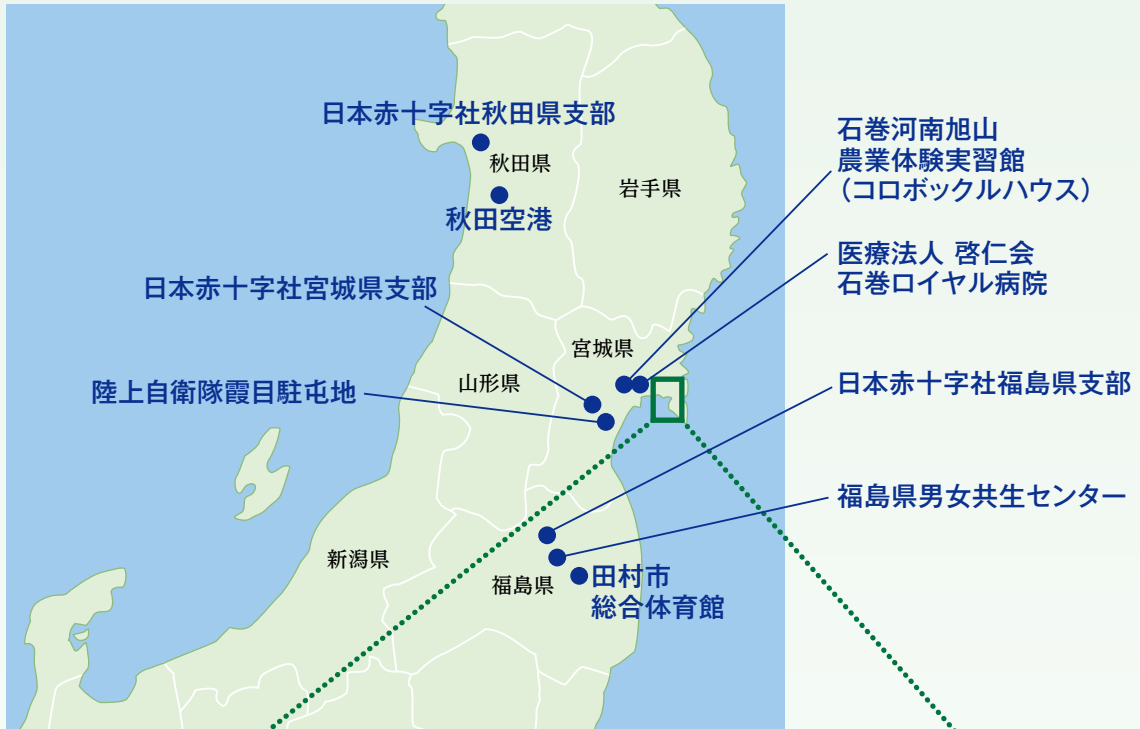


治療をする救護員（仙台市 霞目駐屯地内） 国内型緊急対応ユニット（dERU）内



SCU活動 自衛隊と協働し処置を施す救護員（仙台市 霞目駐屯地内）

香川県支部が活動した場所等





3.11 東日本大震災の救護記録発刊に寄せて

日本赤十字社 香川県支部 事務局長 近藤 彰介

日本人が忘れることのできない昨年3月11日の東日本大震災から、早や1年が経ちました。その際には、皆様方の献身的なご協力により、赤十字病院、血液センターと一緒に、香川県支部あげて、迅速な医療救護活動に取り組むことができました。本当にありがとうございました。

被災地では、今なお多くの方々が仮設住宅で不自由な生活を余儀なくされるなど厳しい状況が続いており、今後、復旧・復興をより迅速かつ着実に進めていく必要があります。

日本赤十字社は、災害発生後、直ちに現地へ医療救護班（総計896班）を派遣し、被災者への救護活動にあたるとともに、義援金募集活動にも取り組んできました。

まず、医療救護については、香川県支部では、発災当日の3月11日から6月下旬まで、救護班13班、こころのケア班1班など124名を被災地に派遣するとともに、石巻赤十字病院へは、3月から8月下旬まで業務支援等のため、12名の看護師などを派遣したところです。震災直後の3月は、各県支部が独自に自己完結の救護活動を取らざるを得ませんでした。4月以降は、中国・四国ブロックが連携し石巻地域を中心に活動を行うことができました。

災害にあった人々の救護は、日本赤十字社本来の使命に基づいた最も重要な事業の一つであり、香川県支部では、そのため常備救護班を8班編成し、有事に備え、日頃から救護訓練を実施し、医療救護活動の充実に努めています。

救護員の任命式、任命救護員の研修会、支部施設合同救護員主事の研修会、こころのケア要員の研修会、支部施設合同赤十字救護員の研修会、dERUの操作研修、香川県総合防災訓練など他機関の実施する訓練への参加など、各般の研修・訓練に積極的に取り組んできました。さらに、職員の施設間交流や「もっとクロス運動」などに取り組んできたことが、施設間の垣根をより低くし、今回の災害救護活動においても、多いに活かされ、大きな成果を発揮したのではないかと考えています。

また、義援金募集については、香川県支部で受け付けた義援金の総額は、3月末現在で、15億9,175万円余となり、県民の皆様のご厚志に深く感謝しているところです。この義援金は、日赤本社を通じ、全額が、被災都道府県ごとに設置される義援金配分委員会に送金され、市町村から被災者へ交付されますが、日赤全体では、3月30日現在で3,134億円余の義援金が寄せられ、これまでに3,058億円が市町村を通じて被災者の手元に渡っているところです。

なお、今回の義援金募集に際しては、県下の自治会、赤十字奉仕団、青少年赤十字メンバー、さらには、多くのボランティアの皆様にご多大なご尽力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

死者・行方不明者が1万9千人近くにのぼり、壊滅的な被害を受けた市町村もある今回の震災、その復興には長い時間が必要と思われる。日赤は、各国赤十字社などから寄せられた915億円に上る救援金を財源に、今後も被災者の生活支援を目指した幅広い復興支援事業に取り組むこととしています。

一方、福島第一原発の事故により、いまだ故郷へ帰る見通しすら立たない原発周辺住民の苦悩も忘れてはならないと思います。自然災害だけでなく、今回のような不測の事故に対しても、しっかりと備えておくことが求められています。

今、近い将来、必ず来ると言われる東南海・南海地震に対する備えが強く求められています。その一助とするため、このたび、香川県支部における「東日本大震災の救護記録」を発刊することとしました。「いかなる状況下でも人間のいのちと健康、尊厳を守る」ことは日本赤十字社が自らに課した使命です。皆様とともに、その責任を果たしていけたらと考えています。



3.11 東日本大震災の救護記録発刊に寄せて

高松赤十字病院 院長 笠木 寛治

2011年3月11日14時46分東北地方で発生した地震は、日本における観測史上最大となるマグニチュード9.0を記録し、さらに最大遡上高約43mにも及ぶ大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらしました。ちょうど1年経過した今年3月11日の時点で、死者は15,854人、行方不明者は3,155人に達すると発表されています。さらに今回の震災では福島原子力発電所が被災し、それに伴い放射性物質が漏出するという大事故も起こりました。東日本大震災において亡くなられた方のご冥福を、そして被災地で未だに不自由な生活を強いられておられる方に対しては、できるだけ早く元の生活に戻れるよう、心よりお祈り申し上げます。

震災日3月11日15時には日本赤十字社に災害救護実施対策本部が設置されました。16時30分には日本赤十字社香川県支部、17時15分には高松赤十字病院に災害対策本部が各々設置され、19時には香川県支部救護班第1班15名が、dERU、救急車、救護支援車など5台の車に乗り込み、現地に向けて出発しました。第3班までは陸路を丸1日以上かけて車で現地入りするという強行軍であり、班員の健康は保たれるのか？途中、運転手が疲れのために事故でも起こさないか？道路に亀裂はないのか？ガス欠にはならないか？など大変心配でしたが、第4班からは飛行機を利用するルートに変わり、その心配は取り除かれました。

高松赤十字病院災害対策本部は院長室隣の応接室におかれ、事務職員がそこで寝泊りする状態が続きました。そこにはホワイトボードが置かれ、それぞれの班の活動状況がリアルタイムに近い状態で把握できるように記録され、いつ部屋に入っても職員が数名いるという毎日で、私も院長室と応接室を行ったり来たりしておりました。

今までに13の救護班が結成され、現地へ派遣されました。その内訳は医師24名(研修医3名を含む)、看護師38名、助産師3名、薬剤師12名、主事27名でした。他にこのころのケア班として看護師が6名、主事が3名、臨床心理士1名が、石巻赤十字病院診療支援要員として看護師5名、助産師2名、薬剤師2名、臨床工学技士1名、主事1名が、新潟県血液センター支援として薬剤師1名が、放射線サーバイヤ員として放射線技師1名が、現地広報支援要員として主事1名が派遣され、また、ボランティアとして19名の方が現地に赴かれました。そして5月、主事2名と3名のボランティアの方にdERU等の撤収をお願いしました。これらを全部あわせると計152人(日赤香川県支部5人、高松赤十字病院111人、香川県赤十字血液センター14人)となりました。

このように多くの職員が自ら進んで救護活動参加を申し出てくれたことに対して、大変頼もしく感じました。出発式で多くの職員が救護員を激励する姿を何度も見ました。まさにそれは、職員に日赤魂が浸透していることを再認識させるものであり、院長として大変誇りに思っております。

30年以内に60%の確率で南海大地震が起これと言われています。想定される震源域も今まで考えられていたよりも大きく、数十mにも及ぶ津波が予想されるようです。四国各県でもそれなりの準備が行われているようですが、まだ十分とはいえません。日本赤十字社香川県支部は来るべき大災害に備え、国民を保護する義務を背負っております。この東日本大震災の救護記録が、今後の災害時の行動方針として役立つことを強く期待いたします。



3.11 東日本大震災の救護記録発刊に寄せて

香川県赤十字血液センター 所長 本田 豊彦

東日本大震災発災から一年経ちました。あの日は、私は血液センターの所長室で執務をしていました。午後になって、テレビで、大津波が車や家を押し流しているとの報道を見ましたが、とても日本で現実には起きていることとは俄かには信じられませんでした。そして、夕方には、血液センターに格納しているdERUが、慌ただしく出動して行きました。当センターの職員は、香川県支部や高松赤十字病院の職員と共に、交代で被災地に赴き、懸命に救護活動を続けました。慣れない寒さの中でよく頑張ってくれました。また、血液センター独自の災害応援として、被災して稼働できなくなった宮城センターの製剤業務をバックアップしていた新潟県赤十字血液センターに、製剤業務の応援に職員を派遣しました。そして、香川県赤十字血液センターとしては、被災地の東北ブロックで不足している血液製剤を、全国の血液センターと力を合わせて供給してまいりました。東日本大震災発災直後から、たくさんの献血者のみなさまに、献血にご協力いただきました。あらためて、お礼を申し上げます。

私が、東日本大震災の被災地を実際に訪れたのは、平成24年1月18日・19日に仙台市内で開催された、全国血液センター所長会議のときでした。東京から仙台へ向かう新幹線は通常通りに運行され、仙台駅の建物もすでに修復が終わり、市内ではあの震災の影響は、表面的にはありませんでした。しかし、所長会議後にバスで訪れた海岸近くの若林区荒浜では、様相が一変していました。大震災から10ヶ月が経っていましたが、海岸沿いの道路の両脇には、見渡す限り更地に似た被災地が広がり、所々鉄筋コンクリート製の建物が被災した時のまま放置されていました。津波による被害の大きかった地域は、その対策のため居住地区としては使用しないとのことで、無人の荒地が広がっていました。津波と共に生活の全てが失われました。荒浜から仙台空港に向かいました。テレビで見たような被災状況からすでに空港は復旧していましたが、そのすぐ近くまで無人の荒地が広がっていました。災害の酷さと復興への努力の両面を見ました。

平成24年3月10日に、宮城県赤十字血液センターの伊藤孝所長を、高松にお招きして、合同輸血療法委員会と輸血懇話会の合同講演会で、東日本大震災での宮城県赤十字血液センターの活動をご講演していただきました。そして、大震災からの復興には、まだまだ時間がかかるといわれていました。実際、今でも東北ブロックで不足している血液製剤を全国で分担して応援しています。献血者のみなさま方にも、継続した献血へのご協力をお願いいたします。

この一年を振り返るだけでなく、この小冊子の発刊を機に、これからの被災地の復興に向けた継続的な支援体制の構築に向け、一層の努力をして参ります。また、近い将来に起きることが懸念されている、東南海地震とそれに伴う津波に対する備えを、香川県支部や高松赤十字病院とともに更に進めて参ります。

目 次

■ 序 章 ■

赤十字の災害救護	1
----------------	---

■ 第1章 ■

東日本大震災災害救護活動（発災から撤収まで） …	5
--------------------------	---

■ 第2章 ■

東日本大震災救護活動報告・各職種の所感	47
---------------------------	----

■ 第3章 ■

血液支援	71
------------	----

■ 第4章 ■

ボランティア・青少年赤十字活動記録	75
-------------------------	----

■ 第5章 ■

義 援 金	91
-------------	----

■ 第6章 ■

東日本大震災災害救護に関する派遣状況名簿	95
----------------------------	----

序章

赤十字の災害救護

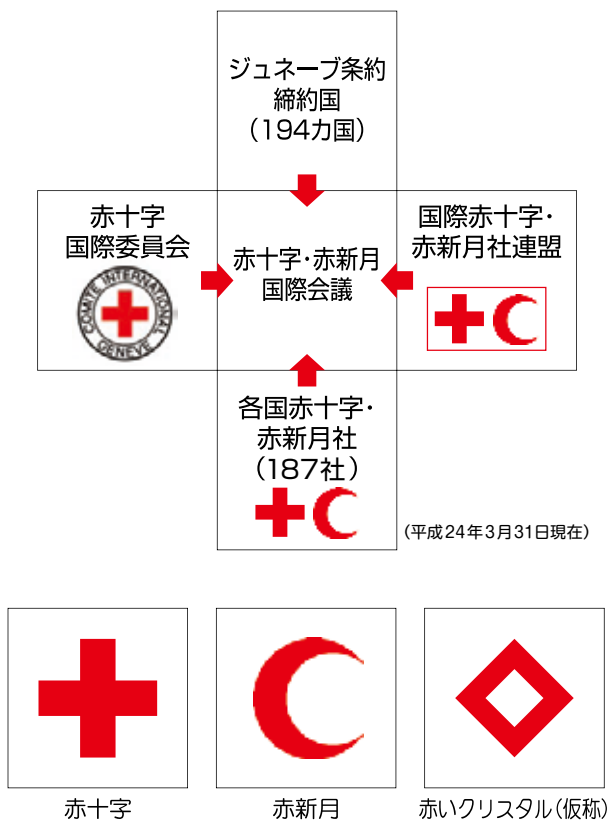
赤十字のはじまり

1859年6月、スイス人アンリー・デュナンは、イタリア統一戦争の激戦の地ソルフェリーノにほど近いカスティリオーネで、戦野に放置されていた傷病兵の悲惨なありさまを目のあたりにしました。そこで、デュナンは、「傷付いた兵士は、もはや兵士ではない、人間である。人間同士として尊い生命を救わなければならない。」との思いを抱き、住民に協力を呼びかけ、敵味方の区別なく救護につとめました。この時の思い出をつづったデュナンの一冊の本「ソルフェリーノの思い出」がきっかけとなって、1863年2月、ジュネーブに赤十字国際委員会が、また1919年5月には平時活動を担当する国際赤十字・赤新月社連盟が創設されました。

赤十字の標章

赤十字の標章(マーク)は、1863年の国際会議において、赤十字の創始者のデュナンの祖国スイスに敬意を表し、スイス国旗の配色を反転させ、「白地に赤十字」と決められています。現在ではイスラム教国の多くは、「白地に赤い三日月(赤新月)」のマークを使っていますが、これも赤十字と全く同じ組織であることを示すマークとして認められています。この標章は、保護の標章として戦時において、軍の衛生部隊に所属する人、建築物、施設、車両及び資材等に付し、これらを攻撃の対象としてはならないと決められています。

また、表示の標章として、赤十字社の建築物、車両、出版物等に付し、赤十字の目的を達成するために使用されています。これらの標章の使用は、国際法「ジュネーブ条約」さらに国内法(日本の場合は「赤十字の標章及び名称等の使用の制限に関する法律」昭和22年法律第159号)で厳しく制限されています。



国際赤十字・赤新月運動の基本原則

(第20回赤十字国際会議(1965年、ウィーン)決議第8
改正:第25回赤十字国際会議(1986年、ジュネーブ)決議第31)

第20回赤十字国際会議は、赤十字の活動の基礎である次の基本原則を宣言する。

人道

国際赤十字・赤新月運動(以下、赤十字・赤新月)は、戦場において差別なく負傷者に救護を与えたいという願いから生まれ、あらゆる状況下において人間の苦痛を予防し軽減することに、国際的および国内的に努力する。その目的は生命と健康を守り、人間の尊重を確保することにある。赤十字・赤新月は、すべての国民間の相互理解、友情、協力および堅固な平和を助長する。

公平

赤十字・赤新月は、国籍、人種、宗教、社会的地位または政治上の意見によるいかなる差別をもしない。赤十字・赤新月はただ苦痛の度合いにしたがって個人を救うことに努め、その場合もっとも急を要する困苦をまっさきに取り扱う。

中立

すべての人からいつも信頼を受けるために、赤十字・赤新月は、戦闘行為の時にずれの側にも加わることを控え、いかなる場合にも政治的、人種的、宗教的または思想的性格の紛争には参加しない。

独立

赤十字・赤新月は独立である。各国の赤十字社、赤新月社は、その国の政府の人道的事業の補助者であり、その国の法律に従うが、常に赤十字・赤新月の諸原則にしたがって行動できるよう、その自主性を保たなければならない。

奉仕

赤十字・赤新月は、利益を求めない奉仕的救護組織である。

単一

いかなる国にもただ一つの赤十字社あるいは赤新月社しかありえない。赤十字社、赤新月社は、すべての人に門戸を開き、その国の全領土にわたって人道的事業を行わなければならない。

世界性

赤十字・赤新月は世界的機構であり、その中においてすべての赤十字社、赤新月社は同等の権利を持ち、相互援助の義務を持つ。

日本赤十字社の主な事業

日本赤十字社は、「苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守る」という使命を掲げて、国内外で様々な活動を展開しています。

国際活動	紛争や自然災害、病気などで苦しむ人々を救うため、国際赤十字の各機関と連携をとり、現地への専門家の派遣や資金援助などを行っています。
災害救護活動	自然災害・人的災害などに際し、医療救護班などを派遣しています。また、救護活動をより効果的に行うために、防災ボランティアの養成を行っています。
医療事業	全国の赤十字病院では、地域社会の医療の確保と福祉の向上に努めるとともに、国内外での災害・紛争時の医療救護活動もを行っています。
看護師等の養成	医療施設をはじめ、国内外の災害救護活動などで活躍する看護師等の養成を行っています。
血液事業	全国の血液センターや献血ルーム、献血バスを拠点に献血への協力を呼びかけています。血液は検査などで安全性を確認し、輸血用血液を24時間体制で医療機関に供給しています。
救急法等の講習	健康で安全な生活を送るとともに、ボランティア活動などにも役立つ知識や技術を身につけるため講習会を実施しています。
赤十字ボランティアの育成	地域に根ざした活動や、赤十字思想の普及をはじめ、災害時の被災者支援など赤十字の活動を推進する担い手としてのボランティアを育成しています。
青少年赤十字活動の推進	健康・安全、奉仕、国際理解・親善の3つの実践目標を掲げ、学校を中心に先生が指導者となって、青少年の育成に取り組んでいます。
社会福祉事業	児童・老人・障害者福祉施設を運営するとともに、医療・保健施設や赤十字ボランティアと連携を図りながら地域ニーズに応じた福祉サービスの向上に努めています。



災害救護活動

災害にあった人々の救護は、日本赤十字社本来の使命に基づいた最も重要な事業の一つです。

昭和 22 年制定の災害救助法により、日本赤十字社は災害に際して救助の協力を義務づけられ、さらに昭和 36 年制定の災害対策基本法では、災害救護に対する準備体制を確保しておくよう定められています。

当支部では、これらの法律に基づき本社が定めた規則及び計画に従い、常備救護班を編成し、有事即応の体制を整えるほか、救護員訓練などを実施し、医療救護活動の万全に努めるとともに、赤十字奉仕団、防災ボランティアの協力のもと、幅広い救護活動の展開が可能となるようその訓練と啓発に努めています。

日本赤十字社法第 27 条第 2 項

- 非常災害時又は伝染病流行時において、傷病その他災やくを受けた者の救護を行うこと。

日本赤十字社定款第 47 条第 2 項

- 地震、火災、風水害、その他非常災害時又は伝染病流行時において、傷病その他災やくを受けた者の救護を行うこと。

日本赤十字社定款第 48 条第 1 項

- 救護員を確保し、その養成訓練を行い、救護材料を準備するほか、救護に関する組織及び装備を整備すること。

国内救護活動の範囲

- (1) 医療救護
- (2) 救援物資の備蓄と配分
- (3) 災害時の血液製剤の供給
- (4) 義援金の受付と配分
- (5) その他災害救護に必要な業務（ボランティア、炊出し等）

香川県支部の救護班

常備救護班として 8 個班を、県内赤十字施設（高松赤十字病院・香川県赤十字血液センター）との連携のもとに編成しており、災害の規模に応じて必要な救護班を派遣することになっています。この救護班の編成基準と要員確保状況は次のとおりです。

◎救護班の編成（1 班 6 人編成 8 個班）

（単位／人）

職種 区分	医師（班長）	看護師長	看護師	主事	自動車操作要員	合計
1 個班の編成基準	1	1	2	1	1	6
常備要員数	8	8	16	8	8	48

※必要に応じて、薬剤師・助産師・特殊要員を加えます。また、血液搬送員として 3 人を任命しています。



▲写真は平成 23 年度の救護員任命式辞令交付および研修会の様子

◎国内型緊急対応ユニット（dERU）チームの編成（1 チーム 14 人編成 4 チーム）

（単位／人）

職種 区分	医師	看護師長	看護師	薬剤師	助産師	主事	合計
1 チームの編成基準	2	2	4	1	1	4	14
常備要員数	8	8	16	4	4	16	56

※医師の内 1 人がチームリーダー、主事の内 1 人がサブリーダーとなります。

第1章

東日本大震災災害救護活動 (発災から撤収まで)



▲救護員を派遣する近藤局長、笠木院長



▲記者からの質問に受け答える吉澤災害対策委員長



▲救護資機材を積み込み、確認する救護員



▲出発直前の最終連絡調整に走る職員

・国内型緊急対応ユニット(dERU)・



国内型緊急対応ユニット (domestic Emergency Response Unit。以下「dERU」という。)dERUとは、国内における大規模災害等で医療救護活動を行うことを想定した緊急仮設診療所設備とそれを輸送する車両及び自動昇降式コンテナと訓練された要員、そしてそれらを円滑に運用するためのシステムを総称したものをいう。

- 標準医療セット及び医薬品は患者 150 名/日×3 日で外傷 60%、急性内因性疾患 20%、慢性疾患 20% を想定して設計されている。
- dERU チームの活動期間は1週間を目安とし、継続的な救護活動が必要とされる場合は、救護班が dERU チームと交代し救護活動を引継ぐ。
- 東日本大震災で香川県支部は dERU を初めて被災地で活用し、約1ヶ月救護活動に使用した。

▼ 2011 年 3 月 11 日

14:46	東日本大震災発生 マグニチュード 9.0 最大震度 7：宮城県栗原市 場所および深さ：三陸沖（牡鹿半島の東南東、約 130km 付近）
15:00	日本赤十字社は災害救護実施対策本部「以下、本社災対本部」を設置
15:10	日本赤十字社広島県支部（中四国ブロック代表支部）「以下、広島県支部」と情報交換
15:12	日本赤十字社高知県支部「以下、高知県支部」と情報交換
15:15	日本赤十字社徳島県支部「以下、徳島県支部」と情報交換
15:17	高松赤十字病院医療社会事業課長に連絡
15:27	日本赤十字社香川県支部「以下、香川県支部」赤十字ボランティアリーダーと今後の対応について協議
15:30	日本赤十字社岡山県支部「以下、岡山県支部」と情報交換（岡山県支部救護班 1 班待機中）

15:43	日本赤十字社愛媛県支部「以下、愛媛県支部」と情報交換
15:45	高知県支部と情報交換（救護装備点検中）
15:46	香川県赤十字血液センターに dERU（国内型緊急対応ユニット）の動作確認を指示
15:55	高松赤十字病院薬剤部長に救護材料（医薬品）の準備を指示
16:20	高松赤十字病院医療社会事業課長に救護材料（衛生材料他）の準備を指示
16:30	日本赤十字社香川県支部災害対策本部「以下、香川県支部災対本部」を設置
16:37	広島県支部は香川県支部救護班 1 班を日本赤十字社宮城県支部「以下、宮城県支部」へ出動を要請
17:15	高松赤十字病院災害対策本部を設置
18:04	香川県高松地方に津波予報 到達時刻 18 時 40 分、高さ 50cm の予想



▲お互いに声を掛け合いそれぞれの救援車に乗り込む



▲ルートを確認する主事



▲3月11日19:00 被災地に向けて出発



▲これからの任務について再度確認し合う（津田SA）

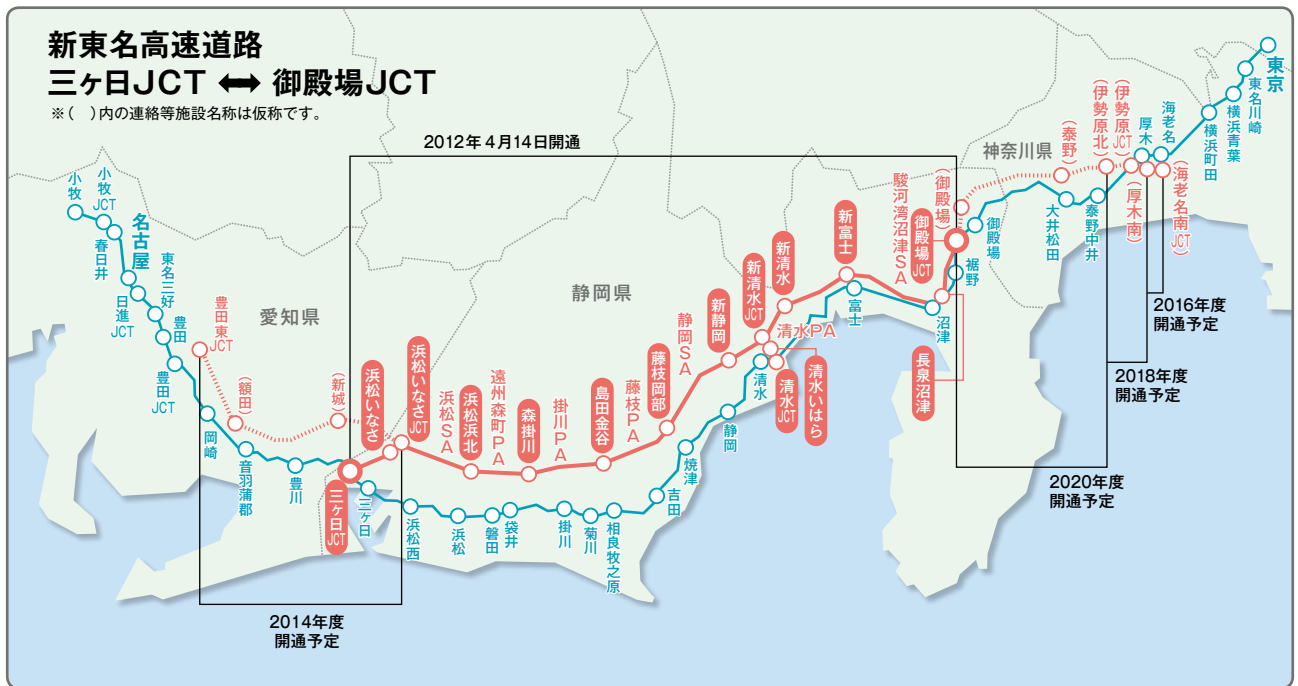
・県支部と救護班との連絡方法・



現地までの連絡手段は通信指令車（エスティマ）に搭載している赤十字の業務用無線を有効活用した。また同車両には衛星携帯電話も搭載しており、全くと言っていいほど初動班が通信に関して困ることは無かった。またルート検索については日赤支部のネットワークを生かし、太平洋側の最短ルートを考慮し、愛知県支部、静岡県支部等から多くの情報を頂き約24時間かけて最初の活動場所である福島県田村市に到着した。

18:20	広島県支部救護班出動の報告
18:37	香川県支部災対本部に香川県支部赤十字ボランティア2名到着
18:50	香川県支部災対本部は県内交通機関の情報収集 JR、高速道路は平常通り、フェリー、高松空港は欠航 津波到達時刻は高松港19時30分の予想
19:00	香川県支部救護班第1班（dERUチーム）が出動 人員：医師2名、看護師6名 主事4名、薬剤師1名、助産師1名 ボランティア1名 目的地：日本赤十字社宮城県支部 車両：dERU、救急車、通信指令車、救援車2台 経路：高松自動車道（高松中央IC→鳴門経由）
19:20	広島県支部に出動報告
19:30	救護班第1班は香川県支部災対本部に宮城県支部までの車両運行ルートの調査を依頼
19:50	香川県支部災対本部は高知県支部と情報交換（高知県支部救護班出動、香川県支部救護班との合流を検討）

20:05	香川県支部災対本部は日本赤十字社愛知県支部、静岡県支部に道路状況を照会 愛知県支部：中央自動車道経由を推奨 静岡県支部：東名高速道路からの首都圏通過は不能 愛知県支部：岐阜県支部は北陸自動車道経由の予定
21:50	広島県支部は香川県支部災対本部に日本赤十字社医療センター（東京都渋谷区広尾）「以下、医療センター」に目的地変更を指示
21:53	香川県支部災対本部は救護班第1班に医療センターへの目的地変更を指示
22:04	救護班第1班は神戸西IC到着、中央自動車道経由の予定
23:06	本社災対本部救護班担当は香川県支部の出動状況を照会
23:10	救護班第1班は京都を通過中
23:38	救護班第1班は大津SA到着、日本赤十字社和歌山県支部と合流
23:42	岡山県支部救護班が大津SAに到着し合流 香川県支部、岡山県支部救護班の協議により東名高速経由で医療センターへ



▲3月12日現在、東名高速道路は大津波警報が発令されているため走行不能であり、NEXCO 中日本のご協力により、工事中の新東名高速道路を利用し、被災地へ前進することができた。



▲救援関係機関のみが利用できた高速道路は陥没が多く危険な状況（震災翌日）



▲救援車両は工事中の新東名高速を走り被災地へ急ぐ

▼ 3月12日			
0:08	救護班第1班草津PAに到着し給油、伊勢湾岸自動車道刈谷PAへ移動	6:16	広島県支部は香川県支部災対本部に、広島県支部、岡山県支部、香川県支部、高知県支部の4班が福島県支部に向かうことを報告 経路は外環道川口JCTから東北道
2:23	救護班第1班は東名高速経由で医療センターへ移動	7:36	救護班第1班はNEXCO中日本の協力により平成24年初夏開通予定の新東名にて福島県支部へ移動
2:42	香川県支部災対本部は静岡県支部に東名高速の状況確認 救護班第1班は岡崎JCT付近を通過中	9:15	救護班第1班は静岡岡富士付近を通過中
2:50	静岡県支部は香川県支部災対本部に東名高速清水ICを降りてからの渋滞を報告	9:40	広島県支部は香川県支部災対本部に中四国ブロックの派遣状況を情報提供 広島県、岡山県、愛媛県、高知県、香川県は出動中 山口県、島根県、徳島県に派遣依頼中 鳥取県は日赤DMAT出動し福島空港に到着
2:55	香川県支部災対本部は救護班第1班に東名高速の状況を情報提供	10:37	東北自動車道通行止めも緊急車両は通行可
4:06	長野県で震度6強の地震のため救護班第1班は牧之原SAで仮眠を含め待機	11:05	香川県支部災対本部は首都高センターに道路情報を照会 熊野JCT～川口JCTは通行止めも赤色灯装備の緊急車両は通行可
4:20	救護班第1班の目的地は医療センターから日本赤十字社福島県支部「以下、福島県支部」に変更となる 香川県支部：海側ルート 岡山県支部：山側ルート		



▲福島県田村市総合体育館に避難した方は赤十字マークをみて安堵する



▲仮設電話で連絡を取る避難者



▲救護所開設と同時に受付に被災者の行列ができる

・救援物資と義援金・



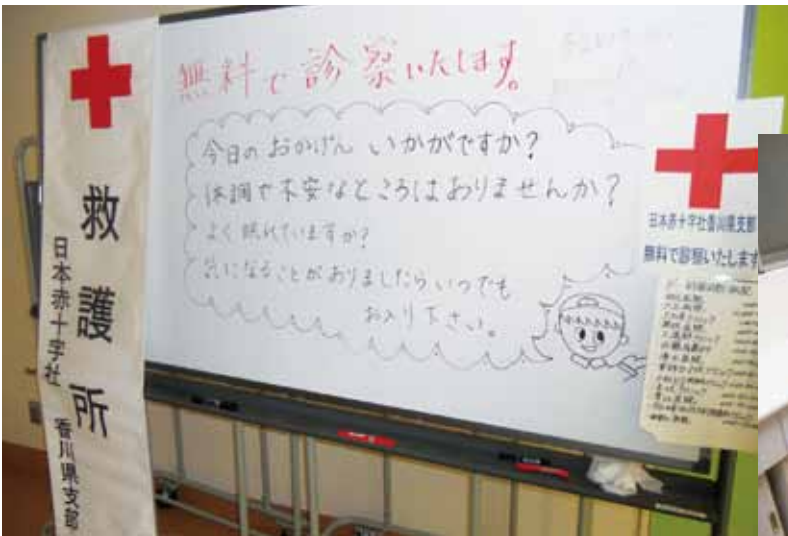
義援金は3月11日から一般の方から問合せが相次ぎ、直接義援金を持参される方が後を絶たなかった。また支援物資受付は香川県、各市町等が窓口となり広く募集した。



▲巡回診療開始(避難者約1,500人)

12:00	広島県支部救護班は相馬市役所に到着
13:00	救護班第1班は浦和JCTを通過中
13:38	救護班第1班は高知県支部救護班と合流
15:36	福島第一原子力発電所1号機が水素爆発
15:40	救護班第1班は那須高原SAに到着
15:41	救護班第1班は福島県田村市総合体育館避難所で救護を実施することを決定 田村市総合体育館：避難者1,500名 福島県田村市船引字遠表400 ※福島第一原子力発電所から30km
16:00	救護班第1班は三春SAに到着も福島原発爆発事故の影響で待機
17:14	救護班第1班は郡山JCTを通過中
17:41	救護班第1班は香川県支部災対本部に原発事故の情報収集を依頼
17:44	香川県支部災対本部は本社に原発事故について情報提供依頼も報道以上の情報なし

18:13	救護班第1班は田村市総合体育館避難所に向け出発 dERUは被ばくの可能性あるため展開せずに体育館内の巡回診療を予定
19:00	救護班第1班は田村市総合体育館に到着
19:12	香川県支部災対本部は広島県支部に救護班到着報告
20:00	救護班第1班は単独で田村市総合体育館内に救護所を24時間体制で設置
20:20	福島原発の爆発事故による避難区域20km圏内に拡大
23:58	救護要員は順次交代休憩 診療患者数89名
▼ 3月13日	
0:00	救護班第1班は24時間診療体制
7:00	救護要員用食料を買い出しに行くも近隣に食糧なし
8:15	避難者にこころのケアを実施



▲優しさを表現した案内表示



▲避難者の症状を聞く医師



▲倒れた避難者を救護所に搬送する救護員



食事の配給に長蛇の列が出来た田村市総合体育館。この日、避難者が口に出来た食事はゴルフボール大のおにぎり1つだった。

▼ 3月13日	
8:55	香川県支部災対本部は香川県支部救護班第2班の派遣を検討
9:00	救護班第1班は持参の衛星携帯電話を開通
9:30	救護班第1班は依然単独にて救護所を運営
10:30	福島原発事故の影響で救護所撤退準備開始も診療はできるだけ継続
10:50	福島県災害対策本部は田村市総合体育館から午前中に避難命令
12:00	救護班第1班は田村市総合体育館から撤退し、福島県男女共生センターへ移動
12:01	広島県支部は香川県支部災対本部に広島県支部手配のトラックで被災地に救援物資(毛布)搬送を指示
12:07	広島県支部は香川県支部災対本部に救護班第2班の出動準備を指示

12:09	香川県支部災対本部は高松赤十字病院、香川県赤十字血液センターに第2班の準備を指示
12:43	本社から高速道路は緊急車両のみ通行可の情報提供
13:32	香川県支部災対本部は広島県支部に現在の中四国ブロック各県の活動状況を照会 広島県支部：福島県川股南小学校で活動中 岡山県支部：福島県済生会病院で活動中 愛媛県支部、高知県支部：福島県支部の指示待ち 山口県支部：水戸市立浜田小学校に移動中 徳島県支部：盛岡赤十字病院に移動中 島根県支部：石巻赤十字病院で活動中
14:15	救護班第1班は福島県男女共生センターに到着
14:30	救護班第1班はガイガーカウンター検査で被ばく量を確認 救護要員に被ばくなし
15:45	救護班第1班は福島県支部に移動
16:03	広島県支部は香川県支部災対本部に被災地への毛布搬送は愛媛→香川→徳島の順での積み込みを指示、宮城県へ送付



▲突然の災害で戸惑う避難者に処置をする医師

救護活動状況を本部に報告するため
記録を入力する主事▼



▲福島県支部に到着報告



▲避難者が途切れることのない救護所

・救護班の被ばくチェック・



救護班が被ばくしている可能性があることと懸念されることから、福島県支部の指示により、福島県男女共生センターでガイガーカウンターを受ける救護班。結果、被ばくはなかった。救護班は安全が確保されている環境の中で救護活動を行うことが前提である。

16:43	救護班第1班は救護班第2班の装備に文房具、カメラ、水を加えるよう依頼
17:15	救護班第1班は福島県支部に到着し班長より活動報告
18:00	福島県支部に参集中四国ブロック各県支部、日本赤十字社新潟県支部「以下、新潟県支部」で今後の救護活動を検討
18:20	愛媛県支部は毛布1,500枚の積み込みを完了し、毛布搬送トラック(4t)は香川県支部に向け出発
21:00	毛布搬送トラックが香川県支部に到着し1,000枚を積み込み
21:30	毛布搬送トラック徳島県支部に向けて出発
23:34	広島県支部は香川県支部災対本部に救護班第1班は宮城県石巻赤十字病院への移動を指示
23:54	広島県支部は香川県支部災対本部に救護班第2班は翌朝の出動を指示
23:59	本日の診療患者数70名

▼3月14日	
0:00	香川県支部災対本部は新潟県支部に救護班第2班の経路確定のため積雪情報を照会
0:30	香川県支部災対本部は高松北警察署から緊急通行車両確認証明書を受領
6:29	香川県支部災対本部は広島県支部に救護班第2班が陸路で出発することを報告
7:00	救護班第1班は石巻赤十字病院に向け出発
7:30	宮城県災害対策本部は救護班第1班に陸上自衛隊霞目駐屯地に目的地変更とdERU展開を指示
8:15	救護班第1班は蔵王PA(宮城県)に到着、石巻市立病院孤立のためSCU活動をし、後方搬送拠点となることを決定
9:30	救護班第1班は霞目駐屯地に到着、dERUの展開開始 全国からDMATチーム集結



▲ dERU 展開



▲患者を受け入れる際に時間、名前、傷病等を確認する主事



▲患者の心電図をモニターでチェックする看護師



▲霞目駐屯地の上空は患者を乗せたヘリが飛び交う



▲救護所搬入を指示する医師

滋賀県支部が到着し合同で SCU 活動▶

・SCUとは・

SCU (Staging Care Unit) とは広域搬送拠点に設置する搬送患者待機のための臨時医療施設であり、症状安定化のための処置・広域搬送のトリアージ等が実施される。今回は、石巻市内で被災した患者を仙台市の霞目駐屯地にヘリで搬送し、日赤救護班等により安定化を図る処置を施し、消防隊員が、仙台市内の病院へ搬送した。



▼ 3月14日	
10:05	香川県支部救護班第2班が陸上自衛隊霞目駐屯地に向け出発 人員：医師1名、看護師3名、薬剤師1名、主事3名 目的地：陸上自衛隊霞目駐屯地 宮城県仙台市若林区霞目 1-1-1 車両：2台（高松自動車道）
11:30	救護班第1班はdERU展開完了、DMAT隊とSCUとして運用 石巻市立病院の患者250名程度をCH47（ヘリ）で搬送予定
12:30	救護班第2班は淡路SA到着
13:20	救護班第1班は救護活動を開始
15:25	救護班第2班は京都を通過、北陸自動車道を走行予定
16:25	霞目駐屯地SCUに日本赤十字社滋賀県支部救護班「以下、滋賀県支部救護班」が到着
16:35	救護班第2班は琵琶湖北部を通過中
21:50	救護班第1班は霞目駐屯地SCU内の傷病者搬出が終了次第、受入一時終了の予定

23:59	本日の診療患者数28名
▼ 3月15日	
0:00	救護班第1班は24時間診療体制
7:15	宮城県災害対策本部は救護班第1班に霞目駐屯地での救護活動の継続と時期未定だがdERUの石巻赤十字病院での展開を指示
7:25	救護班第2班は蔵王PAを通過中
10:10	救護班第2班は霞目駐屯地に到着し救護班第1班と引継ぎ
11:00	救護班第2班は宮城県災害対策本部に霞目駐屯地で引き続き救護活動を行うことを確認
13:00	香川県支部災対本部は救護班第1班に帰着命令 帰着用車両：エステイマ、ハイエース2台、 血液運搬車計4台 現地残存車両：dERU、トラック、救急車 計3台
13:50	救護班第2班のdERUはトリアージポストに役割変更、患者受け入れは自衛隊テントとなる



▲寒さのため dERU に断熱シートを掛ける



▲患者に絶え間なく声を掛け励ます看護師



▲衛星携帯電話が被災地で威力を発揮し本部と連絡を取る



▲夜に灯りがともり dERU がランドマークになる



▲第 2 班が到着し、救護業務を引き継ぐ



▲患者を待たせないよう交代した第 2 班が診療開始



14:00	救護班第 1 班は救護活動を終え霞目駐屯地を出発
16:15	救護班第 2 班は霞目駐屯地で DMAT 隊と傷病者のトリアージ、手当、搬送について打合せ DMAT 隊は患者の手当と搬送 赤十字救護班はトリアージを担当
17:50	香川県支部災対本部は救護班第 2 班に 16 日 8 時に dERU を撤収し石巻専修大学で広島県支部救護班との救護活動を指示
20:45	救護班第 1 班は神奈川県厚木市に到着し宿泊
22:31	静岡県で震度 6 強の地震発生。救護班第 1 班、全員無事
23:59	本日の診療患者数 4 名
▼ 3 月 16 日	
0:00	救護班第 2 班は 24 時間診療体制
6:45	救護班第 2 班と滋賀県支部救護班は雪でつぶれた dERU の撤収開始
7:45	救護班第 1 班は神奈川県厚木市を出発

10:55	救護班第 2 班は dERU の撤収を完了、給油後、石巻赤十字病院へ向け出発
14:00	救護班第 1 班は名神高速道路を走行中
16:00	救護班第 2 班は石巻赤十字病院（石巻圏合同救護チーム）に到着、広島県支部救護班と合流 石巻赤十字病院：宮城県石巻市蛇田字西道下 71 石巻圏合同救護チームは救護班第 2 班に石巻専修大学で救護所開設を指示 石巻専修大学：避難者 1,000 名 宮城県石巻市南境新水戸 1
16:20	救護班第 2 班は石巻専修大学に到着、救護所の設置を開始
16:50	救護班第 1 班は香川県高松市に帰着
19:00	香川県支部災対本部は救護班第 2 班に衛星携帯電話設置を指示
22:30	救護班第 2 班は救護所を開設
22:40	救護班第 2 班は香川県支部災対本部に衛星携帯電話設置完了も室内では電波微弱のため使用困難、灯油は残存 20ℓ を報告



▲雪の重みで屋根が押し潰された dERU
救護班員は自衛隊テントで仮眠中のため、全員無事



▲雪の降る中 dERU を撤収し
次の任務へ移動



▲石巻赤十字病院へ向けて
被災地を走る救護班



▲石巻市内を瓦礫をよけながら走る



▲石巻赤十字病院は野戦病院状態

・薬を求める患者・



救護所を開設すると風邪、便秘、頭痛などを訴える被災者が早朝から列をなした。血圧や糖尿などの慢性病の薬を津波で失ったため薬を必要とする人が多く、調剤は薬剤師だけでは間に合わず、看護師と協力しながら行い対応した。

・研修医の派遣について・

臨床研修指定病院の高松赤十字病院には常に何人かの初期研修医が在籍し、将来の専門医をめざして研鑽を積んでいる。

医師生活出だしの2年間、本院で働くことを選んだ管理型募集の研修医はもとより、たまたま一定期間のみ本院に勤務することになった協力型の研修医にとっても、赤十字病院在勤中に大規模災害に直面し、救護班員として現地に赴く機会を得ることが、医師としての将来にどれほど資するものであるかは想像に難くない。

このような観点から、救護班の編成に際して積極的に研修医を組み込んだ。必ずベテラン医師とペアを組み、心身両面の安全を担保できるよう配慮した。無事に帰着した研修医達は一回り大きく見えた。

▼ 3月16日	
23:00	石巻専修大学救護所の患者受入開始
23:59	本日の診療患者数0名
▼ 3月17日	
0:00	救護班第2班は24時間診療体制
3:46	救護班第2班は香川県支部災対本部に状況報告 患者数:0名 気温:0℃以下
5:30	石巻圏合同救護チームは避難所アセスメントローラー作戦を開始
7:00	救護班第2班看護師長、主事は石巻圏合同救護チームのミーティングに参加
8:45	広島県支部救護班(広島赤十字・原爆病院)が石巻専修大学に到着し、勤務ローテーション、カルテ管理を確認
9:30	救護班第2班は広島県支部救護班と交代し待機

10:00	香川県支部救護班第3班が石巻専修大学に向け出発 人員:医師1名、研修医1名、看護師3名 薬剤師1名、主事2名 車両:2台(高松自動車道)
10:30	救護班第2班診療患者数38名
11:30	石巻圏合同救護チームは救護班第2班に灯油手配完了を報告
15:00	救護班第3班は京都桂川付近通過中、東名高速道路を經由予定
15:20	高知県支部救護班は石巻専修大学に到着 救護班第2班、広島県支部、高知県支部でミーティングの結果、救護所24時間体制のため3交代(①8時~16時、②16時~24時、③24時~8時)勤務に決定
16:30	救護班第2班は医師、看護師長、看護師の3名で石巻専修大学内を巡回診療
17:15	巡回診療終了
19:30	救護班第3班は浜名湖PAに到着
20:10	広島県支部救護班(三原赤十字病院)は石巻専修大学に到着



石巻赤十字病院 企画調整課長 阿部 雅昭

石巻圏合同救護チーム

発災直後から、全国の救護チームが石巻にも集結した。しかし、発災後1週間の時点で、救護チームの統制はとれていなかった。限られた数の救護チームが効率的に活動しなければ、この大災害にとっても対応することはできない。そこで、宮城県災害医療コーディネーターである石井医師を中心に3月18日より行政、医師会、歯科医師会、東北大学、薬剤師会、自衛隊などの関係機関と、救護チームの運営に関する調整を行った。その結果、3月20日に日赤救護班をはじめとする各組織の救護チームを一元的に統括する「石巻圏合同救護チーム」が発足した。これ以後、石巻圏に集まった救護チームは、すべて合同救護チームに参加して活動した。まさに「オールジャパン」の救護活動である。

避難所のアセスメントローラー作戦

3月16日、石巻市の避難所リストにより、市内に約300か所の避難所があることが分かった。しかし、このリストには避難所名と避難者数のみで、食料やライフラインの状況、傷病者の有無などの記述はなかった。これでは、どの避難所が逼迫した状態なのかを判断することができなかった。このとき救護チームは16チームであり、この限られた医療資源を最大限効率的に運営しないと、助かる命も助からない。そこで、救護チームによるローラー作戦を展開し、避難所を直接アセスメントしたうえで救護活動の方針を決めることにした。調査項目は、避難者数、食事状況、衛生状態、医療ニーズの有無などである。アセスメントは、救護活動が終了した9月30日まで継続し、得られたデータは毎日更新して救護活動に役立たせた。



▲広島県支部、高知県支部と打合せをしながらテントを使用せずにdERU救護所を展開



▲石巻赤十字病院ミーティングには全国の救護班が集まる



▲電気が復旧せず、発電機を利用し救護所を照らす



▲石巻専修大学内に救護所を展開し活動



▲石巻専修大学内で寒さのため身を寄せ合い交代で休む救護員

20:30	広島県支部救護班(広島赤十字・原爆病院)は撤収
21:54	救護班第2班は巡回診療の患者1名を石巻赤十字病院救急外来へ搬送
23:59	本日の診療患者数100名
▼ 3月18日	
0:00	石巻専修大学救護所は24時間診療体制
5:50	救護班第3班は国見SA(福島県)に到着
7:45	医療センター医師1名、高知県支部看護師2名、主事1名が石巻専修大学に到着し、2診体制となる
9:25	石巻圏合同救護チームは石巻市立病院医師2名、看護師3名を石巻専修大学に派遣
9:54	救護班第3班は石巻専修大学に到着
10:04	救護班第2班診療患者数50名 薬を待つ患者が増加傾向であり薬剤師不足
10:10	救護班第2班は石巻圏合同救護チームに無線で薬剤師の増援を希望も、早急な対応は無理との回答

12:00	救護班第2班と救護班第3班による引継ぎ
12:35	救護班第2班は救護活動を終え石巻専修大学を出発 経路:福島原発事故の影響から日本海側ルート
16:00	救護班第3班、広島県支部、高知県支部で深夜時間の受診数減少について対応を協議 結果:19日から7:00~19:00を通常診療、以降救急対応とする
19:45	救護班第2班は米山SA(新潟県)到着
23:00	救護班第2班は石川県金沢市に到着し宿泊
23:59	本日の診療患者数113名
▼ 3月19日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
6:20	救護班第3班は診療開始
8:00	救護班第3班は香川県支部災対本部に石巻市内の避難所への巡回診療開始予定のため宮城県、石巻市地図の手配を依頼



▲石巻圏合同救護チームミーティング



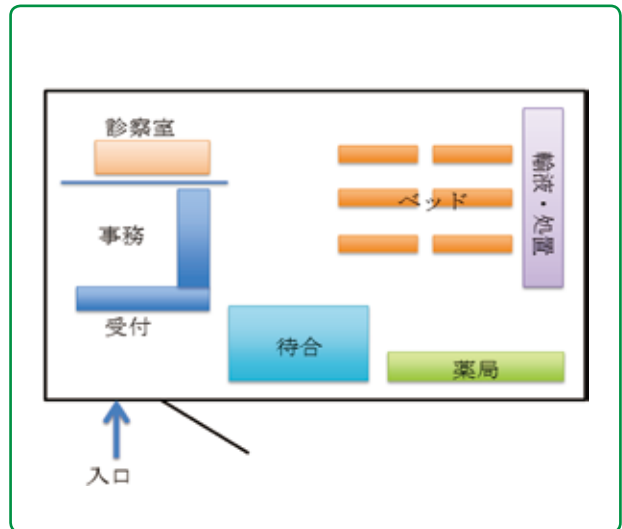
▲救護所では救護活動が始まる

・避難所の様子、アセスメントについて・

今回の地震では津波による被害が甚大であり、自宅を喪失もしくは居住不能となった多くの被災者が避難所生活を余儀なくされた。

石巻地域でも避難所数は当初 300 以上を数え、その内容も 1,000 人規模から 10 数人程度まで様々であり、中には一つの島の学校ごと移動しているところもあった。ほとんどの避難所では自律的にリーダーが発生し規律をもって管理されていた。

発災当初食料・水・暖房器具などの確保が急がれたが、時間とともに被災者のニーズは変化し排泄・洗顔・入浴など公衆衛生に関するニーズが高まった。各救護班は巡回の度に避難所のアセスメントを行い、本部はこの情報を元に速やかに救護所の様々な問題に対処していった。



▲救護班第 2 班による石巻専修大学dERU救護所のレイアウトは撤収まで変更せず

▼ 3月19日	
9:30	救護班第 2 班は石川県を出発
9:45	青森県支部救護班、島根県支部救護班、石巻市立病院医師、看護師が石巻専修大学に到着
12:00	救護班第 2 班は長浜市（滋賀県）を走行中
13:00	青森県支部、島根県支部救護班が撤収
18:50	救護班第 2 班は香川県高松市に帰着
19:20	石巻専修大学本館の電気復旧、水道は未だ回復せず
19:30	救護班第 3 班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数 151 名、風邪症状増加
▼ 3月20日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第 3 班は石巻専修大学救護所で診療開始

8:30	香川県支部救護班第 4 班が石巻専修大学に向け出発 人員：医師 1 名、研修医 1 名、看護師 2 名、助産師 1 名 薬剤師 1 名、主事 2 名 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻
9:00	石巻市立病院医師、看護師が石巻専修大学に到着
9:10	石巻専修大学避難所の避難者数 250 名程度
9:30	救護班第 3 班は宮城県立石巻商業高等学校のアセスメントに出発
11:30	救護班第 3 班はアセスメントから帰着、石巻商業高校での医療ニーズ高い
12:50	香川県支部災対本部と香川県救護班の連絡体制強化のため GMAIL (google) を使用することに決定
14:00	救護班第 4 班は秋田空港に到着
18:45	救護班第 4 班は石巻赤十字病院（石巻圏合同救護チーム）に到着



▲データ通信する医師



▲広島県支部救護班と協働で処置を施す医師



▲救護所に電気が復旧する



▲縫合処置をする医師



▲負傷部位を診察する医師

19:00	救護班第3班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
19:30	救護班第4班は石巻専修大学に到着
20:05	救護班第3班は明日撤収予定
20:40	広島県支部(三原赤十字病院)は広島赤十字・原爆病院と交代のため撤収
23:59	本日の診療患者数 108 名
▼ 3月21日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第4班は石巻専修大学救護所で診療開始
8:00	石巻圏合同救護チームは救護班第4班に山下駅付近の巡回診療を指示 山下駅:宮城県石巻市錦町5
8:20	救護班第3班と救護班第4班による引継ぎ
8:25	宮城県薬剤師会薬剤師が石巻専修大学を巡回し、薬剤不足状況を確認

9:45	救護班第3班は救護活動を終え石巻専修大学を出発 経路:秋田空港→羽田→高松空港
10:00	石巻市立病院医師、看護師が石巻専修大学に到着
15:25	救護班第3班は秋田県に到着、宿泊
19:00	救護班第4班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
19:50	石巻圏合同救護チームは公衆衛生に力を注ぐ方針
23:59	本日の診療患者数 130 名
▼ 3月22日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第4班は石巻専修大学救護所で診療開始
8:00	石巻圏合同救護チームは救護班第4班に山下駅付近、石巻商業高校の巡回診療を指示
10:00	救護班第4班はdERU機材を清掃
11:40	救護班第3班は香川県高松市に帰着



▲薬の不足は被災者の命にかかわる 石橋をたたいてわたる、薬剤在庫管理



▲被災者1人ひとりに寄りそう救護員



▲石巻合同救護チームミーティングに参加する大塚義治副社長

・衛星携帯電話・

災害時には通常電話や携帯電話が通話不能となることが懸念されることから、災害救護活動に必要な連絡手段として、衛星携帯電話を香川県支部は2機整備している。

阪神・淡路大震災では業務用無線やアマチュア無線が有効活用されたが、東日本大震災では衛星携帯電話が多く使用された。

▼ 3月22日	
13:00	救護班第4班は石巻商業高校で巡回診療、血圧測定希望者多数 石巻商業高校：避難者200名程度 スタッフ40名 宮城県石巻市南境字大樋20
16:00	救護班第4班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
19:00	救護班第4班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数83名。のどの痛み、嘔吐下痢患者増加
▼ 3月23日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第4班は石巻専修大学救護所で診療開始
8:30	香川県支部救護班第5班が石巻専修大学に向け出発 人員：医師1名、研修医1名、看護師3名 薬剤師1名、主事2名、ボランティア1名 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻

13:40	広島県支部は香川県支部災対本部に日本赤十字社秋田県支部「以下、秋田県支部」が中四国ブロックのロジステックの実施を報告
13:45	救護班第4班は石巻商業高校で巡回診療
15:50	救護班第4班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
18:49	救護班第5班は石巻専修大学に到着
19:50	救護班第5班ボランティアは室内で使用可能な衛星携帯電話を開設
20:30	救護班第4班は救護班第5班に引継ぎ完了し、救護活動を終え石巻専修大学を出発 経路：秋田空港→羽田→高松空港
22:30	救護班第5班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数134名。のどの痛み、嘔吐下痢患者増加



▲受診拒否はありません 24時間体制で診察する救護所



▲緊急出動に備えた車両の定期検査



▲1人でも多くの被災者を救うために、各県の救護班が、持ち寄る医薬品



▲安否情報を確認する被災者家族（石巻赤十字病院）



秋田県支部ロジスティック

秋田県支部 事業推進課長 碓谷 壽朗

救護活動に伴う移動のため秋田空港を経由する支部（第5ブロック各支部、三重県支部、和歌山県支部、長崎県支部）へのロジスティック支援的役割を担った。3月13日からおよそ3ヶ月にわたり、被災地の往復に伴う輸送業者の斡旋、救護車両の駐車、救護資機材や食糧の保管場所の提供、道路状況や燃料確保に関する情報の提供などを行った。直接の被害はなかった秋田県でも物流面での影響は大きく、必要な要請に充分に応えることができないもどかしさもあった。今後、すべての支部に同様の可能性があるため、全国的な視野で中継基地の整備を検討していく必要性を感じた。

▼ 3月24日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所で診療開始
9:30	救護班第5班は石巻専修大学内の巡回診療
13:00	救護班第5班は石巻商業高校で巡回診療
14:00	救護班第5班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
16:30	救護班第4班は香川県高松市に帰着
19:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数 83名
▼ 3月25日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所で診療開始
15:45	石巻赤十字病院事務支援要員（主事）1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始

18:30	香川県支部赤十字防災ボランティアリーダー会が開催され被災地、本社の活動要請への対応を協議
19:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数 106名
▼ 3月26日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所で診療開始
8:00	救護班第5班は石巻専修大学避難所代表者と打合せ
8:30	香川県支部救護班第6班が石巻専修大学に向け出発 人員：医師1名、修練医1名、看護師3名 薬剤師1名、主事2名 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻
11:00	救護班第5班は石巻商業高校で巡回診療
13:00	救護班第5班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
14:00	救護班第5班は石巻専修大学内の巡回診療



▲プライバシーに配慮した診察室



▲久々の紙カルテ



▲情報収集は積極的に



▲石巻市立病院の看護師と合同で救護所を運営



▲紙カルテから電子化 これも主事の大事な仕事

・避難所でインフルエンザが発生・

巡回先の避難所を訪れると、インフルエンザの疑いのある児童がいるとのこと。発熱・咳等の感冒症状のある2名の児童は、避難所先の高校の職員によって、他の避難者と別室で過ごす対策がとられていた。簡易インフルエンザ検査キットで2名とも陽性反応が検出。小児科医師により、イナビルが処方され、薬剤師により吸入指導が行われた。速やかな対応により、インフルエンザの蔓延を予防することができた。

・赤十字救護班は自己完結型・



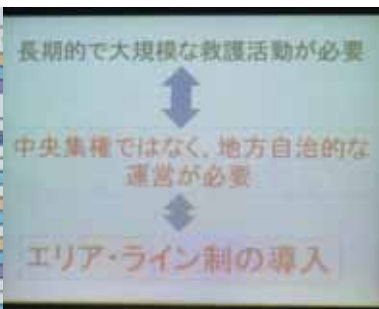
赤十字救護班は全て自己完結型の救護が鉄則である。被災地で被災者に配る炊き出しを救護班が食べることはできない。
あご：食事 あし：交通手段 まくら：寝床 全て自分持ち！

▼ 3月26日	
15:30	救護班第5班は石巻市街地の巡回診療
17:30	救護班第5班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
19:00	救護班第5班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
19:20	救護班第6班は石巻専修大学に到着し、救護班第5班と引継ぎ
21:00	救護班第5班は救護活動を終え石巻専修大学を出発、ボランティア1名は残る 経路：秋田空港→羽田→高松空港
23:59	本日の診療患者数 129名
▼ 3月27日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第6班は石巻専修大学救護所で診療開始
10:30	香川県支部赤十字ボランティアリーダー1名は本社ボランティアに登録
10:40	救護班第6班は寝袋10個を天日干し

18:00	石巻圏合同救護チームは石巻専修大学を14ブロックのエリアのうち2ブロックに所属することを決定
18:10	救護班第5班は香川県高松市に帰着
19:00	救護班第6班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数 145名
▼ 3月28日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第6班は石巻専修大学救護所で診療開始 石巻圏合同救護チームは石巻圏を14のエリアに分割するエリアライン制による救護を開始
9:00	香川県支部災対本部は広島県支部と石巻専修大学ラインの維持を協議、今後、最大4班が同時に救護活動の可能性あり
9:30	救護班第6班は石巻商業高校で巡回診療、インフルエンザ陽性患者あり
11:30	救護班第6班は石巻市街地を巡回診療

石巻圏合同救護チーム エリアおよびライン（20110328）

エリア	地域名	主な避難所	エリア隊長	必要チーム数	エリア担当	3/28 (月)	3/29 (火)	3/30 (水)	3/31 (木)	4/1
1	石巻地区	川崎小 野田中 野田小	伊藤 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					
2	石巻圏東部地区	石巻専修大 石巻専修大 石巻専修大	伊藤 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					
3	石巻圏中部地区	野田小 野田中 野田小	伊藤 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					
4	石巻圏西部地区	門田中 注文小 注文小	高橋 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					
5	大崎圏東部地区	新玉川 大崎圏東部 大崎圏東部	長瀬 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					
6	大崎圏西部地区	長瀬小 長瀬中 長瀬小	長瀬 誠	3	石巻赤十字病院 石巻専修大学 石巻専修大学					



▲石巻圏合同救護チーム エリアおよびライン表



エリアライン制

石巻赤十字病院 企画調整課長 阿部 雅昭

全国から石巻圏に参集した救護チームは、1日最大で59チームに達した。救護チームの活動は、石巻赤十字病院の診療支援、300か所を超える避難所の巡回、定点救護所活動があり、毎日の業務分担を本部が決定するのは困難を極めた。そこで、避難所の分布や、重点避難所の数などを基に、石巻圏（石巻市、東松島市、女川町）を14のエリアに分け、エリアごとの必要に応じて救護チームを割り振り、活動についてはエリア内で決めてもらった。

さらに、継続的に活動してもらうため、派遣元の組織で同じエリアを担当してもらうラインも作った。このエリアライン制によって、本部の業務は大幅に軽減され、また、後続チームへの情報伝達もスムーズに行われた。



▲被災地では、全てを自分で確認（超音波検査装置を確認する医師）



▲28日道路に瓦礫は無くなるが、信号はまだ復旧していない

13:00	救護班第6班は巡回診療から石巻専修大学に帰着、香川県支部災対本部はボランティアに石巻専修大学に4班分の寝所確保を指示
14:00	救護班第6班は石巻専修大学内の巡回診療
15:00	救護班第6班は石巻専修大学避難所代表者と打合せ
19:00	救護班第6班は石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制とする
23:59	本日の診療患者数 101名
▼3月29日	
0:00	石巻専修大学救護所は救急体制
7:00	救護班第6班は石巻専修大学救護所で診療開始
11:00	香川県支部赤十字ボランティアは第1回香川県災害ボランティアバスの申込を検討
12:00	現地香川県支部ボランティアは石巻専修大学内に4部屋の寝所を確保
17:45	香川県支部赤十字ボランティア1名、本社ボランティア登録を検討（3月31日登録）

19:00	救護班第6班は救護活動を終え石巻専修大学を出発、ボランティア1名は残る 経路：秋田空港→羽田→高松空港 本日の診療患者数 133名
▼3月30日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
16:00	広島県支部は香川県支部災対本部に広島県支部手配のトラックで被災地に救援物資（緊急セット、安眠セット）搬送を指示 緊急セット 安眠セット 香川県支部 180個 280個 愛媛県支部 480個 200個 徳島県支部 84個 180個 高知県支部 420個 200個
17:30	石巻赤十字病院事務支援要員は業務終了
17:55	救護班第6班は香川県高松市に帰着
19:00	香川県支部赤十字ボランティア6名は第1回香川県災害ボランティアバスに参加申請



▲救護記録や患者データを入力する主事



▲防災ボランティアリーダーが現地に残ることで、救護班同士の隙間を埋める重要な存在となる (3月23日～4月12日)



▲こころ温まる応援メッセージ

・中国・四国各県支部が合同で石巻専修大学dERU救護所を運営・



これまで、香川県支部救護班は、香川県支部へ引継ぎをしていたが、今後は他県支部へ引継ぎ、中国・四国各県支部合同で石巻専修大学救護所 dERU を運営していくことになる。資機材、医薬品、通信機器等はもちろん患者データ等も慎重に引継ぎを行うことになる。

▼ 3月31日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
15:00	香川県支部災対本部は高松赤十字病院に救護材料（医薬品）の準備を指示
15:25	香川県支部災対本部は島根県支部救護班に石巻専修大学救護状況を照会
▼ 4月1日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
8:20	香川県支部救護班第7班が石巻専修大学に向け出発 人員：医師1名、修練医1名、看護師3名、助産師1名、薬剤師1名、主事2名 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻
10:30	石巻専修大学救護班（島根県支部救護班）は香川県支部災対本部に単独（益田赤十字病院）で診療中と報告

12:15	香川県支部災対本部は救護班第7班に活動場所が石巻赤十字病院救急外来支援の可能性を示唆
19:00	石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制となる
19:15	救護班第7班は石巻専修大学に到着し香川県赤十字ボランティアと合流
20:30	石巻圏合同救護チームは救護班第7班に明日17:00～24:00の石巻赤十字病院救急外来支援を指示
▼ 4月2日	
7:00	石巻専修大学救護所で診療開始
10:20	香川県支部赤十字ボランティア5名は第1回香川県災害ボランティアバス参加のため香川県支部に集合
11:25	第1回香川県災害ボランティアバスは香川県知事の激励後、石巻専修大学に向け出発
14:00	救護班第7班は石巻赤十字病院救急外来支援に備えて仮眠
17:00	救護班第7班は石巻赤十字病院救急外来支援を開始



▲石巻赤十字病院支援要員との引継ぎ

・日赤のこころのケアとは・

災害は人々の生命や財産に多くの被害をもたらすが、同時に心にも大きな傷を残すことになる。それが引き金となり、時に体調の変化など身体的な症状となって表れることがある。

日本で「こころ」の問題が一般に注目されるようになったのは、平成7年の阪神・淡路大震災。日本赤十字社のこころのケアは、すべての被災された方々及び援助する側を対象とし、精神科医等の専門家の治療を必要とする状態に至ることを防ぐこと、そして必要と思われる場合は専門家への引継ぎをスムーズに行うことを目的としている。

・被災地に早く届け！・

3月13日に広島県支部の指示により、四国4県支部でトラックをチャーターし宮城県へ送付（1回目）

毛布	
愛媛県支部	1,500 枚
高知県支部	500 枚
香川県支部	1,000 枚
徳島県支部	1,000 枚

3月30日に広島県支部の指示により、四国4県支部でトラックをチャーターし宮城県へ送付（2回目）

	緊急セット	安眠セット
愛媛県支部	480 個	200 個
高知県支部	420 個	200 個
香川県支部	180 個	280 個
徳島県支部	84 個	180 個



▲香川県支部から宮城県に送られる救援物資



（安眠セット）

（毛布）

【緊急セット】

- タオル
 - 軍手
 - 歯ブラシ
 - 携帯ラジオ
 - 懐中電灯
 - その他 20 点
- ※ 1 セット = 1 世帯（4 人）分



17:25	第1回香川県災害ボランティアバスは神奈川県を走行中
18:00	石巻圏合同救護チームは救護班第7班に明日17:00～24:00の石巻赤十字病院救急外来支援を指示
19:00	石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制となる
▼ 4月3日	
0:00	救護班第7班は石巻赤十字病院救急外来支援を終了、診療患者数74名
6:00	第1回香川県災害ボランティアバスは石巻専修大学に到着
7:00	石巻専修大学救護所で診療開始、救護班第7班は石巻専修大学内の巡回診療
11:27	石巻赤十字病院支援要員（こころのケア）1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
14:00	救護班第7班は石巻赤十字病院救急外来支援に備えて仮眠

16:40	香川県赤十字ボランティア5名は4件のボランティア要請を完了し石巻専修大学内ボランティアセンターに帰着
17:00	救護班第7班は広島県支部救護班、長崎県支部救護班等の応援を得て石巻赤十字病院救急外来支援を開始
19:00	石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制となる
▼ 4月4日	
0:00	救護班第7班は石巻赤十字病院救急外来支援を終了、診療患者数75名
7:00	石巻専修大学救護所で診療開始
9:00	救護班第7班は石巻商業高校で巡回診療
10:40	救護班第7班は巡回診療から石巻専修大学に帰着
13:00	救護班第7班は石巻専修大学内の巡回診療
15:00	石巻赤十字病院支援要員（助産師）1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
15:40	救護班第7班は巡回診療から石巻専修大学に帰着



▲慌しさが続く石巻圏合同救護チーム本部



▲外来で患者カルテより情報を収集する看護師



▲患者を受け入れる為、急遽検診センターを救急外来にかえる



▲本部に連絡を取り指示を仰ぐ班長



▲ボランティア活動の受付ブース
(宮城県塩釜市災害ボランティアセンター)

▼ 4月4日	
19:00	救護班第7班は救護活動を終え石巻専修大学を出発、ボランティア1名は残る 本日の診療患者数 28名 経路：秋田空港→羽田→高松空港
▼ 4月5日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
11:15	救護班第7班は香川県高松市に帰着
▼ 4月6日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
10:45	本社ボランティア登録の香川県支部赤十字ボランティアは宮城県支部ボランティアセンターに移動中
14:26	本社ボランティア登録の香川県支部赤十字ボランティアは宮城県支部到着

20:05	香川県赤十字ボランティア（宮城県支部）は明日の東松島市の泥出しに参加予定
▼ 4月7日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
5:25	香川県赤十字ボランティア（宮城県支部）は東松島市から亘理に活動場所変更 山元町でボランティアニーズが高いも遺体捜索中のため活動不可
9:00	石巻圏合同救護チームは香川県支部災対本部に9日以降でdERUの撤収と虻田、石巻専修大、石巻ロイヤル病院での救護活動を指示
9:30	香川県支部災対本部は香川県支部赤十字ボランティア（石巻専修大）にdERU撤収準備を指示
10:30	香川県支部赤十字ボランティアは本社ボランティアセンターに到着



▲救護所閉鎖をお知らせする張り紙



▲毛布や寝袋を干して救護員の衛生管理に留意



▲診察する傍ら片付する救護班



▲救護所の閉鎖前には各県の救護班が持ち込んだ大量の医療材料の整理が必要であった

13:53	石巻赤十字病院支援要員(こころのケア)は業務終了
23:50	宮城県で震度6強の地震、香川県支部赤十字ボランティア(石巻専修大学)は香川県支部災対本部に衛星携帯電話にて無事を報告
▼4月8日	
0:00	香川県支部赤十字ボランティアは石巻専修大学で活動中
8:15	香川県支部救護班第8班が石巻専修大学に向け出発 人員:医師2名、看護師3名、薬剤師1名、主事2名 経路:高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻
14:40	救護班第8班は秋田県支部(ロジスティック)に到着
15:05	救護班第8班は秋田県支部出発も昨夜の地震の影響で水沢IC-古河ICまで高速不通、4号線は大渋滞
22:00	救護班第8班は石巻専修大学に到着し香川県赤十字ボランティアと合流、石巻専修大学救護所は11日に閉鎖予定、石巻ロイヤル病院への転院対応となる
23:00	救護班第8班は高知県支部救護班とミーティング

▼4月9日	
7:00	石巻専修大学救護所で診療開始
8:00	石巻圏合同救護チームは救護班第8班に石巻ロイヤル病院救護所での日勤勤務を指示、併せて石巻専修大学救護所は4月11日で閉鎖を検討中
9:30	救護班第8班は石巻ロイヤル病院救護所に到着し、大分県支部救護班と引継ぎ、石巻ロイヤル病院入院患者4名と少数のため巡回診療の実施を決定 ロイヤル班:石巻ロイヤル病院班5名(医師、看護師2名、薬剤師、主事) 専修大班:石巻専修大学班3名(医師、看護師、主事)
11:00	石巻赤十字病院支援要員(助産師)は業務終了
12:00	専修大班は石巻専修大学に到着
13:05	専修大班は高知県支部救護班と診療開始、4月11日の閉鎖を広報
13:45	ロイヤル班は石巻赤十字病院から褥瘡患者1名を受入



▲dERUのコンテナに救護所の資機材を片付ける



▲救護所を撤収した後の石巻専修大学



▲ 4月10日 雪も解け東北に遅い春が訪れる



石巻専修大学避難所閉鎖について

石巻専修大学 事務課長 尾崎 由明

東日本大震災の発生後、本学は指定避難所ではなかったものの、建物に大きな損傷も無く、また、津波による浸水からも免れていたことから、指定避難所と同様に避難者の受け入れに協力いたしました。しかしながら、受け入れから僅か数日で避難者は1,000名を超え、その対応への疲労感と、更に持病や体調不良を訴える方から治療や薬などの要望を受け、これに応えることが出来ない無力感もありました。その様な状況の中、本学体育館へ日本赤十字社様の救護所が設置された時は、本当に安堵いたしました。それから約1ヶ月後の4月11日に救護所は閉鎖となりましたが、私を含め多くの石巻地域住民が、貴社の救護活動に深い感謝の念を抱いたことと思います。本当に有難うございました。

▼ 4月9日		▼ 4月11日	
19:00	石巻専修大学救護所の診療終了、以降救急体制となる	16:00	巡回診療班は石巻専修大学内の巡回診療
19:50	医療センター救護班は石巻ロイヤル病院救護所に到着しロイヤル班と引継ぎ	16:30	巡回診療班は石巻専修大学救護所に帰着
20:45	ロイヤル班は石巻ロイヤル病院救護所を出発	17:00	石巻専修大学救護所は閉鎖、本日の診療患者数 68 名
21:30	ロイヤル班は石巻専修大学に到着	20:30	救護班第 8 班は救護機材の片づけ
23:59	本日の診療患者数 37 名	23:59	救護機材の片づけ一旦終了
▼ 4月10日			
7:00	石巻専修大学救護所で診療開始、本日の活動終了後には救護所閉鎖のため 17 時まで診療予定、救護班第 8 班は石巻専修大学救護所、石巻商業高校等巡回診療の 2 班で活動	9:00	救護班第 8 班は石巻専修大学救護所閉鎖のため dERU 機材等の片づけ開始
11:00	巡回診療班は石巻商業高校、開北小学校、中里小学校で巡回診療	11:50	香川県支部災対本部は石巻圏合同救護チームの要請により dERU を石巻赤十字病院で待機とする
13:30	巡回診療班は石巻専修大学救護所に帰着	12:30	救護班第 8 班は医薬品・物資の収納を完了
		13:00	主事、ボランティアは石巻赤十字病院駐車場テントに備品搬入
		15:00	香川県支部使用のストーブは石巻専修大学ボランティアセンターに寄贈

・褥瘡(じょくそう)について・



褥瘡(床ずれ)とは、ベッドやいすなどと接触する体の部分(主に、骨突出部)の皮膚が長時間続けて圧迫されることで、皮膚や皮下組織などが死んでしまった状態である。

長時間の圧迫により、皮膚や皮下組織への血流が悪くなり、酸素や栄養がいきわたらなくなるために起こる。主に自分で寝返りや体を動かすことが出来ない人に起こる。褥瘡の予防のためには、除圧(体にかかる圧を分散させる)のためのマットや介護者や看護師などによる体位変換(体の向きや姿勢を変える)が不可欠である。

しかしながら、震災で不自由な避難生活を強いられた現地の方などは、寒い中、硬い地面や床などの上であまり身動きのとれない状況下での生活であり、また、十分な体位変換を受けられない状況であったため、褥瘡の発生が多かったと言われている。



▲引継ぎは確実に(石巻ロイヤル病院救護所)

・放射線被ばくについて・

放射線の被ばくは大きく分けて、外部被ばくと内部被ばくとに分けることができる。

【外部被ばくの特徴】

- 体外にある線源から、到達距離の長い放射線(主にガンマ線)の照射を受けた場合をいう。
- 被ばく線量の評価は比較的容易であり、放射線防護の3原則(被ばく時間を短くする・距離をとる・遮蔽する)を実施することで、その後の被ばくについては軽減することができる。

【内部被ばくの特徴】

- 体内に取り込まれた線源から、到達距離の短い放射線(主にアルファ線、ベータ線)の照射を受けた場合をいう。
- 一度体内に入ると防護できない。被ばく線量の評価が難しい。
- 体外に排出されるまで放射線を出し続けるため、外部被ばくよりも深刻な影響を受ける可能性がある。

以上より、緊急時にはまず内部被ばくをできる限り避けることが重要。対策としてマスクをすることは個人レベルでの被ばく軽減に有効な手段である。

15:40	救護班第8班は石巻専修大学救護所の撤収作業を完了し、石巻赤十字病院へ移動
16:10	石巻赤十字病院に到着し終了報告
19:50	救護班第8班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路:秋田空港→羽田→高松空港
▼ 4月12日	
11:15	救護班第8班は香川県高松市に帰着
▼ 4月13日	
12:00	福島原発事故放射線サーベイ要員(放射線技師)1名は福島県に到着し放射線被ばく者の検査を開始
▼ 4月14日	
15:00	石巻赤十字病院支援要員(助産師)1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始

▼ 4月15日	
	本社は今後の救護班に「こころのケアチーム」の同行を指示
▼ 4月16日	
17:20	福島原発事故放射線サーベイ要員(放射線技師)は業務終了
▼ 4月19日	
17:23	石巻赤十字病院支援要員(救急外来看護師)1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
17:27	石巻赤十字病院支援要員(助産師)は業務終了
▼ 4月20日	
8:30	香川県支部救護班第9班が石巻赤十字病院に向け出発 人員:医師2名、看護師3名、薬剤師1名 主事2名 経路:高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻

・SSB(ショートステイベース)・

石巻圏においてさまざまな理由で一般の避難所で生活することが困難、あるいは隔離することが望ましい避難者が一時的に入所する施設が必要となり、救急車や巡回診療班から直接入所依頼できるように考えられたのがSSBである。

インフルエンザ患者や病院から直接避難所に退院するには不安がある方、要介護の独居高齢者などが一時入所。

スタッフは救護チームが半日や1日で交代し入所者の生活全般の援助から精神的ケアまでを行った。



▲ショートステイベースに入院した患者に声を掛ける看護師



▲救急車が入れない道路は歩いて救援に向かう



▲牡鹿半島の巡回診療を行う皮膚科医師

▼ 4月20日	
19:00	救護班第9班は石巻圏合同救護チームに到着報告、活動エリアはエリア15(石巻ロイヤル病院SSB(ショートステイベース))となる
21:00	救護班第9班は石巻赤十字病から宿泊施設コロボックルハウスへ移動
21:40	救護班第9班はコロボックルハウスに到着
▼ 4月21日	
7:10	救護班第9班はコロボックルハウスを出発
7:40	救護班第9班はSSBに到着し日勤勤務 2交代制:日勤8:00~20:00、夜勤20:00~8:00
9:00	石巻好文館高等学校避難所医師からインフルエンザ疑いの患者の受入要請
9:45	インフルエンザ疑い患者は避難所近隣の診療所受診対応となりキャンセル
10:50	SSB入院患者1名が退院、大街道小学校避難所に戻る

11:35	石巻圏合同救護チームは救護班第9班に4月22日は救護班を2分し、SSB夜勤と牡鹿半島巡回診療を指示
20:50	救護班第9班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数5名(入院患者)
▼ 4月22日	
7:00	救護班第9班はコロボックルハウスを出発
7:40	救護班第9班は石巻赤十字病院に到着
9:00	救護班第9班は牡鹿半島巡回診療に出発
10:00	救護班第9班は洞源院で巡回診療 洞源院:避難者150名 石巻市渡波仁田山2
12:30	看護師はサンファンパークでニーズ調査し数名を洞源院にて診察
13:00	救護班第9班は祝田第一避難所で巡回診療
14:40	祝田第一避難所での巡回診療を終了
17:00	救護班第9班は石巻赤十字病院へ帰着

・冠水道路を避けて・

石巻市内から牡鹿半島への道路は地盤沈下と大潮の時期が重なり冠水するポイントがいくつかあった。
満潮時の前後2時間は車両が通行できない状態となるため、満潮が近づくと周辺の道路では深刻な渋滞が発生していた。
そのため牡鹿半島での巡回診療は、他の救護チームや自衛隊からもらった冠水ポイントや道路崩落などの情報と満潮時間を参考に巡回ルートとスケジュールを決めた。



▲他の救護チームも到着し被災者に行きとどいた救護活動を展開



▲石巻圏合同救護チーム本部に任務終了を報告する

20:00	救護班第9班はSSBで夜勤 20:00～22:30は4名(医師、看護師、薬剤師、主事) 22:30～8:00は2名(医師、看護師)
20:50	救護班第9班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数26名(洞源院19名、祝田7名)
▼4月23日	
0:00	SSBで夜勤中 本日、夜勤班と雄勝町巡回班に分かれて活動
8:00	夜勤班はSSBに医療センター救護班が到着し引継ぎ、雄勝町巡回班はコロボックルハウスを出発
8:50	夜勤班はコロボックルハウスに到着し休息
9:10	雄勝町巡回班は石巻市雄勝支所に到着
11:30	夜勤班はコロボックルハウスを出発し石巻赤十字病院へ移動
11:50	雄勝町巡回班は救護活動を終了し石巻赤十字病院へ移動

13:30	夜勤班、雄勝町巡回班は石巻赤十字病院で合流 本日の診療患者数4名(入院患者)
14:30	救護班第9班は石巻圏合同救護チームに終了報告
15:10	救護班第9班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路:秋田空港→羽田→高松空港
▼4月24日	
11:15	救護班第9班は香川県高松市に帰着
15:00	石巻赤十字病院支援要員(救急外来看護師②)1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
18:00	石巻赤十字病院支援要員(救急外来看護師①)は業務終了
▼4月25日	
10:03	現地広報支援要員1名は宮城県支部に到着し業務開始



▲避難所で血圧を測定する救護員



▲被災者の体調を優しく聴きとる医師



▲薬が正しく飲めているか確認する医師



▲子どもとふれあう救護員

▼ 4月28日	
9:35	香川県支部救護班第10班が石巻赤十字病院に向け出発 人員：医師1名、修練医1名、看護師3名 薬剤師1名、主事2名 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻
18:30	救護班第10班は石巻圏合同救護チームに到着報告、活動エリアは渡波小学校避難所となる
▼ 4月29日	
6:35	救護班第10班はコロボックルハウスを出発
7:50	救護班第10班は渡波小学校に到着 渡波小学校：避難者400名 石巻市渡波町1-5-22
10:00	渡波小学校救護所外来担当と巡回担当に分れて救護活動を開始 救急外来担当：医師、看護師2名、主事 巡回担当：医師、看護師、薬剤師、主事
12:00	午前の救護活動終了

13:00	午後の救護活動を外来担当と巡回担当に分れて開始
14:00	巡回診療は終了
15:00	外来診療は終了
15:40	救護班第10班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
17:10	救護班第10班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティングに参加
17:45	石巻赤十字病院支援要員（救急外来看護師②）は業務終了
18:35	救護班第10班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
19:00	救護班第10班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数59名
▼ 4月30日	
7:30	救護班第10班はコロボックルハウスを出発
8:40	救護班第10班は渡波小学校に到着



▲避難所内を巡回し手当する救護班



▲道ですれ違う被災者に声をかけ体調を気遣う看護師



▲香川県レスキューサポートバイク赤十字奉仕団から預かった応援メッセージを渡す

・日赤本社広報支援の派遣・



本社広報支援として宮城県に香川県支部から1名(第5ブロックから計2名)派遣した。被災地で活動する救護班や赤十字ボランティアの取り巻く状況を新聞各社に情報提供するとともに、日赤本社のホームページに掲載する記事を現場で取材し、作成することが任務であった。救護とは全く異なり、被災者に声をかけながら記録を取る広報の取材は困難を極めた。上記写真は派遣された職員が撮影したもので、「石巻赤十字病院の100日間」という書籍に掲載された。

10:00	救護班第10班は渡波公民館の巡回診療を開始
12:00	巡回診療終了
13:00	救護班第10班はJA石巻渡波支店の巡回診療を開始
14:30	巡回診療終了
15:00	救護班第10班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
16:45	救護班第10班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティングに参加
18:30	救護班第10班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
19:10	救護班第10班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数18名
▼5月1日	
7:30	救護班第10班はコロボックルハウスを出発、本日最終日のため午前のみ救護活動

8:30	救護班第10班は渡波小学校に到着
9:00	救護班第10班は渡波小学校避難所外来診療を開始
12:00	午前の外来診療終了、診療患者数32名
12:20	救護班第10班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
12:50	救護班第10班は石巻圏合同救護チームに終了報告
14:00	救護班第10班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路：秋田空港→羽田→高松空港
▼5月2日	
11:10	救護班第10班は香川県高松市に帰着
15:11	現地広報支援要員は業務終了
▼5月4日	
17:29	石巻赤十字病院支援要員(薬剤師①、臨床工学技士(透析))各1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始



▲エリア幹事を中心としたミーティング



発災から2ヶ月が経ち、渡波地区の小学校周辺にある避難所では数人の被災者の方がいるだけでほとんどの方が家の片付けに出ており、残っているのはご高齢の方がほとんどである。避難所ではボランティアがお風呂をわかし、被災者の心と体を癒してくれる。また、配給を受けたり、炊き出し当番がきめられ、それぞれの食事をお互いに協力して支え合って過ごしている状況であった。



▲徹底した管理のもと被災者の方々に薬剤を届ける

▼ 5月9日			
8:30	香川県支部救護班第11班(こころのケア班帯同)が石巻赤十字病院に向け出発 人員：医師1名、修練医1名、看護師2名、薬剤師1名、主事1名、こころのケア班3名(看護師2名、主事1名) 経路：高松空港→羽田→秋田空港→陸路で石巻	8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング、班員3名は門脇中学校、渡波小学校、石巻赤十字病院内リフレッシュルームで活動
17:38	石巻赤十字病院支援要員(薬剤師①、臨床工学技士(透析))は業務終了	9:10	救護班第11班は渡波小学校に到着、渡波中学校の巡回診療を担当
18:50	救護班第11班は石巻圏合同救護チームに到着報告、活動エリアは渡波小学校避難所となる こころのケア班は救護班と別行動となる	10:15	渡波中学校救護所に到着し救護活動を開始 渡波中学校：避難者45名 石巻市渡波浜曾根山1
21:10	救護班第11班はコロボックルハウスに到着、こころのケア班は岡山県支部と引継ぎ	15:20	救護班第11班は渡波小学校に到着
▼ 5月10日		16:30	救護班第11班は石巻赤十字病院に到着
6:50	救護班第11班はコロボックルハウスを出発	17:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング
7:25	救護班第11班は石巻赤十字病院に到着、救護班とこころのケア班は別行動となる	18:00	こころのケア班は活動終了
		18:30	救護班第11班は本部ミーティングに参加、翌日は石巻赤十字病院救急外来支援準夜を担当
		19:30	救護班第11班はコロボックルハウス到着
		19:50	こころのケア班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数2名、こころのケアに関わった人数39名



▲聴診器を背中にあて、診察をする医師



▲お薬手帳を使って薬の説明をする薬剤師



▲石巻赤十字病院救急外来で診察する医師



▲段ボールで仕切ったの避難所生活

▼ 5月11日		▼ 5月12日	
6:30	こころのケア班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動	6:30	こころのケア班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動
7:00	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着	6:55	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 門脇中学校で活動	8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 本日も門脇中学校で活動
14:30	こころのケア班は活動終了	8:30	救護班第 11 班はコロボックルハウスを出発
16:00	救護班第 11 班は石巻赤十字病院に到着	9:30	救護班第 11 班は渡波小学校に到着し、渡波保育所で巡回診療 渡波保育所：石巻市大宮町 3-15
17:00	救護班第 11 班は石巻赤十字病院救急外来支援を開始 こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング	11:30	巡回診療終了
19:55	こころのケア班はコロボックルハウス到着 本日のこころのケアに関わった人数 27 名	13:00	救護班第 11 班は渡波中学校で巡回診療
		14:05	こころのケア班は活動終了
		15:10	救護班第 11 班は巡回診療終了
		17:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング
		18:00	救護班第 11 班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティング に参加



▲避難所で一人ひとりに声をかけて
こころのケア活動をする



▲こころのケア活動報告をまとめる



▲こころのケアチームでは情報共有が欠かせない



リフレッシュルームは、震災直後から院内応接室を開放し、石巻赤十字病院職員のみを対象として運用が開始された。室内では、アルファ波を発生するBGMを流し、全身リンパマッサージやアロマを使用した足湯、ハンドマッサージを提供した。ルームに設置しているノートには、訪室者の「生きているだけでいい」、「自分だけが生き残ってしまった」など、さまざまな思いが記載されていた。

▼ 5月12日	
19:25	救護班第11班、こころのケア班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 17名、こころのケアに関わった人数 19名
▼ 5月13日	
6:45	こころのケア班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動
7:10	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着
7:30	救護班第11班はコロボックルハウスを出発
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 門脇中学校で活動
8:30	救護班第11班は渡波小学校に到着、外来診療と巡回診療に 分れて救護活動
9:00	巡回診療班は渡波公民館で巡回診療

	香川県支部災対本部は dERU 撤収の準備を開始 先行班： 人員：6名 県支部ボランティア 期間：5月13日～16日 目的：dERU 撤収のための準備とボランティア活動
9:15	撤収班： 人員：5名 支部職員2名 県支部ボランティア3名 期間：5月21日～28日 目的：dERU 撤収と救護班のサポート
10:00	巡回診療終了し渡波小学校避難所外来診療開始
11:00	dERU 撤収先行班が石巻市に向け出発 車両：1台
11:25	こころのケア班は活動終了、こころのケアに関わった人数 19名
12:00	外来診療終了、診療患者数 25名
12:40	救護班第11班（こころのケア班帯同）は石巻圏合同救護チーム に終了報告
13:50	救護班第11班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路：秋田空港→羽田→高松空港



▲香川県台風災害での経験を生かし被災地でボランティア活動



▲石巻赤十字病院で支部資機材の整理



▲埃や臭いのためマスクが欠かせない



▲石巻から 17 時間かけて帰着し、持ち帰った資機材を片付ける

23:30	dERU 撤収先行班は新潟県を走行中
▼ 5 月 14 日	
5:40	dERU 撤収先行班は石巻赤十字病院に到着
8:30	dERU 撤収先行班は石巻専修大学内ボランティアセンターに到着、大街道南 4 丁目でボランティア活動
14:55	救護班第 11 班は高松市に帰着
15:00	ボランティア活動終了 本日、ボランティアは車中泊
▼ 5 月 15 日	
8:30	dERU 撤収先行班は石巻専修大学ボランティアセンターに到着 本日ボランティア活動後、dERU 一部撤収
9:30	大街道南 4 丁目でボランティア活動
15:30	ボランティア活動終了し石巻赤十字病院到着、dERU 撤収準備

16:37	dERU 撤収先行班は dERU 機材の一部撤収のため石巻赤十字病院を出発 撤収機材：発電機 5 台、パイプ TENT
23:53	dERU 撤収班は北陸自動車道米山 SA に到着
▼ 5 月 16 日	
11:00	dERU 撤収先行班は香川県高松市に到着し機材を片づけ
▼ 5 月 21 日	
9:10	dERU 撤収班は石巻経由で秋田空港へ向け出発 車両：1 台 後発の救護班第 12 班と秋田空港で合流予定
15:20	dERU 撤収班は北陸自動車道小矢部 PA 到着
23:00	dERU 撤収班は石巻赤十字病院等到着し車両 3 台を点検、 秋田合流班は秋田空港へ向け出発 秋田合流班：車両 2 台 支部職員 2 名 県支部ボランティア 1 名 ボランティア班：県支部ボランティア 2 名



▲ 2ヶ月以上被災地で救護に使用した車両（dERU）



▲ 撤収班が秋田空港まで救護班を迎えに行く

・撤収班の業務・

石巻赤十字病院に駐車してある国内型緊急対応ユニット（dERU）、救急車、トラック、救護資機材等を撤収するために、現地入りした。救護班が秋田空港から石巻市に移動する車両が無いことから、撤収班が救護班の送迎も行った。



▲ 石巻赤十字病院で救護活動の確認



▲ 2ヶ月使用した救護資機材の確認

・宿舎の予約が取れない・



撤収班の任務には、今後の宿泊施設を確保することもあげられた。なるべく石巻市内で検索するも空いている宿泊施設は1軒もなく、全国から集まった救援関係者や業者関係の方が全て押さえていた。また被災している宿泊施設も多く、被害の甚大さを改めて実感させられると同時に多くの仲間が石巻に集結していることに勇気付けられた。

▼ 5月22日	
4:43	dERU 撤収班は秋田空港に到着し、仮眠
8:30	香川県支部救護班第12班（こころのケア班帯同）が石巻赤十字病院に向け出発 人員：医師1名、修練医1名、看護師2名、薬剤師1名、主事1名、こころのケア班3名（看護師2名、主事1名） 経路：高松空港→羽田→秋田空港でdERU 撤収班と合流→陸路で石巻
9:30	ボランティアは石巻専修大学ボランティアセンター到着 本日、大街道南地区でボランティア活動
12:50	救護班第12班は秋田空港に到着し、dERU 撤収班と合流
16:00	ボランティアは活動を終了
18:30	救護班第12班は石巻圏合同救護チームに到着報告、活動エリアは渡波小学校避難所、こころのケア班は明日決定
20:20	救護班第12班はコロボックルハウスに到着

▼ 5月23日	
6:40	救護班第12班はコロボックルハウスを出発
7:10	救護班第12班は石巻赤十字病院に到着 救護班とこころのケア班は別行動
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 本日は別々に石巻中学校、門脇中学校、渡波小学校で活動
8:11	救護班第12班は渡波小学校避難所に到着
9:30	ボランティアは石巻専修大学ボランティアセンター到着 本日、拾喰地区でボランティア活動
10:00	渡波小学校救護所で救護活動を開始
12:00	午前の救護活動終了
12:30	午後は雨天のためボランティア活動中止
13:00	午後の救護活動を開始
15:35	こころのケア班は活動終了
16:15	午後の救護活動終了



▲被災者から津波に襲われた当時の状況を聞く



▲救急車に乗り込み救護所へ



▲避難所で体調を気遣いこころのケアを実施



▲被災地でルートを確認する

17:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング
17:02	救護班第 12 班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
17:30	救護班第 12 班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティングに参加
19:00	救護班第 12 班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
19:35	救護班第 12 班はコロボックルハウス到着
20:00	こころのケア班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 48 名 こころのケアに関わった人数 52 名
▼ 5 月 24 日	
6:45	救護班第 12 班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動
7:10	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 本日は 2 班にわかれ門脇中学校、渡波小学校で活動

8:15	救護班第 12 班は渡波小学校避難所に到着 救護班は 3 班にわかれて活動 渡波小学校班 薬剤師、主事 巡回診療班 医師、看護師 (渡波公民館、保育所、中学校) SSB 班 医師、看護師 ※午後は渡波小学校
9:30	ボランティアは石巻専修大学ボランティアセンター到着 本日、築山地区でボランティア活動
12:00	救護班全班午前の救護活動終了
13:00	午後の救護活動開始
15:20	こころのケア班は活動終了
16:00	ボランティア活動終了
16:15	午後の救護活動終了
16:40	救護班第 12 班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
17:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング
17:40	救護班第 12 班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティングに参加



▲宮城県支部の担当者から香川県支部が借用する車両の説明を受ける



▲こころのケアチーム間の情報交換



▲石巻圏合同救護チーム石井正医師に撤収について指示を仰ぐ

・こころのケア要員にこころのケアを・



震災から数ヶ月経過してもライフラインの復旧がまだのところも多く、避難所の被災者は劣悪な環境での長い避難所生活で、先の見えない不安や家族間や避難者同士の関係の問題など様々な問題を抱えていた。

話を聞くだけでも気分が落ち込む事例や解決困難な事例も多く、自分には何も出来ないという虚しさなどこころのケア要員の精神的な負担は想像以上に大きいものであった。

朝と夕方に現地の保健師や他のこころのケア要員とのミーティングがあり、その後に日々の記録もあるため拘束時間も長く、体力的にも負担が大きかった。こころのケア要員に十分な休息や栄養が取れ、心身ともにリフレッシュできるような環境と、こころのケア要員自身の悩みを聞くなどの心の支えが必要である。

▼ 5月24日	
18:25	救護班第12班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
19:20	救護班第12班はコロボックルハウス到着
19:45	こころのケア班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 78名 こころのケアに関わった人数 44名
▼ 5月25日	
6:45	救護班第12班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動
7:10	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 本日も門脇中学校、渡波小学校で活動
9:30	ボランティアは石巻専修大学ボランティアセンター到着 本日、築山地区でボランティア活動
8:50	救護班第12班は渡波小学校避難所に到着、救護班は渡波小学校班、巡回診療班にわかれて活動
12:00	午前の救護活動終了

12:30	ボランティア活動を終了、午後は渡波地区での活動決定
13:00	午後の救護活動開始
16:00	ボランティア活動終了
16:15	午後の救護活動終了
16:40	救護班第12班は渡波小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動
16:45	こころのケア班は活動終了
17:30	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング
17:40	救護班第12班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティングに参加
18:25	救護班第12班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
20:00	こころのケア班はコロボックルハウス到着
20:30	救護班第12班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 58名 こころのケアに関わった人数 51名



▲被災地で子どもを肩車する医師



▲スキンシップを取りながら、被災者のこころの声を耳を傾ける



▲元気になった赤ちゃんに和む医師



▲香川県まで帰着するために dERU の最終調整をする

▼ 5月26日	
6:45	救護班第12班はコロボックルハウスを出発 救護班とこころのケア班は別行動
7:15	こころのケア班は石巻赤十字病院に到着
8:00	こころのケア班は石巻赤十字病院でミーティング 本日は門脇中学校で活動
8:40	撤収班とボランティアは全ての資機材の片付開始
8:45	救護班第12班は渡波小学校避難所に到着、外来診療と巡回 診療にわかれて活動
11:25	こころのケア班は活動終了 こころのケアに関わった人数3名
12:00	救護班第12班は活動終了 診療患者数24名
13:25	救護班第12班(こころのケア班帯同)は石巻圏合同救護チーム に終了報告

15:00	救護班第12班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路 dERU 撤収班①：陸路 車両2台 dERU、救急車 撤収班②：陸路(空路の救護班を秋田空港に送る) 車両2台 救護班：陸路→秋田空港→羽田→高松空港
18:25	dERU 撤収班①は磐梯山 SA 到着し給油
18:30	dERU 撤収班②は秋田県西仙北 PA に到着
19:24	dERU 撤収班は救護要員を秋田で降ろし帰路につく
23:00	dERU 撤収班②は山形県鶴岡市で宿泊
▼ 5月27日	
1:04	dERU 撤収班①は石川県金沢市で仮眠
6:21	dERU 撤収班①は金沢市を出発
8:50	dERU 撤収班②は鶴岡市を出発



▲震災から3ヶ月後の石巻赤十字病院玄関前



▲石巻赤十字病院の災害対策本部にて活動を確認



▲約2ヶ月半ぶりに被災地から帰着したdERUと救急車

・ラジオから流れる津波警報・

活動初日の6月11日、活動場所である海岸付近の仮設救護所で引継ぎを受けていたところ、ラジオから緊急速報が流れた。

「ただいま非常に大きな地震が発生しました。津波の危険がありますので海岸付近の方は至急避難してください。」と緊迫した声で何度も繰り返された。ちょうどその日最初の患者を受付したところであったが、患者に津波がくるので避難するように伝え、自分たちも慌ただしく車に乗り込んだ。

石巻赤十字病院の災害対策本部に状況確認するも、地震の情報は入ってきていないとの回答であった。結局、ラジオ局が震災発生時の放送を再放送していたことが判明したが、一時パニック状態となった。

▼ 5月27日	
9:10	救護班第12班は秋田空港を出発
13:00	dERU 撤収班①は淡路SAを通過中
15:30	救護班第12班、dERU 撤収班①は香川県高松市に帰着
17:00	dERU 撤収班②は福井県を走行中
19:00	dERU 撤収班②は福井県鯖江市で宿泊
▼ 5月28日	
8:15	dERU 撤収班②は鯖江市を出発
11:30	淡路SAを通過中
13:20	dERU 撤収班②は香川県高松市に帰着 3月11日から使用していた救護資機材の撤収完了

▼ 6月10日	
8:15	香川県支部救護班第13班が石巻赤十字病院に向け出発 人員：修練医1名、看護師2名、主事2名 経路：JR高松駅→東京→仙台（宮城県支部）→車両で石巻
17:02	救護班第13班は宮城県支部に到着し、車両で石巻赤十字病院へ移動
19:09	救護班第13班は石巻圏合同救護チームに到着報告
20:34	救護班第13班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
21:30	救護班第13班はコロボックルハウス到着
▼ 6月11日	
7:50	救護班第13班はコロボックルハウスを出発
8:30	救護班第13班は石巻赤十字病院に到着、活動エリアは宮城ヤンマー救護所に決定 宮城ヤンマー救護所：石巻市松並 1-14-5



▲宮城ヤンマー救護所の外は多くの蠅が発生



▲救護所で処置を施す医師



▲救護所内に段ボールで設営された診療室 (YKK提供)



▲診察室は密閉され非常に暑い

9:00	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所に到着
9:30	診療開始
12:00	午前診療終了
13:00	午後診療開始
15:00	午後診療終了
16:00	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所を出発し石巻赤十字病院へ移動
17:00	救護班第 13 班は石巻赤十字病院に到着し救護報告
18:00	救護班第 13 班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
19:00	救護班第 13 班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 7 名
▼ 6 月 12 日	
7:50	救護班第 13 班はコロボックルハウスを出発

9:00	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所に到着
9:30	診療開始
12:00	午前診療終了
13:00	午後診療開始
15:00	午後診療終了
15:10	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所を出発し石巻赤十字病院へ移動
15:40	救護班第 13 班は石巻赤十字病院に到着し活動報告
16:20	救護班第 13 班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動
17:40	救護班第 13 班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 6 名
▼ 6 月 13 日	
8:00	救護班第 13 班はコロボックルハウスを出発
9:00	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所に到着



▲救護所で診察する医師



▲被災者から何気ない話を聞くことが
こころのケアにつながる



▲エリア幹事が視察に訪れる

・震災から3ヶ月・

石巻専修大学 dERU 救護所を撤収したのちはコロボックルハウス（石巻市内農業体験場）を宿泊施設として利用しており、救護班に持参させた非常食等約 600 食も残り少なくなった。
市内ではコンビニエンスストアや大型量販店も再開しており、街としては復興の兆しを目にすることができた。

▼ 6月13日	
9:30	診療開始
11:20	宮城県支部職員は宮城ヤンマー救護所を視察 今後宮城ヤンマー救護所と万石浦救護所の2ヶ所に集約する方向
13:30	午前診療終了、午後は湊小学校避難所で活動 湊小学校：石巻市東中里 3-3-1
13:40	救護班第 13 班は湊小学校避難所に到着し診療開始
15:07	石巻赤十字病院支援要員（救急外来看護師③）1 名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
16:30	午後診療終了
17:00	救護班第 13 班は湊小学校避難所を出発し石巻赤十字病院へ移動 秋田県支部のロジスティック終了
18:05	救護班第 13 班は石巻赤十字病院に到着し、本部ミーティング
18:40	救護班第 13 班は石巻赤十字病院を出発しコロボックルハウスへ移動

19:40	救護班第 13 班はコロボックルハウス到着 本日の診療患者数 12 名
▼ 6月14日	
7:30	救護班第 13 班はコロボックルハウスを出発
9:00	救護班第 13 班は宮城ヤンマー救護所に到着
9:30	診療開始
12:20	救護班第 13 班は活動終了 診療患者数 11 名
12:40	救護班第 13 班は石巻圏合同救護チームに終了報告
13:10	救護班第 13 班は救護活動を終え石巻赤十字病院を出発 経路：車両で宮城県支部→仙台駅→東京→高松駅
15:00	救護班第 13 班は宮城県支部に到着
17:00	救護班第 13 班は仙台駅を出発



▲救護活動が長期にわたり救護服も夏服に
(石巻圏合同救護チームのミーティング)



▲宮城県支部で救護車両の確認を行う



▲宮城県支部に活動報告を行う



▲最後の救護班(13班)となる
(石巻赤十字病院駐車場)

▼ 6月15日	
13:55	救護班第13班は香川県高松市に帰着
▼ 6月21日	
8:25	こころのケア19班が石巻赤十字病院に向け出発 人員：臨床心理士1名、看護師2名、主事1名 経路：JR高松駅→東京→仙台(宮城県支部)→車両で石巻
16:00	こころのケア19班は仙台駅に到着
▼ 6月22日	
8:55	こころのケア19班は宮城県支部に移動
9:01	こころのケア19班は宮城県支部に到着し車両にて石巻赤十字病院へ移動
10:40	こころのケア19班は石巻赤十字病院に到着

11:10	先発のこころのケア班は3班に分かれて活動中 ①：渡波小学校、万石浦中学校、渡波中学校 ②：門脇中学校、石巻中学校 ③：住吉中学校、稲井公民館、リフレッシュルーム
18:18	こころのケア19班は18班と引継ぎ
19:30	こころのケア19班は宿舎に到着
▼ 6月23日	
6:00	こころのケア19班は宿舎を出発 本日は渡波小学校、渡波中学校、万石浦中学校で活動
8:25	こころのケア19班は渡波小学校に到着
9:00	こころのケア活動開始
10:30	渡波小学校から渡波中学校へ移動、活動開始
11:41	午前の活動終了
13:16	こころのケア19班は万石浦中学校に到着
13:20	こころのケア活動開始



▲復興にむけて瓦礫の撤去が進む（女川町）



▲渡波小学校の廊下に設置された水を使用しない自動ラップトイレ

・こころのケア要員としての活動・



避難所生活が長期化する中で、人々は共同生活へのストレスや行政への不満が高まっていた。街は復興に向けていっているが、人の心は震災の恐怖が離れずにいた。被災者たちは様々な苦悩を持ちながらも、前に進もうとしていた。このような中でこのころのケア要員としての活動は、1日でも早く被災者が自立し生活を始められるようにサポートすること、自分も被災者でありながらも地域住民を支えるスタッフのこころのケアであった。

▼ 6月23日	
14:45	午後の活動終了し、石巻赤十字病院へ移動
15:51	こころのケア 19 班は石巻赤十字病院に到着
17:00	こころのケアチーム合同ミーティング
19:40	こころのケア 19 班は宿舎に到着 本日のこころのケアに関わった人数 36 名
19:48	石巻赤十字病院支援要員（救急外来看護師③）は業務終了
▼ 6月24日	
6:00	こころのケア 19 班は宿舎を出発 本日も渡波小学校、渡波中学校、万石浦中学校で活動
8:27	こころのケア 19 班は渡波小学校に到着
8:45	こころのケア活動開始
10:35	渡波小学校から渡波中学校へ移動、活動開始
11:55	午前の活動終了

13:20	こころのケア 19 班は万石浦中学校に到着
13:30	こころのケア活動開始
14:37	午後の活動終了し、石巻赤十字病院へ移動
15:51	こころのケア 19 班は石巻赤十字病院に到着
17:00	こころのケアチーム合同ミーティング
19:25	こころのケア 19 班は宿舎に到着 本日のこころのケアに関わった人数 41 名
▼ 6月25日	
6:00	こころのケア 19 班は宿舎を出発 本日も渡波小学校、渡波中学校、万石浦中学校で活動
8:35	こころのケア 19 班は渡波小学校に到着
8:50	こころのケア活動開始
10:30	渡波小学校から渡波中学校へ移動、活動開始
11:30	午前の活動終了



▲石巻赤十字病院内に設置されたこころのケアセンター



▲今後のこころのケア活動に向けての意見交換が行われた

13:35	こころのケア 19 班は万石浦中学校に到着
13:40	こころのケア活動開始
14:20	午後の活動終了し、石巻赤十字病院へ移動
15:19	こころのケア 19 班は石巻赤十字病院に到着
16:00	こころのケアチーム合同ミーティング
18:25	こころのケア 19 班は宿舎に到着 本日のこころのケアに関わった人数 31 名
▼ 6 月 26 日	
6:30	こころのケア 19 班は宿舎を出発 本日も渡波小学校、渡波中学校、万石浦中学校で活動
8:35	こころのケア 19 班は渡波小学校に到着
8:50	こころのケア活動開始
10:15	渡波小学校から渡波中学校へ移動、活動開始
11:00	渡波中学校から万石浦中学校へ移動、活動開始

11:45	こころのケア活動終了し、石巻赤十字病院へ移動 本日のこころのケアに関わった人数 21 名
13:31	こころのケア 19 班は石巻赤十字病院に到着
14:00	こころのケアチーム合同ミーティング
15:20	こころのケア 19 班は 20 班（熊本県支部）に引継ぎ
17:40	こころのケア 19 班は宮城県支部へ移動 経路：車両で宮城県支部→仙台駅→東京→高松駅
19:40	こころのケア 19 班は宮城県支部に到着
20:00	こころのケア 19 班は宿舎に到着
▼ 6 月 27 日	
8:00	こころのケア 19 班は宿舎を出発
8:43	こころのケア 19 班は仙台駅を出発
16:20	こころのケア 19 班は香川県高松市に帰着

東日本大震災 赤十字の使命を果たすために

日本赤十字社香川県支部 事業推進課長 藤原 淳子



▲ 3月11日東日本大震災救護活動へ派遣する要員を見送る職員

あの日、緊急地震速報とともにテレビに映し出された映像は想像を絶する光景だった。急いで中国・四国ブロック代表支部の広島、続いて高知、徳島、愛媛と連絡を取り合ったが地震直後はほとんど情報がない。ただ間違いなく甚大な被害になると確信し、直ちに災害対策本部を立ち上げた。血液センターに dERU の作動確認をし、病院薬剤部長に医薬品の準備を依頼、医療社会事業課長に救護材料の準備を依頼するとともに、救護班 dERU チーム（第1班）に集結していただいた。第1班は発災から4時間後の19時に出発。高速道路は走行不能なところもあり、支部災害対策本部と逐一情報交換をしながら、24時間かけて福島県田村市に入った。以後、支部災害対策本部は3日間24時間体制で、次々と流れてくる情報に心を震わせながら、救護員の皆様が安全に活動できるよう気を配る。第6班までは、県支部単独で途切れることなく派遣し、途中、ANAの無償輸送協力により、1ヶ月間優先的に利用させていただくことで移動手段の確実な確保に繋がった。4月からは中国・四国ブロックが同じ地域で救護活動ができるようになり、より頼もしく情報を共有しながら活動継続をしたところである。限られた資源、人材、時間の中でいかに効率よく活動をしていくかを考えた時期であった。支部には発災当日から防災ボランティアが次々と参集し、救護に必要な物品調達をはじめ義援金の受付、平時の講習事業など多岐にわたり支部を側面から強力にバックアップしていただいた。防災ボランティア・リーダーには現地等での活動にもご参加いただいた。「人間を救うのは、人間だ」まさに赤十字のスローガンの言葉通り、社会の近代化が進んでも人間でしか出来ないことが多くあることを再認識する。救護活動が長期にわたり「これ以上救護班が出せない」という支部がある中で、当支部では病院・血液センターの協力を得て、最後まで高い赤十字精神を持った救護員を派遣させていただくことができた。「わたしたちは、苦しんでいる人を救いたいと言う思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守ります。」私は改めてこの赤十字の使命を共有する仲間の連帯感を強く感じたところである。

近い将来、高い確率で発生が予想される東南海・南海地震、もしもこの地域で災害が起きたら、我々が多くの応援要員を受け入れる立場になる。その時、どのようにリーダーシップをとってうまく調整するか、災害拠点病院となる高松赤十字病院等と一層の機能強化を図っていかなければならない。その万々に備えるためにも、日赤香川県支部は今回の東日本大震災での経験に学びつつ、今後さらに準備や訓練を強化していくつもりである。

▼ 6月29日	
11:50	石巻赤十字病院支援要員（薬剤師②）1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
▼ 7月7日	
17:40	石巻赤十字病院支援要員（薬剤師②）は業務終了
▼ 8月4日	
12:00	石巻赤十字病院支援要員（救急外来看護師④）1名は石巻赤十字病院に到着し業務開始
▼ 8月14日	
17:45	石巻赤十字病院支援要員（救急外来看護師④）は業務終了
以上で現地救護活動は終了	



無事に救護班が帰着し活動報告する

第2章

東日本大震災救護活動報告・ 各職種の所感



第1班 活動報告

高松赤十字病院 救急科部長 伊藤 辰哉

この度の大震災で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

災害時には医療救護が必要とされますが、今までその任を負う組織は日赤救護班でした。しかし阪神大震災以降厚労省により日本DMATが組織され、発災直後より活動するようになっていきます。

DMATは概ね発災後48～72時間までの活動を任務としており、その後の亜急性期に活動する組織とのタイムラグが生じます。日本赤十字社では日本DMATと協働する日赤救護班を日赤DMATとして位置づけ、発災直後の超急性期から急性期、亜急性期へとシームレスな活動を行う体制を作っています。すなわち、初動の救護班には日赤DMATとしての活動も求められます。高松赤十字病院には私を含めてDMAT隊員資格を持つ6名が所属しています。第1班は私以外にもDMAT隊員資格を持つ2名の看護師と主事1名が出動しました。

今回は発災直後の出動であり、統一された情報はありませんでした。日赤救護班は本社の指揮命令系統で活動しますが、その本社からは十分な情報をもたらされませんでした。

災害が大きくなればなるほど被災地からの情報はなく、被災地の状況を予想した準備・活動が求められます。自ら情報を求め、自らその情報を検討し、自ら発信する、まさに手探りの活動でした。最初の活動は高松を出てから24時間、3月12日に福島県田村市総合体育館での救護所を開設することでした。しかし、翌13日に撤収となり、'被ばく対応ができない'ために福島県での活動は終了となりました。

14日早朝に福島を出発し宮城県仙台市若林区にある陸上自衛隊霞日駐屯地へ移動しました。そこでdERUを展開し、先着していた日本DMAT隊員や自衛隊員と協働してSCU活動を行いました。そして15日第2班に業務を引き継ぎ、高松への帰路につきました。往復2,000キロ以上の車移動でしたが、医師・看護師・薬剤師・主事、職種に関係なくハンドルを握りました。

情報が少ない今回の出動は、その時々で判断を迫られるという初動班ならではの活動でした。その中で、救護所を開設する・dERUを展開する・DMAT隊や自衛隊と協働して(日赤DMAT)活動を行うという3つの活動ができたという事実は大きいです。'情報'という観点では、携帯電話や衛星電話が使用できる場面で、できる限り高松赤十字病院内の災害対策本部(救護班支援本部)へ連絡をとりました。そして、可能な限り現地の生の情報を報告しました。その情報が後に続く第2班以降の活動の役に立ったものと考えています。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護係長 古賀 くみこ

3月11日、病棟のTVで東日本大震災が発生したことを知り、それから4時間後、救護班第1班の看護師長として出動することになりました。

出発から24時間後、福島県の田村市総合体育館で救護活動を行いましたが、福島第一原発から30km圏付近だったため翌日撤退しました。その後日赤福島県支部で1泊し、宮城県の陸上自衛隊霞日駐屯地でdERUを立ち上げ、大津赤十字救護班と協力しながら救護活動を行いました。

初動のため被災情報が少なく、どこでどんな活動をするか分からない不安や、睡眠不足や空腹感、寒さのための疲れも大きかったですが、救護班15名で常に協力しながら行動して乗り切ることが出来ました。

その後、津波や原発事故など被災地の状況を知り、十分なことができないまま帰ってきてしまったことに罪悪感を覚えました。しかし継続して救護班が派遣され、その活動状況を見聞きすることで、赤十字活動に携われたことを誇りに感じました。

この経験をこれからの救護活動にも活かしていきたいと思えます。



第1班 活動報告

高松赤十字病院 第一循環器科副部長 末澤 知聡

3月11日夕方、ちょうど検査をしているとき救護班としての依頼がありました。地震が起こったこと自体も知らない状態で、dERUなどがあるため当然ではありますが、まずは東京の赤十字本社まで車で移動とのことでびっくりしました。

東京へ夜を徹して向かう途中、長野で震度6の地震があり、全く地震の被害状態などを知らずに出発した我々は、本当に日本が沈没するのではないかと恐怖を覚えました。

自分の携帯で緊急地震速報というエリアメールが鳴るということをはじめて知りながら、行き先は最終的に田村市総合体育館となりました。

ちょうど3月12日夕方、水素爆発のニュースがありました。30キロ離れて心配ないとのことで向きました。しかし対向車線がラッシュでその逆を走っているのは不気味でした。田村市総合体育館ではやはり原発から避難された方が多く、ただ避難した翌日ということもあって気がはっていたためか、症状がある方で受診されるというより家にいつも飲んでいる内服薬をおいてきてその処方依頼が多かったです。我々の持参した薬も降圧剤などは数十錠しかなく、次の日のことを考えて一人に一日分しか渡せず申し訳なかったです。

翌日も原発事故は収束せず、今後の対応もあり福島県支部に向かうことになりました。そこで各支部が集まって今後の活動について話し合いがありましたが、実際他の避難所では高濃度被ばく者の方がいたとの情報もあり、我々がどのような形で救護するか議論しましたが、国や本社からも明確なことはコメントはなく、結局深夜になり福島県支部からは、救護は必要だが原発のこともあり一旦撤退となりました。

翌朝は仙台に向かい、霞目駐屯地でdERUを展開し石巻から搬送されてくる入院患者のトリアージを行いました。軽症の方でも家族が行方不明になっていると、ずっと泣いている方もいました。

我々は被災地に直接は行って被害をみたわけではありませんでしたが、接した被災者の方や患者さんから被害の深刻さを感じられ、自宅に戻ってから新聞やテレビで被害の状況を見て改めて驚きました。

朝日新聞でプロメテウスの罫が連載されていますが、これを読むとやはり政府も全く原発の状態を把握できておらず、また非常に危機的な状態だったのだと思いました。

情報が無いという中で十分なことはできなかったと思いますが、震災直後に出発して被災地では何が必要かなどの情報を我々なりに得て、そして全員無事に帰ってこられたことが第1班としてはよかったのではないかと思います。

また同じように全国から赤十字の救護班の方が来られ、それぞれあつい気持ちをもって活動しているのを見て人道、博愛の精神を感じることができました。



東日本大震災救護活動に参加して

香川県赤十字血液センター 主事 秋山 淳也

3月11日15時30分香川県支部よりの出勤準備命令がありました。休日で外出していたため地震についてまったく知りませんでした。急いで帰宅し、テレビで確認すると信じられない光景が広がっていました。

すぐに血液センターに向かい、dERUの動作確認を行いました（通常、dERUは血液センターにおいてあるため）。17時支部に到着し、荷物の積み込みを行いました。

19時、dERUにて出発しました。

日頃、災害時にはdERUの出勤を覚悟していたつもりでしたが、まさかその時が来るとは。

不安・恐怖と赤十字職員としての自覚、様々な思いで東北へ向かいました。建設中の高速道路や陥没のげいし道を通り、24時間後、福島県田村市へ到着しました。翌日まで救護活動し、宮城県仙台市若林区の陸上自衛隊霞目駐屯地へ向かいました。DMA Tや自衛隊等とSCU活動を行いました。

わずかに数日の活動で十分なことができたとは言えませんが、被災者の方々の『お疲れ様』『ありがとう』という言葉は忘れられません。

今回の経験を活かし、今後の救護活動、来たる南海・東南海地震に備えていく所存です。



第2班 活動報告

高松赤十字病院 呼吸器科部長 山本 晃義

われわれ第2班8名は、3月14日朝、日赤香川県支部で出発式を済ませ、マスコミの取材を受けたのち、2台の車に分乗して仙台市若林区の霞目駐屯地を目指して出発しました。

原発事故の影響を考慮し、首都を避け、名神高速、北陸道を通り、新潟から磐越道を経由して東北道に至る経路を選択しました。磐越道が通行可能かどうか心配でしたが（タイヤはノーマルでチェーンもなし）、15日朝には余裕をもって到着することができました。そこで、第1班と交代し、dERUを自衛隊が避難所から運んでくる患者さんのトリアージポストとして運用しました。

DMA Tや自衛隊とともに仕事するのは初めてで不安でしたが、共同運営の滋賀県支部の方々に助けていただきました。天候が急変し、雨から雪になり、気温も真冬並みになりましたが、16日には、石巻市に行く指令が出されたため、雪のため半分つぶれかけたdERUを撤収しました。テントの床にたまった水を女性班員は裸足になって掃き出しました。滋賀県支部の方々は出発の時間を遅らせてまで、われわれを手伝ってくれました。

石巻赤十字病院に到着し、到着報告をするやいなや、石巻専修大学内に救護所を開設せよと指令を受けました。早朝から、雪のなかdERUの撤収を行い、食事も満足にとっておらず疲れもピークに達していましたが、被災者のことを思うと弱音は吐けず、千葉県支部や広島県支部の方々の助けを借りて大学の体育館の1室に医薬品や器材を搬入しました。

電気、水道、ガスはまだ通っておらず、寒く暗い中での作業でしたが、まず、診療所としてのおおまかなレイアウトを決め、各班員が専門性を生かして、受付、事務、診察室、処置台や点滴ベッド、薬局などの細かい部分を短時間で仕上げてくださいました。この最初のレイアウトが救護所閉鎖までほぼ維持されたことは、われわれにとって誇りに思います。

診察が始まってからは、西原主事が中心になって患者情報をコンピューターに入力しました。岡野薬剤師はあわただしい中でも、患者さんに時間をかけて薬の説明をされ、好評でした。他の班員もそれぞれの役目を理解し、各自の持てる力をフルに発揮してくれました。特に石井主事は現地での交渉や外部との連絡など超多忙でしたが、スマートにこなしてくれました。

今回のような大規模災害への派遣は皆初めてでしたが、力を合わせて無事目的を達成することができました。改めて第2班の皆様にご感謝申し上げますとともに、現地や不在中の高松の職場でわれわれを支えていただいた方々に感謝いたします。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 竹林 真希

第2班として東日本大震災の救護活動を行いました。霞目駐屯地から石巻へ移動となり、石巻専修大学にて救護所を設置、第3班以降もしばらく専修大学にて活動を継続することとなり、第2班としての役割を果たせたのではないかと思います。交代しながら診療が継続される中、診察介助や薬剤師の調剤補助などを行いました。また、巡回用に医療セットが揃っていない中、避難所の巡回診療へも行きました。被災者の方達は被災時の状況や避難所生活の辛さなどを語ってくださいました。業務におわれ、十分に話を聞くことは出来なかったと思いますが、被災地の方達は我慢強く、私たちに労いの言葉もかけてくださり逆に勇気付けられることも多かったです。被災地の方達は私たちが快く受け入れてくださり、各日赤支部の協力、その他応援もあり活動を継続でき、人との繋がりを強く感じました。

今回の活動では学ぶことも多く、第2班のメンバーとして活動出来たことに感謝し、今回の経験を今後に繋げられたらと思います。



第3班 活動報告

高松赤十字病院 脳神経外科副部長兼救急科副部長 井陽輝

第3班は発災から6日後の3月17日朝10時 総勢8名で車2台に分乗し津波で多大な被害を受けた宮城県石巻市に向かい高松を出発しました。

すでに第2班が石巻赤十字病院近くの石巻専修大学体育館で救護所を展開しておりガソリン不足および寒波が厳しく現地では暖房器具が不足しているとの情報を得たため、2台の車の荷台には香川の赤十字ボランティアから供託いただいた石油ストーブ5台と灯油、携行缶に詰めたガソリンを大量に積み込み22時間かけて陸路石巻に到着しました。

我々が活動した専修大学救護所はこの震災で唯一機能が残った石巻赤十字病院に患者が殺到しないように市内に2ヶ所設けられた固定救護所の一つです。朝早くから患者が来所され、3日間の救護活動中1日平均120名程度診療を行いました。

救護所には広島県支部から三原赤十字・庄原赤十字の救護班、および被災された石巻市立病院の医師・看護師が石巻赤十字災害対策本部より派遣され協力して診療を行いました。

到着初日はまだ電気・水道・携帯電話の回復はなく、診療に使う電気は4台の発電機で確保していました。翌19日には電気が復旧、携帯電話回線が一部開通するなど徐々にインフラが整えられていきました。

診療所での診察は外傷の患者さんは少なく、寒波による風邪などの症状の方が大半を占めていました。避難生活ではトイレが流せず敬遠しがちとなるため、便秘が多くみられました。

ほとんどの被災者が着の身着のまま逃げ、内服薬を持ち出せなかったことが大きな問題となっていました。救護所には連日薬を求める被災者が多く来所され、救護班の薬剤師は多忙を極めました。

救護所のある石巻専修大学には発災当初約1,000人の被災者が避難、その横の商業高校には350人ほど避難しており、我々は他の救護班と連携してこの2ヶ所の避難所の巡回診療を行いました。専修大学、商業高校ともに自律的にリーダーおよび管理組織が立ち上がっており大きな混乱はありませんでした。

電気が復旧するとともに多くの人々が退去されましたが、壊滅的な被害を受けた地域の方々は帰ることができず、半数から1/3ほどの方々が残っておられ、我々は連日避難所の巡回診療を継続しました。

今回の活動期間中、徐々に石巻日赤の災害対策本部を中心とした救護のシステムが立ち上がっていく現場にふれることができました。我々は3日間救護所・巡回診療の立ち上げを中心に活動し、第4班へ引き継ぎを行いました。微力ではあったかもしれませんが、救護とは継続していくことが重要であると今回の活動で実感しました。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 主事 樽茶直人

私達第3班が出発する頃には、震災発生から約1週間が経過していました。震災の甚大さが徐々に判明し、救護活動の内容も少しずつ変化していく段階であったため、『何をすべきか、何ができるのか…』と不安を抱きながらの現地入りとなりました。

現地での私達の主な活動は、石巻専修大学に展開した救護所の運営、大学内避難所の巡回診療、石巻商業高校へのアセスメントでした。救護所には昼夜を問わず患者が訪れ、主事としての業務に追われる中で、私が改めて感じたのはチーム医療の重要性でした。物資も情報も十分でない中、香川県支部救護班としてのチームワークのみならず、他施設の日赤救護班や、現地の医療機関スタッフとの連携も大変重要でした。

石巻を離れる日、スーパーに並ぶ人々の行列や泥まみれの自転車を修理する自転車店、倒壊した家屋の整理をする人々の光景に、復興に向けての第一歩を感じるとともに、今回の経験を今後活かしていきたいと感じました。



第4班 活動報告

高松赤十字病院 内科医師 吉岡 正博

われわれ第4班は、移動日も含め3月20日から24日の5日間、救護活動を行いました。印象に残った事柄を中心に報告します。

第4班から往復ともに空路が利用できるようになり、移動に必要な時間が大幅に短縮されました。3月20日午前8時30分に高松赤十字病院を出発し、同日午後7時30分に石巻専修大学救護所に到着することができました。第3班からの引き継ぎを十分に

行い、二個班16人の大所帯で一夜を過ごしました。

翌21日から救護活動を開始しました。1日2回、朝夕に石巻赤十字病院に於いて全国からの石巻合同救護チーム代表者でミーティングが行われます。日中の活動内容や翌日以降の方針が伝達されました。ミーティング会場には東日本の復興に向けた静謐な気概が満ち溢れており、一層気が引き締まる思いでした。

活動内容は救護所での診療と、近隣の避難所での巡回診療が主でした。診療は広島赤十字・原爆病院からの救護班の方々と、震災に伴う大津波で壊滅的被害を受けた石巻市立病院（第一章参照）からのボランティアの医師・看護師の方々と協働して行いました。石巻市立病院の方々は、自身は当然被災者でもあるのですが、それを感じさせず診療される姿に感服しました。

21日、22日、23日の救護所の受診者数はそれぞれ130名、83名、134名でした。多くは常用薬を震災で失った患者に対する薬剤処方でした。その中に感冒症状（咳、鼻水、のどの痛み）や胃腸炎症状（嘔吐、下痢）といった、人口密度の高い集団生活で拡大しやすい感染性疾患の患者が増加する傾向も見られました。石巻市は津波の被害が甚大でしたが、その中で何とか損壊を免れた10畳の間に9人で暮らすご家族が、毎日順々に胃腸炎症状で受診されたこともあり、その時点ではまだライフラインは復旧しておらず、感染は拡大しやすい環境でした。自宅で過ごされていた方々には、同じような事が多く起こっていたでしょう。巡回診療は避難所ばかりではなく、そういった個人宅にも声をかけることができればより良かったです。



23日の夜に第5班に引き継ぎを行い、救護所を離れ、24日夕方に高松に帰着しました。全体としては、先発班が設置確立してくださった救護所診療、巡回診療を引き継ぎ、第4班なりの工夫を加えながら業務が行えました。ほんの僅かではありますが、被災者の方々の力になれたと班員一同自負しています。東日本の一日も早い震災からの復興を願っています。



東日本大震災救護活動に参加して

香川県赤十字血液センター 主事 漆原 慎司

僕たち救護班第4班は3月20日に石巻専修大学に到着し、24日までの5日間、救護活動に従事しました。主な活動内容は、石巻専修大学救護所における診療活動と石巻商業高校を始めとする近隣の避難所への巡回診療の2つでした。第4班が現地に着いた時には、それまでの班の活動により、救護所での活動は大きなラインが完成していました。また、そこには部屋があって、暖房器具があって、電気があって、食事があって、無いものといえば水くらいのものでした。もっとサバイバル的な状況を覚悟していたので、少しほっとしたことを覚えています。

救護所には毎日100名を超える受診者がありました。震災より既に10日が経過していたこともあり、重篤な方はほとんどなく、慣れない環境やストレスによる体調不良の方、今まで服用していた薬の継続処方を希望される方が主でした。一方の巡回診療では、被災者の方と触れ合う機会が多くありました。僕には専門的な知識がなく、話を聞くくらいのことしか出来ていませんでしたが、被災者の方の「ありがとう」という言葉や笑顔には、逆にこちらが救われる気持ちとなりました。

一緒に活動した第4班の皆さん、同じく石巻専修大学を拠点として活動した広島県支部の救護班の皆さん、ボランティアとして手伝いに来てくれた石巻市立病院のスタッフの皆さん、災害本部よりの確かな助言や勇気づける言葉をくれた支部や病院の皆さん、それぞれが自分のできることを精一杯やり、それでも駄目な所はお互いが助け合っただけの5日間でした。この5日間は僕の中で大きな経験となると共に、一つの誇りともなりました。東日本大震災は大きな被害をもたらしましたが、その中で赤十字の活動を通して、一人でも多くの人間が救われたと信じています。最後に、活動中に強く心に残っていた言葉、日本赤十字社のスローガンを書いておきたいと思います。「人間を救うのは、人間だ。」



第5班 活動報告

高松赤十字病院 整形外科医師 三代 卓哉

我々第5班は医師 三代・森岡、看護師 藤井さん・菅さん・倉鋪さん、薬剤師 中村さん、主事 柳生さん・篠田さん、ボランティア 金森さんの計9人で石巻救護活動を行いました。

石巻周辺の活動は石巻赤十字病院に統括され、60を超える各県からの救護班はこの災害対策本部の指令により動いていました。我々が活動を行った時期は急性期医療から慢性期医療へと需要転換されてきたところで、感冒や内服薬の投与といった慢性疾患医療、感染症治療が主でした。実際、第5班滞在中の状況も、感冒、腸炎、歯肉炎、片付け作業などによる腰痛、膝痛、高血圧、不眠症の治療、処方継続などの診療内容でした。

このころはライフラインの復旧は進んでいるものの、まだ上下水道、電気、ガスが復旧されていないところがあり、避難所によって状況のばらつきがあり、衛生環境も海岸沿いの地区にはまだ下水汲み取りが及ばず、ひどい状況が続いているところも多く残されていました。

3月23日朝皆さんに見送られ、高松を出発し、夜7時ごろ dERU 展開中の石巻専修大学に到着しました。4班との引継ぎを行った後、翌日に備えて就寝しました。

24日6時起床し、ベースとなる7時から19時のdERUでの診療担当を庄原チームと地元から応援にきていただいていた石巻市立病院の医師2人（循環器科 出町医師、整形外科 坂本医師）に任せ、巡回診療に出動しました。石巻専修大学217名と石巻商業高校約250名の施設を回りました。

巡回では薬を失った方の処方や、風邪薬、血圧測定などの健診的診療が中心で、こういった避難所では日中には動ける人は自宅の片付けなどに出られるため、高齢者や体調の悪い人たちが残っていました。

25、26日も同様な活動を行い、3日間無事活動を終え、帰途につきました。活動中は皆チームメイトそれぞれが大活躍でした。

医療の本質はチーム医療にあります。災害医療にはこの原点が集約され、医師、看護師、薬剤師、主事…各担当者が必死になり自己分担役割をこなし、total careを行うこと。特に急性期災害医療に各職種における専門性よりも、医師、看護師、薬剤師、主事としてそれぞれの総合力が生かされチームワークが発揮されます。日常診療の原点もここにあり、災害医療から多くのことを学ぶことができました。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 倉鋪 加奈子

私は震災発生後2週間後に、第5班の看護師として救護活動を行いました。

石巻赤十字病院の近くにある石巻専修大学に設置した救護所と、隣接する避難所を拠点として、診療介助を主に行いました。

私の中で一番印象に残ったのは、避難所にいたグループホームの入所者の方たちとスタッフの方たちとの関わりでした。入所者のほとんどに認知症があり日常生活援助が必要な方たちでしたが、必要な資源がない中、スタッフの方たちが交代で援助をしている厳しい状況でした。そこで、普段自分が病棟で実践している浣腸や褥瘡処置を行うことで、ほんの小さなことかもしれませんが、被災地で自分が役に立てることがあったと感ずることができました。また、そこで終わらすのではなく、引き継ぎが十分できるよう情報共有の方法についてメンバーと考えることができました。

私に関わったのはほんの一時期に過ぎませんが、救護活動を次へ繋げていくことも、救護班要員の重要な役割だと学ぶことができたと思います。



第6班 活動報告

高松赤十字病院 内科医師 小川 力

「1週間前からの風邪で今頃（夜中の救急外来を受診に）来たらしいです」

「専門分野では無いので診ることはできません」

残念ながら日常診療で度々聞かれる会話ですが、救護期間はまったくそのような会話をする者はおらず、今回の被災地（石巻市）への派遣は医療の原点を再認識する機会となりました。

同じ班員の小児科の修練医（専攻医）の医師も分からない時は相談しながらですが、内科の患者を沢山診てくれました。精神疾患のある患者の受診もありましたが、一生懸命患者の話を聞く姿がみられました。

医師、看護師、薬剤師、主事、それぞれの職種をお互いが尊敬し、協力し合うことができたと思ひ、本来の医療の原点が被災地にはあったと思います。恵まれた環境ではつい忘れがちな、医療従事者を目指した時に持っていた熱い大切な気持ちを再認識させてもらった救護活動に参加できたことに感謝しています。今後も機会があれば絶対に参加したいと思ひますし、日赤の職員であることを誇りに思えた救護派遣でした。

また今回の被災地への派遣で日本赤十字社の規模の大きさ、災害に対する統一のとれた指揮系統には改めて感心し、尊敬しました。被災地には全国から多くの医師が派遣されていましたが、医師だけで赴任したチームは、診療する場所がわからない、処方箋の件数の多い薬（総合感冒薬等）が足りない、ガソリンが切れてどこで給油すればいいかわからないなどのトラブルがあり、短い派遣期間を上記の対応に費やし十分な被災地での診療ができなかったと聞きました。その点日赤は医師、看護師、薬剤師、主事が一つのチームとして完成されている派遣チームであり、それぞれが担当の業務に集中でき、もっと長期間被災地に滞在し、診療を続けたいジレンマはありましたが、与えられた期間内には有意義な被災地での診療に従事することができたと思ひます。

最後に救護派遣の時、当院の災害本部や香川県支部からの援助、連絡には本当に勇気付けられ、救護派遣中に当院の留守中の業務を手伝っていただいた職員の方々も、現地になくても救護活動に携わっていることに気づき感謝の気持ちで一杯になりました。

「人道・博愛」の精神を実感し、「人間を救うのは、人間だ。」のスローガンが心に響いた、人生で忘れることのできない経験を得ることができたと思ひます。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 薬剤師 野村 勇介

今回、私は薬剤師として派遣され、主に石巻専修大学の救護所内での医薬品管理、調剤、服薬指導、薬剤鑑別などを行いました。

救護所に来た患者の多くは津波で日常的に服用している薬を流されてしまい今飲む薬がないと訴える方がほとんどでした。お薬手帳を持っていた方に関しては記載内容を確認し、救護所にはない薬は類似薬を提案しました。

救護所にある薬は医師が普段使い慣れていない薬が多いため、薬剤師が適切な類似薬を探して提案することが重要でした。また、多施設から救護所に薬が持ち込まれるため多数の医薬品の品目・規格があり、必要なものと不必要なものの整理、在庫の少ないものは石巻赤十字病院に取りに行ったりして在庫管理することに苦労しました。災害時は、「薬の専門家」として医薬品の適正管理や情報提供を積極的に行うなど臨機応変な行動や判断が求められました。

また、お薬手帳は患者さんの内服薬の確認や他の救護班と連携する手段としても有用であるため、日常からお薬手帳の普及を進めていきたいと思ひます。

この度の地震で被災された皆様へ謹んでお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。



第7班 活動報告

高松赤十字病院 第一消化器外科副部長 石川 順英

第7班は震災から約3週間経過した4月1日に宮城県石巻市に向けて派遣されました。今回の震災で3,000人を超える死者を出し、もっとも被害の多かった地区です。

日赤第5ブロックに属する香川県支部は第2エリアと呼ばれる地区を担当し、石巻専修大学に設置された救護所での診療や石巻専修大学の避難所、石巻商業高校の避難所の巡回に携わってきました。私たちのチームもそのつもりでしたが、出発の時に急遽担当が変更になるかもしれないとの連絡がありました。どんな仕事内容になるかまったくわからないまま、不安を抱えながら現地まで移動しました。結局、石巻赤十字病院の石巻圏合同救護チーム本部に到着するまで担当は決まらないという状況でした。

石巻赤十字病院が「石巻圏合同救護チーム」を立ち上げ、個別に活動していた医療チームを一元的に統括する体制となっており、全国から集まってくる救護チームをすべて石巻赤十字病院が管理するシステムになっていたため、毎日のように入れ替わる多数の救護チームの担当は、前日の17時以降にならないと決まらない状態でした。

私たち第7班は結局、石巻赤十字病院の救急外来の軽傷、中傷のエリアの準夜帯を2日間担当しました。震災後1ヶ月あまり経っており、風邪や、下痢、腹痛などの疾患が多く、外傷などはあまり多くありませんでした。しかし、患者はひっきりなしで、休む暇もないような状態でした。

そのほか石巻専修大学の救護所や避難所、石巻商業高校の避難所の巡回などの活動を行いました。急性期の患者はおらず、巡回のニーズもかなり薄れてきている状況でした。私たちが活動していた時期には、24時間勤務は原則行わないようになっており、石巻専修大学の救護所も24時間体制ではなくなりました。

私たちの担当エリアだけに限れば、救護班の必要性はかなり低くなってきていましたが、他のエリアにも避難所が100ヶ所以上あり、ずっと環境の悪い避難所もかなりあるようでした。

4月4日19時、第7班は救護活動を終え、石巻を出発しました。



東日本大震災救護活動に参加して ほっとした一瞬

高松赤十字病院 看護師長 松原 由美

どんな活動になるのか、無事役割を果たせるのか、不安を抱えたまま第7班の一員として出発しました。班員9名全員が無事に帰院することが一番大事と自分に言い聞かせて…。

石巻への道中、我班の活動は石巻日赤での救急外来準夜勤務という情報が入りました。病院支援は日頃の業務の延長、少し安心しました。しかし、不慣れた病院での活動の上、申し送りも十分でなく、1日目は要領がつかめませんでした。

24時勤務終了後、水道が使用できない宿舎に帰る前に病院内で歯磨き洗面をして一路宿舎へ移動しました。宿舎では、部屋の中で石油ストーブが焚かれ、暖か、ほっと、嬉しかったです。

石巻日赤は通常外来診察を中止していました。近隣の医療機関も機能していないため、救急外来にはたくさんの方が訪れ2時間3時間待ち、診療が終わった後も薬をもらうためにまた1時間待つ状態でした。2日間続けて石巻日赤の小児科医と勤務しました。彼は、診療が終わり薬などの説明をした後、お大事にと声をかけます。そして、その後に必ず「お母さん、他に困ったことはないですか」と、顔を見ながら落ち着いた声を掛けます。この言葉でお母さんの心はポッと温かい気持ちになり、ほっとしたのではないのでしょうか。多くの患者が待っていて、診療に追われる中でほっと気持ちが温くなる一瞬でした。

9名全員無事帰院でき、ほっと！



第8班 活動報告

高松赤十字病院 消化器科医師 松中 寿浩

平成 23 年 3 月 11 日のあの大震災発生から早 1 年が経とうとしています。

第 8 班の活動は、震災発生後ちょうど 1 ヶ月後の時期で、石巻赤十字病院本部の方針は、4 月に入り避難所となっている各学校の再開に向けて各避難所は縮小傾向にありました。また、地域の診療所・市バスも再開し始めたので復興を促すためにも利用するように指示が出されました。

(1) 石巻専修大学救護所診療圏内の外来診療と訪問診療

ほとんどの患者さんが、慢性疾患の定期薬の処方切れで、出せるだけ出して今後は開業医で処方してもらうように指示しました。共同生活・今後の生活へのストレスから不眠で眠剤や安定剤を希望される方が多い印象でした。避難所でも入所者は減少傾向で徐々に他県の避難所に移動されていました。最終日に専修大学診療所は閉鎖・撤収することを伝えて回ると、「日赤さんありがとう」といわれ、先任者の活動が認められ我がことのようにうれしく思いました。

(2) ロイヤルホープ救護所での診療

急性期疾患が減り、各避難所にいる長期臥床傷病者を拾い上げ、各施設に振り分ける事業が始まり、ロイヤルホープ救護所が入院できる救護所として開設され、各チームが交代で診療に当たりました。胃腸炎、気管支炎、褥瘡などの方が搬送入所されました。ただ、改善しても自宅があるわけでもなく、避難所に戻るわけにも行かず、親類などのつてを頼って退所されるしかないのが印象的でした。

(3) 石巻専修大学救護所の撤収

震災発生後、4 週間にわたり先任者が築きあげた体育館倉庫の救護所が役割を終え、我々の代で撤収させていただきました。引継ぎノートには、各班のご苦労がしのばれる思い出がいっぱい詰まっていました。

最後に、実質 2 日間しかありませんでしたが、石巻合同救護チーム本部からの指示のもと地域の医療活動に従事することができ、貴重な経験ができました。救護班に任命された時は、何の訓練も受けていない自分に果たせるかどうか不安でしたが、比較的安定した時期に参加でき、メンバーにも助けられ、普段の救急外来での仕事と変わりなかったように思えました。

今後、医療従事者・赤十字病院職員として、いつ何時緊急対応が求められても対応が出来るように準備が必要と改めて実感しました。寒空のなか、仮設住宅で頑張っておられる被災者の方々に、一刻も早い復興を祈っています。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 谷本 麻美

私は 4 月 8 日から 12 日までの 5 日間、宮城県の石巻市で救護活動を行いました。初めての救護活動ということに加え、派遣の前日に現地では震度 6 の余震があり、不安と緊張を強く抱いたまま現地に向かったのを今でもよく覚えています。

私が活動を行った石巻専修大学の救護所は、大学の再開に向け閉鎖となることが決まり、そのことを聞きつけてたくさんの被災者の方が訪れられました。「津波で全て流されてしまった。」「余震やいつまた津波が来るか不安で眠れない。」訪れた被災者の方が次々と同じようなことを話され、何と声をかけたら良いかわからず、ただただ話を聞くのが精いっぱいな状況でした。そんな戸惑いを見せる私に対して、被災者の方々は「遠くから来てくれて本当にありがとう。」などと温かい言葉をかけてくださいました。大変な状況に置かれているにも関わらず、相手のことを思いやる気持ちを忘れず前向きに頑張っている被災者の方々に逆に励まされ、そのことが力となって最後まで現地での活動を続けることができました。

今回の救護活動で私が貢献できたことは本当に微力なものであったと思いますが、救護活動に参加できたことは私にとってとても貴重な経験となりました。もう二度と今回のような災害が起こらないことを願いますが、万が一の際には今回の経験を活かしていきたいと思えます。



第9班 活動報告

高松赤十字病院 産婦人科医師 神余 泰宏

私たち第9班は、4月20日から23日まで現地で活動を行いました。当班の特徴としては、第8班までが活動していた石巻専修大学の救護所が撤収済みであったため、出発時には活動内容がはっきりせず、現地入りしてからでないといくような活動をするのかもわからないというような不安なスタートであったことです。また後述のいきさつを経て、結果的に当院の救護班として初めて牡鹿半島への巡回診療を実施することができたという点が挙げられます。また、当班から宿泊施設として石巻市の農業体験実習施設であるコロボックルハウスを利用できるようになり、部屋には暖房があり、就寝は布団で、また1回だけですが入浴もできたという、8班までの方たちに申し訳ないような環境で活動することができました。

初日20日は病院の皆さんに見送られて出発し空路羽田へ。この飛行機では東京出張の笠木院長と乗り合わせ、羽田空港で分かれる際にはいつも穏やかな院長から、一人ひとりに握手と「がんばってきて下さい」と熱い激励をいただきました。その後飛行機を乗り換えて秋田空港着、空港に預けていたアルファードに乗って高速道路をひた走り、石巻赤十字病院に到着したのが19時頃になります。今でこそ笑い話にできますが、そこに至る前に石巻市内を迷走しました。それはカーナビの地図が古く、移転前の旧石巻赤十字病院跡地に誘導されてしまったからです。またちょうど旧病院跡地に到着した時間帯がその付近の道路が冠水する時間であり、そのまま進んでいたら危うく初日に車両が水没して自分たちが救援してもらわなければならないところでした。さて肝心の救護活動ですが、最初に現地災害対策本部から指示された活動内容では、石巻ロイヤル病院の4階に設置されたショートステイバースにおいて、21日に日勤、22日に夜勤、23日は夜勤明けという内容でした。このショートステイバースは風邪や軽い発熱など、避難所生活は本人や周囲のためによくないが、入院が必要なほどではないといったグレーゾーンの方を短期間（2～3日）収容するのが目的です。入所者は21日の時点で5名。もちろん重症の方はおらず、ケアはあまり必要ありません。我々救護班の他にはスタッフがいないため、入所者の毎3食の調理も我々が担わなければならないということ以外には、活動内容には特筆すべきところはありませんでした。当班の全員が「わざわざ香川県から飛行機を乗り継いできてこの内容ではとても承服できない」という意見で一致したため災害対策本部に何度も折衝した結果、ショートステイバースの業務も行いつつ、22日は牡鹿半島の付け根にある洞源院、祝田の両避難所への巡回診療を行う班に加わることができました。またその後も班を2つに分け、22日夜にショートステイバースの夜勤、翌23日に雄勝町への巡回診療を実施するなどの活動をしました。

当時は発災後1ヶ月以上経過しており、また日中は仕事や学校、所用のために外出している人も多いため、避難所にいる方は思っていたほど多くはありませんでした。しかしながら、残っている人たちは長い避難所生活に心身ともに疲れており、かえって一人ひとりの話をじっくりと聞くことができたことでストレスの解消など、より効果的な活動になり得たと思います。現地災害対策本部において活動終了報告を行い、本部要員の全員に「ご苦労様でした」と見送られ、また帰路につく際に給油したガソリンスタンドの店員さんには「ありがとうございました」と深々とお辞儀をいただき（お客に対してという意味のみではないと感じました）今回の活動を終了しました。



最後になりますが、いろいろハプニング続きだった今回の活動において、現地での活動を支えてくれた第9班の各メンバー、現地及び高松の災害対策本部の方々、また様々な情報をいただいた他の救護班の方々、並びに我々が活動中の通常業務を担っていただいた各職場の方々に感謝をして活動報告とさせていただきます。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護係長 大西 順子

私は第9班の看護師長として4月20日～24日の間、救護活動に参加させていただきました。実際の救護活動にはなかなか携われておらず、看護師長としての役割が果たせるのか不安でしたが、多くの方の激励を受け、赤十字人の一人として責務を果たすことを心に誓い出発することになりました。

当班はエリア15のショートステイバース（SSB）での活動が主でした。しかし、ここには数名の入所者しかおらず、アグレッシブ（積極的）な活動を希望したため、SSBの活動に支障をきたさない範囲で巡回診療もさせていただきました。昼間に救護所にいるのは多くが高齢者の方々でしたが、しゃべらずにはおれないといったふうで、地震が起こった時に家がどうなって、どんなふう逃げ、今にあるのか等話をさせていただきました。

私は今回の活動を通して、どんな状況でも人には生きようとする力が備わっていることを感じる事ができました。この経験を今後の看護に活かしていきたいと思っております。



第10班 活動報告

高松赤十字病院 第一胸部・乳腺外科副部長 環 正文

第10班班員

医師：環 正文、岸 夏子 看護師：小林キヨ、富田万記子、福家里江

薬剤師：柴田麻佑

主 事：川西賢治、二宮宏樹

活動期間 平成23年4月28日-5月2日

4月28日と5月1日午後から5月2日にかけては移動日で実質救護活動を行ったのは5日間のうちの半分です。

活動地域6ブロック（鹿妻・渡波地区）

石巻圏を14のエリアに分割し、それぞれをブロックと呼び、我々は石巻湾の東奥に隣接する上記を担当しました。ブロックには業務内容を調整する幹事チームとラインとよばれる救護チームが我々を合わせ3チーム、さらに薬剤師と訪問看護師の各1チームが配置されていました。総勢30名を超す大所帯でちょっとした診療以上のことができる集団と感じました。

活動内容

業務内容はブロックの幹事リーダーより朝のミーティングで指示されました。診療業務以外には担当避難所等の医療ニーズの評価および幹事リーダーへの報告と、夕方18時から石巻圏全体の医療状況、問題点、注意点を確認するために石巻赤十病院内の合同救護チーム本部での全体ミーティングへの出席が課せられました。2.5日間の活動は以下のとおりです。

【4月29日】担当ブロックの参集所でもある渡波小学校仮設診療所での外来診療と同小学校避難所の巡回診療。外来診療59名、慢性疾患の投薬が主な業務で巡回診療は褥瘡の治療、予防、血糖測定、慢性疾患の投薬等を行いました。

【4月30日】渡波小学校周辺の避難所2か所の巡回診療18名。

【5月1日】渡波小学校仮設診療所での外来診療32名。

おわりに

秋田より陸路石巻に向かいましたが、石巻港に至る手前の小高い山を越えるまでは大震災の面影はそれほど感じませんでした。しかしその小山を越えた途端景色は一変、被害の甚大さに驚き本震災が津波による大災害であることを改めて痛感させられました。

さて、救護活動に関しては震災より50日あまりが過ぎ、扱う疾患は慢性疾患が主体で、緊張する場面はありませんでした。また連休明けより避難所、仮設診療所の整理縮小が進むといわれていましたが、非常に混乱した時期に対する体制をそのまま継続しているためか「無駄」「非効率」を大いに感じました。人員は十分なのでハード面等を整えていただければもっといいものが提供できるのにと歯がゆい思いもしましたが、ただ切り捨てられる者があってはならないとの思いでみんな事にあたってと思います。

今回の貴重な経験を通じてあらためて思うことは南海、東南海地震に対するの恐怖と十分な備えです。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 富田 万記子

震災から早一年近く経過しようとしています。未だに仮設住宅での生活や震災前のような生活を取り戻せていないという報道を耳にすると、あの時間たった被災者の方々はその後どのような生活を送られているのだろうかとか様々な心情を察し、長期的な継続支援の必要性を改めて感じています。

私は、渡波地区での3日間の救護活動を行いました。救護所での活動や巡回診療を経験し、限られた場所や物品をうまく工夫しながら他チームのスタッフと協力・協働することの大切さを実感しました。活動時期が震災後1ヶ月以上経過していたこともあり、避難所は被災者にとっての「生活の場」となっていました。そこでは生活指導や保健指導も重要な役割であり、看護師として臨機応変に柔軟な対応ができるよう幅広い視野と知識が必要だと痛感しました。

今回の経験を活かし、東南海地震等に備えて自己研鑽していくことが今後の課題だと思っています。貴重な経験をさせて頂いたこと、支えて下さった皆様に感謝致します。



第 11 班 活動報告

高松赤十字病院 外科医師 山岡 竜也

第 11 班は震災発生から 2 ヶ月が経とうとする 5 月 9 日から 14 日までの日程で被災地での救護活動を行いました。被災地での救護活動は急性期から慢性期へと移行しており、地元の医療をいかに再生していくかが課題となっていました。

また、第 11 班からはこころのケア班も活動しました。救護班とは管轄が別で行動も別でしたが、避難所に避難されている方の精神的ケア活動を行いました。

渡波小学校に設置された臨時の診療所では患者さんの診療にあたりました。受診される患者さんは少なく、高血圧や白内障などの定期薬の処方のために来られる方がほとんどでした。周辺ではやっと 2 軒の調剤薬局が再開されたばかりでしたが、本部からは可能であればそちらにいていただくようにと指示されていましたが、現状は交通機関の復旧がまだ進んでおらず、みなさんに強くすすめられませんでした。

渡波小学校周辺と他の避難所の巡回も行いました。避難所では日中はほとんどの方が倒壊した自宅の片付け等で外出されているため人は少なかったです。

問題に挙っていたのは、被害を免れた自宅の 2 階に戻って生活をされている方のことで、体調を崩されて医療を必要としている方がいないかを確認しながら歩きました。しかし現実には無理にこちら側から立ち入ることもできないためその確認は困難でした。また、避難所での衛生状態の確認も行いました。まだ上下水道、ガスも復旧しておらず、トイレは簡易式で入浴も限られた場所ではできないのが現状でした。

石巻赤十字病院の救急外来では準夜帯の当直業務として軽症エリアの患者さんの診療にあたりました。発熱、腹痛など普段の当直業務で診るような症状の方がほとんどでした。この地区で石巻赤十字病院以外の病院がまだほとんど機能していなかったため患者さんが集中し多かったです。

軽症エリアでは石巻のスタッフは一人もおらず、全国より集まった救護班のみで診療にあたりましたが、全員で協力して非常にスムーズな診療ができました。

5 月 9 日に石巻赤十字病院の本部に到着してまず伝えられたのは、再津波の恐れがあるので被災地に到着したらまず逃げる方向を確認しておくことでした。滞在中には何度も余震がありましたが、幸い再津波が起こることもなく、その他大きなトラブルもなく、全員無事に活動を終えることができました。

今回の活動より、この時期は医療のニーズよりも病院、薬局などの医療機関、移動交通手段、水道、電気、ガスなどライフラインの早急な再生が望まれることがわかりました。

救護活動に参加した各救護班員がそれぞれの経験を活かして、今後の大規模災害への十分な準備を行わなければならないと思いました。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師長 藤沢 佐加恵

第 11 班は震災発生から 2 ヶ月たったの 5 月 9 日から 13 日までの 5 日間 救護活動に従事してきました。私は阪神淡路大震災に救護出動して以来、実に 17 年ぶりでした。被災地現場に入って見た光景は、神戸で見たものとは比較できないほどひどく、瓦礫の量もかなりあり、連日テレビで報道されている以上のものを目の当たりにしました。

私が出動した 11 班は、2 ヶ月も経過していたため、急性期は脱した状況でした。そのため、身体よりは精神的なフォローが必要とされていました。

現地入りした翌日から私達は小・中・高校の避難所巡回診療をしながら、被災者の方々の話を傾聴していくことの難しさや大切さを感じました。短期間で次々訪れる医療者に、「また辛い思いを語るのか」「また思い出させるのか」という想いにさせてはいないだろうかというのがあり、かける言葉も限られていました。しかし、救護服を着用しての買出しの時や道ですれ違う被災者の方々から、「ご苦労様です」とか「ありがとうございます」と反対に言葉をかけ励ましてもらい、東北魂の根底にある我慢強さというものに感動すら覚えた救護活動でした。



第12班 活動報告

高松赤十字病院 脳神経外科医師 香月 教寿

石巻に向かうときに私は東北出身の尊敬する作家、宮沢賢治を気取って、
東ニ病氣ノコドモアレバ / 行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ / 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ / 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクワヤソショウガアレバ / ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒドリノトキハナミダヲナガシ / サムサノナツハオロオロアルキ… (雨ニモマケズより)
と意気込んでいました。しかし、そこには私の想像をはるかに超える忍耐強い人々がいました。
「これは…」

任務地である避難所ともなっている渡波小学校に向かう途中、私は絶句しました。テレビで見た被災地の、現実感の薄い他人事のような画面が、視野いっぱいに、潮のにおいとともにも拡がっていました。かつて団欒家庭があったであろう場所にはその基礎のみが、ガソリンスタンドの痕跡として残る屋根には変形した自家用車が、そして、もはや何があったかさえ想像できない平地にはおびただしい瓦礫と汚泥が暗くつもっていました。

渡波小学校では、それでも活気のある小学生が、バスで授業が可能な小学校に通学していました。残っている避難中の被災者の方々も、しっかりと前を向いているようでした。たまたま自分に降りかかってしまったこの大災害にも、乗り越えていこう、生きていこうとしているのです。

渡波小学校で仮設救護所の診察に当たっていたとき、常備薬をもらいにきたAさんは、自営業の水産加工工場が津波で全壊、自宅もなくなって小学校に避難してきていました。しかし、従業員が全員無事であったことを喜び、残った貯金を退職金として分配し、付き合いのあった同業者に従業員の次の就職の依頼をして、そのいい返事を聞いてほっとしたといいました。自分のことをここまで顧みないでいられるのはなぜでしょうか。これもまた避難所となっている公民館に巡回往診したときにお話を伺えた避難中のBさんは、かわいがっていた姪を守ろうと地震直後に保育所に迎えに行き自宅につれて帰りました。しかし2階の屋根を超えてきた津波のために、柱と姪をつかんでいた両手が離れてしまいました。二度と愛する姪の声を聞くことはありませんでしたが、同じ公民館に避難してきている方々のために、笑顔で歌って踊って、悲しみを明るく照らしていました。

同じような話は私と話をしてくれた幾人もの被災者の方々から伺うことができました。この状況においてさえ、孟子のいう「人に忍びざるの心」(人が不幸になるのを見過ごせない心)が勝ったのです。

巨大な力のために突然多くの予期せぬ死が訪れ、それがあまりにも身近に覆いかぶさってきました。多くの人々が「死」を避けられないものとして、他人事ではなく自分のこととして受け入れざるをえず、結果としてハイデッガーのいうところの「実存的生き方」、不安や恐怖を引き起こす死を引き受ける本来的な生き方、つまり未来に可能性を見出すよりよい生き方ができるようになったのでしょうか。私はここにきて確信しました。必ず復興はできます。苦難は乗り越えられます。明るい未来はやってきます。

そう うれしいんだ 生きるよろこび

たとえ 胸の傷が 痛んでも (アンパンマンのマーチより)

最後に、底抜けに明るく元気な医療チーム、着実にすばやく仕事をこなす事務部門、深い洞察で示唆を与えてくれた心のケアチーム、いずれもデクノボーにさえなれなかった班長以外はすばらしい編成でした、さらに不在中に私の仕事を私以上にしてくれた方々、笑顔で送り出し、迎えてくれた妻と子どもたちに感謝します。貴重な体験をさせていただきましてありがとうございました。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 西村 美智子

私はこころのケア要員として活動を行ってきました。活動前は「次々とやってくる支援者に同じ話を何度も繰り返さなければならず、こころのケア要員は本当に必要とされているのか」と不安でした。

しかし避難所に入ってみると、次々に被災者の方々から挨拶をしてくれ、私たちの「体調はどうですか？」の声掛けをきっかけに、多くのことを語ってくれました。内容は震災前の漁師の仕事や家族のこと、また避難所内の出来事や仮設住宅の抽選に当たらないという不満など様々なものでした。

避難所で聞いた膨大な量の話の中から継続して関わる必要があるものを厳選し記録にまとめることはとても大変な作業であり、こころのケア班だけでは解決できそうもないDVやいじめ、家族間の対立など私たちには荷が重すぎる内容の相談も多かったです。しかし、私たちが話を聞き記録に残したことで現地の保健師へとつなげることができ、必要な支援やケアが今も継続されているのではないかと思います。



第 13 班 活動報告

高松赤十字病院 耳鼻咽喉科医師 勢井 洋史

6月10日、我々は第13班として石巻へ向けて出発しました。これまでの救護班は8名前後で構成されていましたが6月からは規模を縮小することが決まり、やや少ない5名というメンバーで臨みました。移動手段は新幹線と車でしたが、それでも2日ばかりでの移動でした。

6月当時の石巻医療圏は、避難所数はピーク時の約50%（313→164か所）に、避難者数はピーク時の約25%（41,990→9,548人）まで減少するも、未だ復旧が遅れる地域や無医村地域が存在していました。そのため石巻赤十字病院を本部として、これらの地域を8つのエリアに区分し、全国から集まってきた救護班が1エリアずつを担当した。我々は旧北上川以東地域にて災害救護活動を行いました。

震災から3ヶ月が経過しており、これまでの活動班とやや異なる点として、地元医療への移行を手助けするために本部からは・避難所の統廃合・巡回頻度の減少・地元開業医への積極的紹介など、被災者から救護者への依存を減らすための努力が求められました。

6月11～14日の4日間の診療活動のうち、午前～昼過ぎまでの時間帯は救護所で診察を行いました。延べ36人を診察したが、高血圧や上気道感染症、外傷、皮膚疾患が比較的多かったです。

担当した救護所は6月より全て院外（救護所外）処方になり切り替わったため、土地勘のない我々は地図を見ながら薬局を随時案内しました。午後からは応援診療として、別の救護班が所属する診療所に手伝いに行きましたが、受診人数こそ多少の差はあるものの、疾患内訳はほぼ同様でした。

活動中、診療所に来るための交通手段がなく来られない人もいと伺いましたが、6月14日より無料巡回バスの運用が開始となったので、今後交通手段はある程度改善が期待できるのではないかと考えられました。また、不眠や心的外傷後ストレス障害（PTSD）様の症状（※1）を訴える人も少なからず存在したため、精神的ケアも含めた体制が早急に必要であると感じました。



※1 PTSDの主要症状は再体験（想起）、回避、過覚醒の3つです。

- 1) 再体験（想起）…原因となった外傷的な体験が、意図しないのに繰り返し思い出されたり、夢に登場したりします。
- 2) 回避…体験を思い出すような状況や場面を、意識的あるいは無意識的に避け続けるという症状、および感情や感覚などの反応性の麻痺という症状を指します。
- 3) 過覚醒…交感神経系の亢進状態が続いていることで、不眠やイライラなどが症状として見られます。



東日本大震災救護活動に参加して

高松赤十字病院 看護師 西山 寛子

3月11日準夜勤務前、何気なくつけたテレビから地震速報が流れ出し、それから次々映し出される津波映像に恐怖を覚えたことが忘れられません。そして私は第13班の救護班の一員として任命され、6月11日宮城県石巻市の津波の跡地に立ちました。

道は整地されてはいますが、3ヶ月が経過しても津波の傷跡はそのまま、涙が出ました。

災害対策本部に混乱はなく、救護班を的確に指示・配置し、主にヤンマー救護所が活動場所となりました。救護所に訪れた患者はほとんどが慢性疾患で定期薬をもらいにきた方でした。一人「水溜りを見てもあのときが思い出されて怖い」と不眠症の方がこられ、「ここにくれば日赤の看護師さんがいるから」と言われました。ただただ、話を聞いてあげるしかなく、背中を撫でさせると涙を流されました。

道中、救護服の私たちを見るなり、「ご苦労様です」「遠くからありがとうございます」という言葉をかけていただき、赤十字が信頼されていると強く感じました。

一人が出来ることは小さいですが、「人間を救うのは、人間だ。」と改めて思った活動でした。



撤収班として再び被災地へ

日本赤十字社香川県支部 事業推進係長 大林 武彦

東日本大震災災害救護活動に使用した救護資機材、救護車両等が石巻赤十字病院に多く残っており、その撤収や今後の救護班の派遣に係る業務調整の命を受け、海野主事とボランティア3名で現地に向かい、私は初動班で救護活動に参加してから、約2ヶ月ぶりに被災地に入ることになりました。

災害発生当初の救護班は、香川県支部の災害救護車両を使用し現地まで往復していました。その後、JALやANAの無料搭乗のサービスにより秋田まで航空機を利用し、秋田空港から石巻市まではバスを借上げ、救護班の送迎をしていました。4月15日以降、JAL、ANAの無料搭乗のサービスが終了し、秋田空港から石巻市までは救護車両で往復することになりました。この際使用した車は、香川県支部の車両ではなく、鳥根県支部、高知県支部、徳島県支部の車両を借りました。理由は香川県支部が石巻赤十字病院に駐車している車両はトラックやdERU等で、多くの救護班員が長時間移動するには困難だったからです。ただ、第12班が秋田入りする際にはどの県も救護車両が撤収しており、今回、我々の撤収班が第12班を秋田空港から石巻市まで送迎しました。

5月21日の9時に高松を出発し、23時に石巻赤十字病院に到着しました。病院の駐車場にある救護車両を確認し、少し安心するもdERUのバッテリーは長期に渡る救護活動のため、案の定かなり弱っていました。その後すぐに車を走らせ、明け方4時40分に秋田空港に到着し、救護班を迎えました。石巻赤十字病院には、dERU、救急車、トラックの3台。我々が使用した通信指令車を併せると4台になるため、救護班の主事にdERUと救急車の高松までの運転を依頼しました。我々撤収班は秋田市内まで残りの救護班員7名を、通信指令車とトラックで送り、その足で日本海側を通り帰ってきました。

撤収班の任務

- ①救護車両（dERU、救急車、トラック）及び救護資機材（発電機、テント等）の撤収。
- ②宮城県支部、石巻赤十字病院との業務連絡調整。（dERU撤収に関わる案件等）
- ③救護班を秋田空港まで送迎。
- ④その他（今後の救護車両の手配、食事関係、宿泊関係等）

撤収関係は、石巻赤十字病院によるバッテリー充電器の貸与もありスムーズに遂行しました。今後の救護班用の宿泊を予約することは困難を極めました。殆どの宿泊施設は救援関係者や業者等により半年先まで予約が埋まっており、また実際に被災し、宿泊営業再開が困難な施設も多くありました。ただ、石巻に多くの仲間が来ていると痛感し、勇気づけられました。石巻圏の復興はこれからという時期にようやく来たような気がしました。特に急性期医療の分野は復興しつつあるように思えましたが、きめ細やかな救護活動として、巡回診療、こころのケア等がどこまで対応し、どの方向へ進もうとしているのか、焦点をしっかりと絞っていくことが重要だと思いました。5月28日に香川に帰着した際は、台風2号の接近に伴い大雨でした。5月29日（日）～30日（月）にかけては支部で待機し、高松市に救援物資を配布し、県内の救護活動に従事しました。



こころのケア

高松赤十字病院 社会係長（臨床心理士） 島津 昌代

当院からは、4月2日に単独派遣された牛尾看護師を皮切りに、救護班に帯同した形態で6名、「こころのケアチーム」として4名が被災地に赴きました。現地での活動は、他県の「こころのケア要員」と合流し、主に避難所を巡回しながら行うものでした。基本的に、日赤の「こころのケア」は被災した人に寄り添い、彼らのストレスを緩和させて安心感を取り戻してもらうことに主眼を置いています。そのために、まずは被災した

人の傍に行って話を聴くということから始めることとなります。私達が割り当てられたのは、渡波地区にあった3つの避難所（渡波小学校、渡波中学校、門脇中学校）でした。

避難所では、まずその責任者と会って注意事項や申し送り事項を聞き、次に救護所があれば救護スタッフに状況を聞いてから被災者の元に向かいます。退出時には状況を報告してその時々との情報交換を密に図ります。これは、避難所が被災した人にとってその時点での生活の場であり、“生活”としての秩序を取り戻してきているペースを部外者がかき乱さないために必要な配慮といえます。私達は、おもに血圧測定や簡単なマッサージ等を行いながら今の状況や気持ちを聴いてまわりました。一口に「こころのケア」と言っても、各自の生活ペースができてくるとニーズは様々です。怖かった体験や体調不安を語る人もいれば、目の前の問題として、仮設住宅にはいつ入れるのか、それからの生活はどうなるか、この暑さや蠅はなんとかならないか等々の話も出ます。そんな話を聴きながら労ってまわる「こころのケア」の活動は成果が見えにくいものですが、実は、それが“日常の回復”に向かって動き出しているということなのかもしれません。





病院支援・主事

高松赤十字病院 主事 三好 英文

3月24日から31日までの一週間、中・四国ブロックの10名の事務職員と共に石巻赤十字病院内に開設されている「石巻圏合同救護チーム」の本部支援要員として従事しました。

この合同救護チームは、日赤の医療班だけでなく医師会や各都道府県編成のDMAT等、様々な組織から派遣された医療班を統括協働する組織で、本部に到着した救護班の受け入れやオリエンテーション等の業務の他、石巻圏域に約300ヶ所ある避難所の把握・情報収集が主な任務で、特に避難所情報の登録作業は、処理すべきデータ量が膨大で連日深夜にまで及びました。

現地では、非常食と水のみでの食事、病院内の廊下で雑魚寝という過酷な環境下での活動が続きましたが、本部において同じ高松日赤の救護班と遭遇し、共に声を掛け合うことで何度も励まされました。また、当初の予定期間を延長してまで活動したいと申し出る救護班も多数見られ、その救援活動に対する強い思いに私自身も勇気付けられ、最後まで心折れることなく、「今自分にできることは何か」を自問自答しながら活動に当ることができました。

活動期間中、本部には全国各地から日赤救護班をはじめ医師会、大学病院等様々な組織の救護班が訪れ、各救護所での医療活動を展開しました。また、吉野家による食料支援や自衛隊による入浴支援も行われ、組織の枠を超えて「被災者の力になりたい」という同じ目的の下、支援にあたる姿は日赤のスローガンである「人間を救うのは、人間だ。」そのものだと感じました。

今回の活動を通して、災害支援において特に重要なのは各関係者との「コミュニケーション」であり、それが疎かになると情報の共有や作業の効率化が図れず、結果的に現場での混乱に直結すると感じました。

今回の活動は被災者への直接的な支援ではありませんでしたが、少しでも被災された方々や被災地の復興支援に貢献できていればと思いました。



病院支援・こころのケア

高松赤十字病院 看護師 牛尾 由美子

東日本大震災から約3週間経過した時期に、こころのケア要員として石巻で救護活動を行わせていただきました。こころのケアは、被災直後から始まるといわれていますが、被害が大きすぎて、被災者の方も毎日生き延びるのが精一杯といった状況でした。

そのような中で、私たちが行ったことは、石巻赤十字病院の職員へのケアと地域の保健師を中心にした被災者のケアでした。

職員へのケアについては、リフレッシュルームの運営を中心に活動しました。ハンドマッサージや足浴を行いながら、職員の話の傾聴し、職員がリフレッシュできるくつろぎスペースや環境を提供していきました。ハンドマッサージなどを行っているうちに、今までの辛かったことや、同じ状況下で働いている同僚には言いにくいつらさなどを、ポロポロと吐き出してくれました。思いを吐き出させてあげることが、職員へのケアにつながっていくと感じました。設立当初は自分だけは大丈夫と気強くしていた職員もいたようですが、職員同士の口コミや、周りの方の勧めもあってきたという方も増えてきて、少しずつ職員に浸透していているのを感じると、逆に救護に行っている私たちの心もいやされていきました。

次に、保健師を中心とした被災者のケアについてですが、私たちはあくまで一時的にしか関わることができないので、保健師を軸にして、その周りの点にならうと考えました。保健師から日々の巡回指示をいただき、巡回診療で得た情報やコミュニケーション内容を保健師にフィードバックしていきました。そこでは、何気ない会話から、今までの辛い思いを吐き出させ、それを傾聴していきました。時には、今の頑張りをねぎらっていくような声かけも行っていました。1人でも多くの方とお話したいと思いましたが、限られた時間の中で、本当にごく一部の方としか関わることができませんでした。またそこでは、話をする事の難しさを痛感しました。

最後になりましたが、救援者も被災者です。これからは、被災者と同じくらい救援者へのケアも大切になってくるだろうと感じています。また、このたび、東日本大震災の救護に行かせてもらったことに感謝しながら、被災地の1日も早い復興を願いたいと思います。



病院支援・助産師

高松赤十字病院 助産師 熊野 明江

東日本大震災発生から1ヶ月後、石巻赤十字病院の産婦人科病棟で助産業務を行わせて頂きました。近隣の産婦人科病院が被災したため、全ての妊産婦が石巻赤十字病院に集まり、分娩件数が倍増している状況でした。石巻赤十字病院は、ほとんど被害がなく、ライフラインも復旧し、医療物資も届いていたので恵まれた環境での勤務となりました。だが、スタッフは無休で働いている方が多く、体調不良を訴える方もいました。

妊産婦においては心身の疲労・避難所での偏った食事などから血圧が上昇する方が多く、子癇発作・弛緩出血・早産など異常分娩が多かったです。退院指導を行いました。退院後、避難所に帰る褥婦・自宅に親戚が多数同居している褥婦など厳しい状況下での育児スタートとなりました。児が誕生し、うれしさの反面、今後の不安・心配が増強している感じでした。授乳介助を行う際も多くのことを語ってくれました。自分が出産できたが、一緒に妊婦健診に通っていた友人は亡くなったこと、水に浮かんでいる遺体を見ながら避難したなど、多くのストレスを抱えていた。今回の勤務中、スタッフ・患者が震災について自ら語ってくれ、聴くことが多かった。自分の体験を話すことで、ストレスの軽減に繋がるので聴くということの大切さを実感できました。

また、初産婦の分娩にも立ち会わせて頂きました。転院して間もない所での分娩・他県から救援に来た見知らぬ医師・助産師が立ち会ったので不安が倍増したと思われ。だが、児が誕生し「一緒に居てもらって安心しました」という言葉が聞かれ、とてもうれしかったです。被災者にとって、側にいることが安心に繋がると感じました。

今回、被災者は大きなダメージを受けていたにも関わらず、今後のことを考え、前向きな言葉を発する方が多かった。聞けば日頃から震災が起きた時の対応を家族と話し合ったり、病院内での訓練も行われていたそうです。災害に対する常日頃からの準備と心構えが大切だと改めて実感しました。



病院支援・救急外来看護師

高松赤十字病院 看護師 中本 裕子

当時、石巻エリアは救急搬送患者を受け入れる施設がなく、石巻赤十字病院がすべての要請を受け入れていました。患者数は通常よりかなり多く、支援はとても重要だと感じました。患者は、赤十字救護班の巡回診療によって避難所より掘り起こされた患者も多く見られました。

避難所から自主的に来院する患者、自宅や車の生活から来院する患者もいました。生活環境が厳しく、避難所から入院目的で来られ入院を切望する患者も見られました。医師が誠実に対応し、病状的に入院が必要でない患者にはできる限り帰宅していただくように丁寧に話をされていました。嘔吐・下痢に対しては、避難所から来た患者に対しては戻ることはできないので、軽症でも即入院が決定しており災害対応がなされていました。

今回の派遣で、私は全国から集まった支援スタッフとコミュニケーションをとりながら、石巻赤十字病院スタッフの支援になれるよう進んで声を掛け、動くように努めました。しかし患者に対してもスタッフに対しても笑顔を絶やさず温かい態度で接していた石巻赤十字病院スタッフのホスピタリティ精神に学ぶところがとても多かったです。



十分受け入れてもらったからこそ支援活動が出来たと強く感じています。石巻赤十字病院スタッフに尋ねたところ、震災前後でも院内の温かい雰囲気は変わっていないと言います。

救急車を一手に引き受けていた救急外来は、かなり忙しかったです。それでも懸命に働いていた石巻赤十字病院のスタッフと支援に集まったスタッフの姿は本当に素晴らしいものでした。



病院支援・救急外来看護師

高松赤十字病院 看護師 谷 節子

今回、私はER支援という役割を担って災害救護活動に参加させていただきました。ER支援の役割は、石巻赤十字病院の救急医療をサポートし現地スタッフの交代要員として主に救急外来で支援を行うことでした。当初は、赤十字の使命である災害救護活動の中で、救護班として活動することをイメージしていました。しかし、ER支援で救護活動をするということは考えていませんでした。そのため、はたして自分が期待される役割を担えるのか不安なまま現地に入りました。

「全国から集まった赤十字病院の医師・看護師である私達が、石巻赤十字病院の医師・看護師を支える。」という思いで心をついにし、毎日次々と来院する患者にかかわっていました。

救急車は1台も断らず、このような状況で救急対応できる石巻赤十字病院に皆誇りを持って対応しました。

活動前は不安でしたが実際活動してみると、救護活動だからといって特別なことは一つもありませんでした。災害医療・災害看護の特色や特殊性という意味を理解しておく必要はありますが、「人を見る」という役割をもつ看護師として、災害時であろうが、平時であろうが看護の本質は変わらないものです。よって、いかに日頃の看護実践を安全で確実に、そして迅速に提供できているか、そして災害時に現場で発揮できる最大限の看護スキルを提供し活動できるかということが重要であると感じました。

支援活動を終えバスに乗り込んだ私達は、驚きと嬉しさを感じました。石巻赤十字病院の医師・看護師・そ

の他のスタッフが多数病院前まで見送りにできてくれ、バスが見えなくなるまで笑顔で手を振ってくれました。看護師からは、「皆さんがいてくれたから、私達は休みが取れ、親類の搜索や瓦礫の撤去にいった」との言葉をもらいました。石巻赤十字病院スタッフも被災者なのです。

患者だけでなく、微力ではありますが誰かの力になれることは、こんなにすがすがしいものなのだと改めて感じ、ER支援に参加できたことに感謝しました。

最後に、大震災で亡くなられた多くの方のご冥福を祈ると共に、被災者の方に心よりお見舞い申し上げます。



病院支援・薬剤師

高松赤十字病院 薬剤管理指導係長 岡野 愛子

私は5月の初旬に石巻赤十字病院支援要員の薬剤師として活動しました。支援要員の業務は大きく院内、院外に分かれていました。院内での業務は調剤業務補助の他に、常勤スタッフだけではとても手が回らない全国からの膨大な量の支援医薬品の整理などでした。また、院外活動は石巻医療圏内の避難所を石巻赤十字病院の薬剤師と共に車で巡回することでした。

活動期間中に約20ヶ所の避難所を訪問しました。処方薬を渡す際には服薬指導をするとともに、健康状態や生活環境の聞き取りをしながらお薬手帳の配布や記入を行い、被災者の安全な薬の治療が続けられるよう努めました。

また慢性疾患の薬がなくなった場合には、お薬手帳からの情報で薬剤師が処方箋に転記し、その薬を配達することで日常の診察が受けられない状況に対応していました。その他、衛生環境の整備や、避難所倉庫に眠っている製薬会社から提供されたビタミン剤などを食事の際に配るなど、薬剤師の役目は多岐にわたりました。

悪路や浸水の状況は改善されていない中、毎日熱い思いを胸に巡回活動されている石巻の薬剤師の方々は、一緒に仕事をしながら本当に頭が下がる思いがしました。

行く先々で被災者の方が色々な話をしてくださいました。自分の命がどうやって助かったか、大切な人をどのように失ってしまったか、ただ話を聞き続けました。ある80歳代の紳士は逃げるときに唯一持っていた財布から、若い頃にダンスホールで踊っている写真を見せて、「なかなか男前でしょう？」と笑顔を見せてくれました。「明日も来てくれる？」と鬼ごっこの後にさびしそうに手を握った少女。「遠いところから来てくれて、ありがとう。」とパンを分けてくれた婦人。皆の笑顔が戻るよう、私たちは忘れてはいけない、これからも出来ることを続けていきたいと思えます。



本社支援・広報

高松赤十字病院 人事係長 鳥越 大輔

義援金に思いを込める方、ボランティア活動で協力する方、いろんな取り組みを計画の方など多くの皆さんが、被災地の情報を知りたがっています。しかし、被災地の赤十字施設では、目の前の命を救うという最重要活動を実施するため、貴重なマンパワーを広報に割く余裕はありません。

このギャップを埋めるため、全国の赤十字施設から、特に被害の大きい岩手県、宮城県、福島県の3県に広報担当者24名を4班に分けて派遣し、被災地のニーズや、支援者の活動内容を全国に伝えることで支援の輪を広げる、赤十字活動現地広報支援が初めて実施されました。

中四国ブロックからは、保木本主事（鳥取赤十字病院）と私の2名が宮城県第2班として仙台市、石巻市に分れて4月25日から5月2日まで8日間、広報活動を実施しました。第1班の仙台担当：上之山課長（名古屋第一赤十字病院）、石巻担当：新井係長（埼玉県赤十字血液センター）から引継ぎを受けた時は、自分で取材対象を考え、インタビューと写真、記事を書く難しさを聞き、何ができるのか不安になりました。それでも、新井係長から石巻赤十字病院の企画調整課阿部課長を訪ねれば道は開ける、とのアドバイスをもらい、すぐに石巻に向かいました。阿部課長は、多忙の中、被災地域の範囲、石巻圏共同救護チームの活動などの情報提供、さらには翌日の避難所での密着取材の手配を行ってくださいました。本当に心強かったです。

その日の夕方から開始した広報活動は、記事9件、撮影写真900枚となり、そのうち3件は日本赤十字社のホームページに掲載していただきました。今思えば、道に迷ったこと、かける言葉がわからず取材ができなかったこと、結局相方の保木本主事には活動終了まで会えなかったこと、どれも良い経験でした。

取材活動を通して、多くの方から話を伺えました。みなさん赤十字の活動を高く評価し、我々赤十字職員に温かい労いの言葉をかけていただきました。一刻も早い被災地の復興を祈念いたします。今後も赤十字の使命である人道の実現のために日々精進していきます。



作成記事：①エリア幹事引き継ぎ ②被災しても懸命に活動する母の姿を見て ③全国から集まる支援要員（谷看護師） ④～笑顔運ぶメロンパンチーム～ ⑤手から伝わる気持ち（こころのケア） ⑥新たな試みショートステイベース ⑦踏み込んだ救護活動（当院第10班） ⑧頼もしいボランティア（香川県支部） ⑨JRC指導者協議会長ボランティア ※赤字は本社ホームページ等に掲載



病院支援・臨床工学技士

高松赤十字病院 医療機器管理課 別府 政則

石巻赤十字病院支援要員として平成23年5月4日～5月9日までの6日間、透析業務を行いました。

宮城県石巻市では、石巻赤十字病院の透析装置が唯一稼働可能であり、周囲の透析病院などから透析患者が集中しました。病院スタッフは、自分達の家族の安否も分からないまま透析業務やトリアージ業務などにあたり、精神的・肉体的に疲労が現れたため休暇が必要と考え、日本赤十字社へ支援要請を行うに至りました。

私の支援は、連日透析業務にあたっている病院スタッフに少しでも休んで頂きリフレッシュしてもらうためのものでした。支援時は、震災から約2ヶ月経過しており、病院自体は落ち着きを取り戻しており、透析業務も通常勤務に回復していました。業務内容は、主に透析回路のプライミングや開始・返血操作、使用物品の準備などでした。透析装置の機種が自施設と違い操作を覚えることに戸惑いも感じましたが、無事に業務を終えることができました。

初めての被災地への支援活動で不安と緊張でいっぱいでしたが、石巻赤十字病院臨床工学技士課長より震災直後の状況をお聞きし、少しでも皆さんの力になりたいという思いが強くなりました。石巻赤十字病院スタッフの方々には、心労と疲労の中、温かく迎えて頂き感謝しています。被災地には、赤十字病院以外の施設からも多くの支援者が集まり人となりの繋がりを感じました。これからも支援の輪が広がり、一日も早い復興を心より願っております。





血液センター支援・薬剤師

香川県赤十字血液センター 製剤課付係長 濱田 秀誠

平成23年3月11日14時46分頃、宮城県三陸沖（北緯38.0、東経142.9度）、震源の深さ約24km、規模マグニチュード9.0の大地震が発生しました。

東北ブロックの検査・製剤集約センターである宮城血液センターでは震災の為、血液事業の継続が困難となり、本来、山形県で採血された原料血液は宮城血液センターへ搬送されて輸血用血液製剤として製造されていましたが、検査機器、製造機器類等の使用ができなくなり製造が困難になった為、平成23年3月13日から、搬送先が新潟血液センターに変更されて製造支援するようになりました。これは、宮城血液センターの検査・製造体制が整うまでの一時的に取られた対策でした。

今回の大震災の影響で、人々の身近なボランティアとして献血に対する気運が高まった為、本来の採血本数に比べ非常に多い採血がありました。以前の阪神淡路大震災でも同様なことがありました。全国的に震災後、採血本数が大幅に増えましたが、輸血用血液製剤には、血小板製剤では採血後4日間、赤血球製剤では採血後21日間の有効期限があります。一度に大量の血液が採血されても期限切となり、せっかく善意で採血された血液が有効活用されなくなる為、本社より、平成23年3月18日からの計画採血依頼がありました。

新潟では、最大で通常の約3倍の原料血液が搬入されていましたが、製剤部門では製造本数に対する定数人員を大幅に上回り、著しく過酷な業務内容になった為、本社から緊急支援として、中四国ブロックの製剤部門から4名の支援依頼がありました。支援活動内容としては、二班に分かれて新潟血液センターでの輸血用血液製剤の製造支援です。第一班として、岡山血液センター1名、広島血液センター1名が平成23年3月17日から2週間、私は、第二班として平成23年3月30日出発で、広島血液センター1名と2週間支援活動を実施しました。

業務内容は、香川での日常業務と大差なく、作業人員の足りない業務の補助を行って来ました。勤務中には、数回の余震もあり、業務を一時停止することもありました。私どもが帰路に着く翌日には、宮城血液センターが通常業務が可能となり、山形県での採血された原料血液も通常どおり、宮城血液センターに搬入されるようになり、新潟の製剤業務も元に戻りました。

今回の新潟への移動については、国や地方自治体、民間の協力により震災緊急援助として扱われ無事に赴くことができました。

今回の震災では、個人レベル、企業レベルでも日本全体で被災地へのバックアップをしようという温かい心がありました。現在、被災地は厳しい寒さの影響もありボランティアの参加人数が不足しているようにテレビ放送されています。今後も、まだまだ復興への後方支援の必要があるように思います。



放射線サーベイ要員

高松赤十字病院 診療放射線技師 藤原 直人

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故の救援活動の一環として、私は日本放射線技師会からの派遣依頼により4月13日から17日にかけて、福島県田村市総合体育館にて被災者の放射線被ばくサーベイ活動に従事しました。

主な活動内容は私を含む診療放射線技師4名で会場を統括し、そこでの専門的な回答や対応を行うというものでした。会場建物内でのサーベイは電気事業連合会からの派遣約25名に担当してもらい、屋外での測定などについてはより柔軟な対応が必要になるため、我々、診療放射線技師が担当しました。

サーベイの方法はGM（ガイガー・ミュラー）計数管型サーベイメーターを使用し、物の表面に付着した放射性物質から出る放射線を測定します。活動期間中に除染が必要なレベルの測定値が検出されることはありませんでしたが、幼い子供の身の回りの物の測定をはじめ、大切な人への放射線の影響を少しでも減らそうと努力する人々の姿に、現状への憤りを感じました。

今回、サーベイを終えた被災者の皆様から感謝の言葉をかけていただくことも多く、診療放射線技師として大変貴重な経験をさせていただきました。被災地のできるだけ早い復興を祈りつつ、地域へのより安全な医療の提供にこの経験を活かせるよう努めたいと思います。





後方支援

高松赤十字病院 副院長 吉澤 潔

発災当日、慌ただしく第1班を送り出した後、とりあえず院長室内に設置された急ごしらえの連絡本部は、すぐに手狭になりました。隣の応接室から、ガラステーブルやソファが撤去され、代わりにホワイトボード、会議机、TV、無線LAN、パソコン、電話、プリンター、地図、カレンダーなどが逐次運び込まれて、立派な中枢機能を有する災害派遣対策本部ができあがりました。ずらり並んだ歴代院長の肖像写真が見おろし

していました。

そのうち、この部屋専属の当直事務職員が配置されました。ここに来れば派遣中の救護班がどこで何をしているか、交代のために東北に向かっている次の班がどこまで進んだかが解りました。

救護班13班、心のケア班1班、病院支援要員11名、本社広報要員、放射線サーベイ要員各1名、dERU撤収班員も含めると延べ137名がここから発進して行きました。この部屋は5ヶ月間、確かに東北と繋がっていました。しかしです、この部屋の内部の様子を写した写真は1枚も残っていないのです。何故か、誰もそこを写さなかったのです。記録はなく、記憶だけが残りました。皆、この部屋を一步出ると、たちどころに平常の病院職員としての姿に戻りました。

何か新しい事を投げかけると、いつも聞かされる返事：「ヒトがいない」「忙しくて手一杯」。あの頃はほとんどありませんでした。救護班編成に苦労した記憶はあまりありません。赤十字病院の宿命であり、当然のことと言ってしまう身も蓋もありませんが、多くの人員を派遣し、なおかつ地域の医療を普段と変わらず支え続けるだけの体力を試され、できることを証明した5ヶ月でした。

心残りは自分自身が被災地へ行くタイミングを失ったことです。阪神大震災、中越地震では真っ先に行ったのですが。



新たな要員派遣を経験して

高松赤十字病院 副院長 安藤 幸代

救護班を派遣するかもという情報に「何のこと？」と思ったのは私だけでしょうか。地震の揺れも感じず、どこからの情報もなく通常業務をしていた看護部内は、俄に熱気を帯び、勤務表を手にも1班派遣看護師7名を決定、すぐに連絡を取り勤務調整を行いました。委員会を途中で切り上げいったん帰宅した看護師長も含め、個人装備を整え救護服姿の7名が集合したのと、看護師長達が手分けして揃えた救護物品等の積み込み

終了とがほぼ同時でした。誰もが慌しく出勤準備に奔走する中、第一報がはいってから180分後の19時に1班を送り出すことができました。

その後、次々と入ってくる情報から、今回の災害の凄まじさを改めて知りました。院長室を災害対策本部として、今後の派遣について当院としての方針を話し合い、2班以後の派遣メンバーについても決定しました。派遣はブロック代表の広島県支部の指示によるということで、確認するも連絡が取れませんでした。いつ出発するのか、どこへ派遣するのかなど疑問が増えるだけで、先行きが見えないまま長い待機時間が過ぎました。2班出勤の指示があったのは、1班出発後53時間を経過した深夜の時間帯でした。翌朝、早く出勤してきた看護副部長・師長達と一緒に、早朝のSPD倉庫で1班から知らされてきた不足・補充物品を調達し、早朝出発に備えました。出発前にはブリーフィングを行い、帰着後にはこころのケアを行うなどメンタル面での十分な配慮にも気をつけました。

今回の震災では、救護班とは別に、石巻赤十字病院へ支援看護師や助産師を派遣しました。病院支援看護師の派遣についてはブロック単位の募集では時間を要するため、本社看護部と直接メールでやりとりし派遣日程が決定、ブロックには事後承諾を得る形で進められました。本社（東京）に集合した全国からの支援職員は、バスに同乗して石巻に向かい5日間の勤務を終え深夜に本社に帰着、朝まで身体を休めてから各派遣施設に帰るといふかなりハードな活動でした。

救護班を派遣する側としては、安全に無事に帰着するまで心が休まらなかったですが、赤十字の救護班として活動を終え帰ってきたときの班員は、使命を果たした充実感にあふれた顔に変化していて誇らしく思えました。送る側も、支部・病院・血液センターが一致団結して次々に準備・派遣・迎えができた赤十字の一体感を感じることができました。





高松赤十字病院 薬剤部長 安西 英明

震災当日の15時30分ごろ救護班出動準備命令がでました。薬剤師も行くぞ！2個班だけど薬剤師は1人。誰から行く？23年度からの新しい救護班を決めたばかりだったので、じゃ、平井君行ってくれるか？「はい、行きます」。同時にジュラルミンケースに薬品セットA、Bを準備をしました。19時に救護班の出動を見送ってから次の医薬品の準備をしました。第1班が福島に着いたという連絡後に原発の事故が報道されました。放射能の影響を回避するためのヨウ化カリウム錠1,000錠を調達し、その後の救護班医薬品に追加。結局ヨウ化カリウムは服用することなく第4班以降は不用になりました。

第1班が帰着する16日頃になって八戸日赤の薬剤師から日赤薬剤師会のホームページ（HP）に活動状況と薬が足りないという情報が投稿され始めました。高知日赤からは医師、看護師、主事の第一声が“薬剤師さん絶対必要”でした。HPには薬剤師がいない救護班があり薬剤師不足が数多く訴えられていました。薬剤師がいなければお薬手帳に書かれている薬が判らない、ある薬が区別できない、薬剤師が足りませんと訴えられていました。3月22日頃には薬は東北大学や宮城県、宮城県薬剤師会が確保し麻薬も足りる状況になってきました。多くの薬の仕分けや使いなれない名称の薬の効能・用法を医師へ伝えることが大きな役割になりました。

3月16日、日赤本社から石巻赤十字病院の薬剤師支援が可能かと連絡を受けました。翌3月17日までに候補者を出せるか？それを受けて日赤薬剤師会HPに薬剤師支援の要請を掲載しました。たった1日足らずに29施設から返事があり、7施設から参加の申し込みがありました。多くの病院からは救護班で薬剤師を派遣しているから今は対応できないと知らせてくれました。薬剤師支援が可能な施設を高松で取り纏め、改めて本社より各施設への依頼を行う手順でした。

3月22日、石巻赤十字病院薬剤部長からの電話、「薬剤師が足りないです。交代要員が必要です。日赤薬剤師会で支援してもらえますか」でした。3月25日に本社医療事業部次長と連絡をとり、改めて本社から各支部、各病院へ直接依頼を出すことになりました。

本院救護班で12人の薬剤師が出動し、石巻赤十字病院薬剤師支援では2名が支援活動を行いました。全国から総数133人、延875人の支援を戴き、8月15日に石巻赤十字病院薬剤師支援は終了しました。救護班員、支援要員としての活動にそして後方支援をして戴いた全ての日赤薬剤師会会員に感謝します。



東日本大震災の救護活動を振り返って 高松赤十字病院 医療社会事業課長 久保田 洋子

3月11日、私が今回の大地震・大津波のことを知ったのは夕方のことでした。（3月の時点では、事務部経営企画課の所属でした。）あの映像をテレビで見たとき、これが本当に日本で起こった現実なのか目を疑うとともに、大きなショックを受けました。同日、日本赤十字社香川県支部として救護班の派遣が決定し、当日19時には第1班が被災地へ陸路で向かいました。病院内に災害対策本部を設け、院長、事務部長、看護部長、災害対策委員長等が集まり、情報の収集等を行いました。当初は情報がなかなか得られませんでした。救護班から本部への定期的な状況報告により、やっと状況が把握できるようになっていきました。

報告は電話または電子メールで行われました。現在地点、道路状況、到着報告、活動内容、被災地の気候状況、不足物資、次の班へのアドバイスと、様々な情報が寄せられました。その電話や電子メールの対応は、事務部の課長、係長が中心となって交代で担当し、急性期の夜間においては交代で宿直し、夜間の緊急連絡に備えました。（昼間午前・午後の2交代3月14日～5月27日、宿直3月14～22日、夜間21時まで3月23～27日。）報告内容については、パソコンに入力するとともに、災害対策本部の白板に記載し、誰もが情報をいつでも確認できるようにしました。また、救護班だけではなく、病院支援要員、こころのケア班、本社広報支援要員等も派遣しました。



派遣当日の出発式には就業時刻前にもかかわらず多くの職員が激励に集まり、帰院時の帰着式では労をねぎらいました。派遣されなかった職員は病院機能を維持し、支部・血液センター・病院が正に一丸となって取り組んだ救護活動でした。

今回の経験を活かして、今後の災害に備えていきたいと思えます。

石巻医療圏における東日本大震災への対応 ～宮城県災害医療コーディネーターとして～



石巻赤十字病院医療社会事業部長
宮城県災害医療コーディネーター
石巻圏合同救護チーム統括 石井 正

東日本大震災発災（3月11日）後、石巻医療圏で唯一の災害拠点病院であり被災を免れた石巻赤十字病院には多数の救急患者が搬送されました。

発災直後に災害対策本部を立ち上げ、日常業務をすべて停止するレベル3を宣言し、院内の安全や被災のないことを確認し、約1時間でトリアージエリア設置を完了して対応しました。発災48時間までの救急患者のうち赤エリア診療患者（重症患者）数は115名で、そのうち低体温及び溺水のような津波関連傷病はそれぞれ30名（26.1%）と5名（4.3%）で合わせて30.4%と多い反面、阪神大震災と異なりクラッシュ症候群は7名（6.1%）と少数でした。発災後1週間で計3,938名の救急患者が来院し、発災後100日までに当院に来院した救急患者数は、18,381名でした。

発災翌日よりDMATや日赤救護班などの救護チームが当院に参集しました。当初、通信がほぼ途絶したための情報不足から散発的に近くの避難所や孤立した地域へ救護チームを自衛隊等の要請により派遣していましたが、3月16日にカバーすべき避難所がおよそ300ヶ所あることがわかりました。要支援度の高い避難所からカバーすべきと判断し、避難所すべてのアセスメントを行い、3日で完了しました。

以後、傾向の把握が必須と考え、9月30日活動終了まで巡回避難所のアセスメントを継続し、毎日更新し、その時系列データをすべて記録・保管しました。一方、様々な組織から派遣された救護チームが個別に活動するのは非効率的であると考え、関係各機関と調整し、3月20日にすべての組織の救護チームが一元的に活動する「石巻圏合同救護チーム」を立ち上げました。以後、全国から石巻圏に集まった救護チームはすべて合同救護チームに参加し、1日最大59チーム（医師数100名）、9月30日活動終了までに延べ3,633チームが参集しました。また、交替で本部に自主的に参集してくれたのべ22名の災害医療のスペシャリストの方々が助言役や調整役を担ってくれました。

これだけ多くの救護チームが参加すると、本部ですべての活動を管理するのは至難です。そこで、石巻医療圏を14のエリアに分け、エリアごとに必要に応じて救護チーム（ライン）を割り振り、その中から幹事チームを決め、翌日の活動についてはエリア内で決めてもらう、いわば「活動の自治」を行ってもらいました。

アセスメントデータから、35ヶ所で食料が不足し、100ヶ所でトイレを含む衛生環境が劣悪であることを抽出しました。食料不足の避難所に対しての食料配給を行政に要望し、衛生環境の劣悪な避難所には感染管理認定看護師を派遣して衛生指導を行ったほか、優先的にラップ式トイレの配布や手洗い装置の設置などを行いました。石巻医療圏内で感染爆発や感染症の蔓延は、現時点（2012/2月）においても発生していません。院内初動対応については、具体的実務的に見やすく示されたきめ細かなマニュアルとそれに基づいた訓練、ハードやライフライン保全のための整備・関係機関との連携強化や災害応援協定などが役に立ち、今回の比較的スムーズな初動体制の確立につながりました。しかしながら、それは災害のファーストインパクトに対して有効であるに過ぎません。その後に発生するさまざまな状況のすべてを予想するのは困難で、ファーストインパクト以降は応用問題の連続でした。

また、今回の我々の活動は、すべての医療組織、東北大学、行政、自衛隊、消防、警察、企業、ボランティアなどとの協働が必須でした。日本赤十字社のサポートも大変重要で、膨大な業務量のある石巻圏合同救護チーム本部のロジ機能を維持するために、3月12日～7月31日まで延べ1,173名の本部事務支援要員を派遣してくれましたし、院内診療支援として3月12日～8月14日まで延べ3,929名の医療職を派遣してくれました。

災害対応のマネジメントに必要なことは、①迅速な初動体制確立のための事前の備え②知恵と決断力③逃げないところ④実行力⑤データに裏打ちされた客観的視点の5点であると考えます。①を達成するためには、リアルなマニュアル、訓練、普段からの関係機関との連携が必要です。②は、自分一人でははなはだ不十分なので、⑤のようにデータに基づく客観性を担保しつつブレン、上司、スタッフ、関係機関のカウンターパートなどの助けが必要になります。③は言い換えれば、自己限定しない・自分に妥協しないことです。でなければ、直面する状況を打開できません。④も②と同様に自分だけでは何もできないので、所属組織や他組織とのコンセンサスや支援/連携体制づくりは必須であると思います。それには、他者に対して常に敬意を払って接することが最も肝要であると信じています。

第3章

血液支援



香川県赤十字血液センター 事務部長 村井 真明

日本赤十字社では、血液製剤のさらなる安全性の向上と安定供給の確保を目的に、血液事業の広域運営体制への移行を、全国的な規模で、平成 24 年 4 月発足を目的に数年前から進めてきています。それは、全国を北海道、東北、関東甲信越、中部、近畿、中四国、九州の 7 ブロックに分け、それまで各都道府県で行ってきた血液事業のうち、主に検査と製剤部門をブロック単位で集約して実施するというものです。

この過程の中で、全国的に、各ブロックにおいては検査・製剤部門の集約化が逐次実施され、東北ブロックについては、すでに宮城センターに検査・製剤部門が一本化されていました。ちなみに、四国でも、香川センターで四国内における製剤集約が平成 23 年 3 月をもって完了していたところです。

東日本大震災は、このような状況の中で、突然発生しました。宮城センターは機能不全に陥り、東北各県への血液製剤の供給ができなかった事態となりました。こうして東北ブロックに対する全国的な支援がブロック単位で実施されました。

未曾有の大災害であったにもかかわらず、血液事業については、さしたる支障もなく円滑に被災地域に対する血液製剤の供給体制を維持できたということは、日本赤十字社としては誇るべきことであると思われます。それは血液事業に従事する全国各地の職員のこれまでの積み上げた努力の成果でもあります。

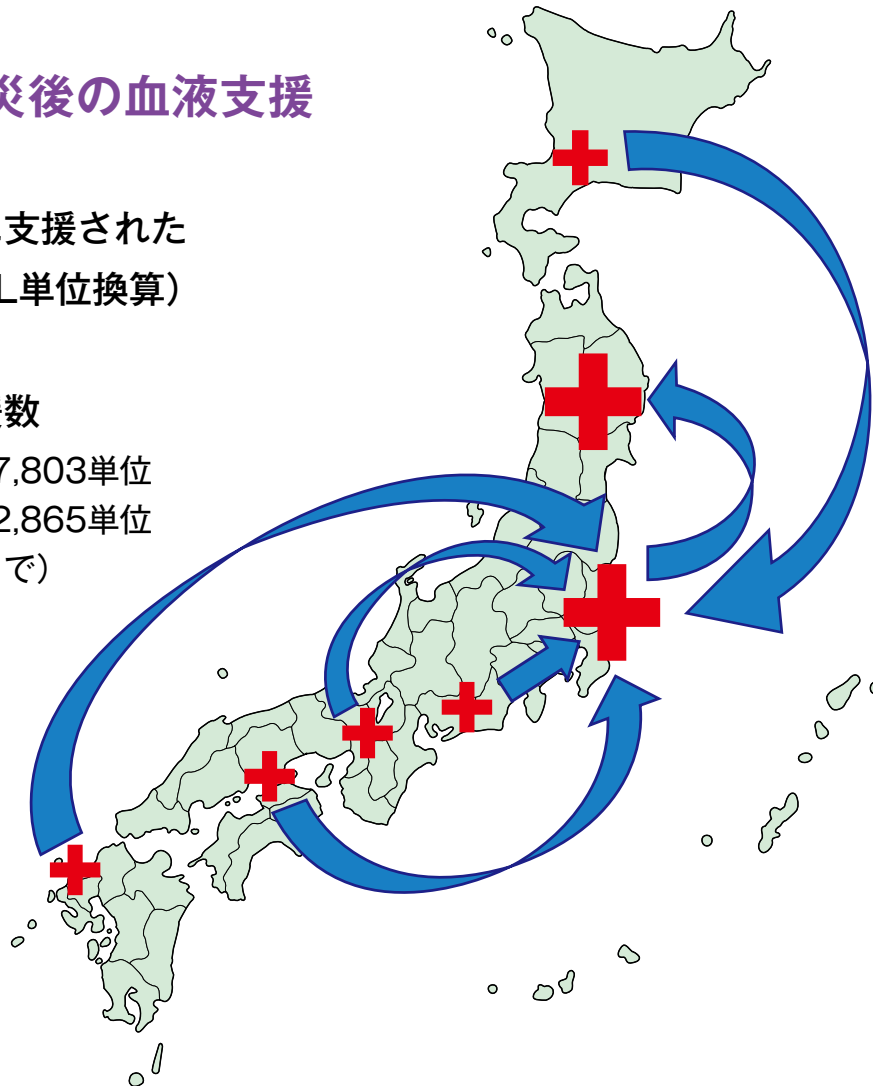
四国地方では、今後、南海地震の発生が想定されますが、香川センターは四国内において唯一の製剤部門を有するところであり、四国内の血液供給の中心になるところです。我々職員一同、このような自覚を持って、香川県内にとどまらず、四国全体を視野に入れた業務の遂行に当たる必要があると思う次第です。

東日本大震災後の血液支援

**東北ブロックに支援された
血液量 (200mL 単位換算)**

全国からの支援数

- ・ 赤血球製剤：57,803 単位
- ・ 血小板製剤：72,865 単位
- (震災～12月末まで)





▲ 被災した宮城県赤十字血液センター

震災後、東北地方での献血活動は一時停止しました。青森県・秋田県・山形県の献血受入体制は順次復旧しましたが、岩手県・宮城県・福島県においては復旧が4月中旬までで続きました。

震災後は全国で血液支援を実施しました。血液支援は各ブロック（北海道・東北北陸・近畿・中国・四国・九州）から東京ブロックに集められ、東北ブロックに搬入されました。

血液支援にあわせて、人力的な支援として各地の血液センター職員及び本社職員の派遣が行われました。香川県赤十字血液センターからも製剤課職員を派遣しました。

4月に入り、輸血用血液製剤使用量が震災前までに戻り、本格的な血液支援が始まりました。

4月18日より岩手県・宮城県・福島県において献血受入体制が復旧しました。

献血受入体制は復旧しましたが、現在においても献血者数は昨年の8割程度にとどまっています。このため、血液支援は現在も続いており、全国からの支援がなければならない状態です。

東日本大震災における中四国9県からの支援単位数集計

(200mL 単位)

累 計	血小板製剤					赤血球製剤				
	A	O	B	AB	計	A	O	B	AB	計
3/11 ~ 3/20	690	340	495	355	1,880					
3/21 ~ 3/27	820	680	470	220	2,190					
3/28 ~ 4/ 3	820	680	470	220	2,190					
4/ 4 ~ 4/10	820	680	420	220	2,140	471	237	191	16	915
4/11 ~ 4/17	890	680	470	210	2,250	266	216	191	76	749
4/18 ~ 4/24	740	680	420	220	2,060	266	196	126	56	644
4/25 ~ 5/ 1	570	380	270	190	1,410	266	196	126	56	644
5/ 2 ~ 5/ 8	200	160	120	120	600	168	140	98	42	448
5/ 9 ~ 5/15						196	168	84	56	504
合 計	5,550	4,280	3,135	1,755	14,720	1,633	1,153	816	302	3,904



東日本大震災を経験して

香川県赤十字血液センター 採血課長 木村 史子

昨年3月11日に発生した東日本大震災は、平穏な暮らしを一瞬に奪い、早一年が経ちました。震災当日、会議中に突然「今、大変な地震のニュースが流れている」との情報に会議が中断、テレビの画面を通しこれは現実の事かと思いきや、津波に言葉もない中、救護班の派遣をするとの情報で慌ただしくなりました。過去の経験に見られるように災害が発生した場合、多くの人は何らかの役に立ちたいと思う気持ちに、献血希望者が一時的に増えることが予測されました。

献血者の心理に配慮しつつ採血施設の混雑に備えなければと受入体制を整えました。

夕方には、東北地方での献血活動が一時中断との情報に、採血機能の停止による血液不足が予想され、必要な血液製剤の確保及び供給の準備等の措置が必要となりセンター内が慌ただしく動き始めました。

採血資材について適切な在庫量等の確保、人員等の配備手配が続きました。

今なお相次ぐ余震の中、東北地方では献血車が入りくい地域があります。震災早期より血液事業本部主導で、採血状況や供給状況の情報共有ができ、全国の各ブロックに割り当てられた血小板・赤血球を東京都センターに集め、拠点センターとして陸路での供給が確立できました。

多くの県民の皆様により長い期間「献血」という形で支援が続けられています。有効期限のある血液に対して、継続したご協力に接し、被災地へ向かいたいとの気持ちを、献血現場で取り組む事で、赤十字の一員としての一体感を感じてきました。

厳しい状況の中、被災地に入り危険をかえりみず活動されているボランティアの方々の姿が印象的です。今後私たちは苦難の日々を忘れることなく助け合いと感謝の心を忘れずに、被災地の一日も早い復興を願っております。



▲ 被災者救援のため多くの献血者が受付に並ぶ
(平成23年4月末)



▲ 献血車内

第4章

ボランティア・ 青少年赤十字活動記録



▲香川県支部で震災の様子を見守るボランティア

3月11日に発生した東日本大震災。その報道を見たボランティアの方がいち早く香川県支部に駆けつけてくれた。香川県支部から、延べ22名のボランティアを被災地等に派遣し活動を行った。



▲被災地の様子を報道で見た一般の方から義援金の問い合わせが多く寄せられた



▲被災地への支援について話し合うボランティア



3月25日 ボランティアの中心的メンバーが集まり被災地への支援をどのように行うか話し合った。この時の会議では、香川県から被災地へ炊き出しなどのボランティア活動に行くことが話し合われたが、被災地までの距離、費用などの面から側面的な支援を行うこととなった。



▲無線の設置

発災当日、香川県赤十字安全奉仕団の金森 仁氏が救護班1班に帯同し被災地へ向かい、救護班の活動をサポートしてくれた。



◀ dERUの展開を行う金森氏



▲ DMAT 隊員と活動について打合せ



▲石巻専修大学内に救護班の使用した毛布を干す



▲雪で汚れた dERU の天日干しを行う



▲出発に伴い、浜田県知事より激励を受ける参加者一同
左肩の赤十字マークに被災地への支援を誓う



4月2日～5日まで香川県と香川県社会福祉協議会が宮城県石巻市に第1回災害ボランティアを派遣することに伴い、香川県支部からも5名のボランティアが参加した。

- 宮城県石巻市に向け出発する参加者
大塚 友子 小山 敬三 久保 一男
高橋 正光 中西 俊明



▲泥まみれの家の掃除を行う



▲被災した家の片付けに入るボランティア



4月6日～11日
防災ボランティアリーダー河野好一氏が日本赤十字社宮城県支部ボランティアセンター支援のため出発、被災地で活動を行った。



▲ボランティアセンターでは、被災者とボランティアのニーズをマッチングさせて、現地での活動を支援する



▲日本赤十字社本社に設置されたボランティアセンターには全国から情報が集まる（本社 201 会議室）



4月7日～9日
日本赤十字社本社に設置されたボランティアセンターに、防災ボランティアリーダーの高橋真里氏を派遣し、被災地で活動を行うボランティアの後方支援を行った。



▲日本赤十字社本社内に設置されたボランティアセンターで、他県から来たボランティアと協力し派遣・運営にあたる



▲日本赤十字社本社内に設置された地図に救護班の派遣状況を示す



4月27日～30日
香川県と香川県社会福祉協議会が主催する第3回災害ボランティア派遣に伴い、香川県赤十字安全奉仕団の川南 久仁子氏を宮城県石巻市に派遣した。



▲石巻専修大学に設置されたボランティアセンターで受付を行い活動場所の指示を受ける



▲石巻専修大学には全国から集まったボランティアがテントで寝泊まりしボランティア活動にあたっている



▲活動場所の石巻市立大街道小学校に到着し打合せを行う



学校再開に向け教室から体育館へ移動する▶
避難者の引っ越しを手伝う



5月13日～16日
香川県赤十字血液センターの車両で、石巻赤十字病院に置いてある、香川県支部所有の資機材の持ち帰り、被災地でのボランティア活動を行った。

- 被災地に向け出発するボランティア
荒谷 敬一郎 荒谷 敬人 小山 敬三
金森 仁 河野 好一 阪入 剛裕



▲出発に向け活動内容、移動ルートについて確認を行う



▲発災から2ヶ月経過しても、がれきの山が続くなか片付けを行う



▲被災地でのがれき撤去作業にはマスクが欠かせない



▲民家の床下の泥をかき出す



▲日赤香川県支部のトラックから荷物を整理し持ち帰る



▲出発前に職員と打合せを行うボランティア

5月21日～28日

宮城県石巻市の救護所撤退に伴い、dERU及び救護資機材を持ち帰るため、撤収班（支部職員2名）、ボランティア3名を派遣した。

●被災地に向け出発するボランティア

荒谷 敬一郎 金森 仁 宮本 健三



▲被災地からの撤収に向けてdERUの点検を行う



▲持ち帰る物資をトラックに積み込む



▲石巻赤十字病院に設置された災害対策本部で撤収に向けて打合せを行う



▲発災から3ヶ月が経過したが、まだまだ被災地ではボランティアのニーズが多い



▲被災地に寄せられたメッセージに見いるボランティア



6月11日～14日
第4回災害ボランティア派遣に伴い、日赤香川県支部から香川県赤十字安全奉仕団2名を宮城県石巻市に向け派遣した。

- 被災地でがれきの片付けにあたる
福家 恵美子 三笠 薫



▲震災から5ヶ月が経ち、未だ津波の爪痕が残る町での作業



▲被災地には他のボランティア団体も来ており、集めたがれきをカヌーで運搬していた



▲ドロで汚れた家の片付けを行う
床板を外し泥をかき出すボランティア



▲かき集めた土砂を土嚢袋にいれて片付ける

6月25日～28日
第5回災害ボランティア派遣に伴い、日赤香川県支部から宮城県石巻市に向け、山地義忠氏を派遣した。



3月11日に発生した東日本大震災以降、職員が災害救護に携わったため、講習普及事業をボランティア指導員が中心となり指導員のコーディネート、講習の実施までを行った。



▲支部で行う講習会の指導にあたるボランティア



▲専門学校で行う講習会に指導員を派遣する



3月11日の発災以降毎日寄せられる義援金の受付や、領収証の作成・整理を多くのボランティアの方々に行っていただいた。



▲義援金の受付・領収証の発行を行う



▲多くのボランティアの方にご協力いただき、領収証の作成、義援金の取りまとめを行う



4月2日
 青年赤十字奉仕団のメンバーが集まり、南新町商店街とNEW レオマワールドで街頭募金を実施した。
 NEW レオマワールドでは、香川県レスキューサポートバイク赤十字奉仕団も参加し、募金の呼び掛けと寄せ書きの作製を行った。
 集まったメッセージは被災地の避難所へ届けた。



東日本大震災の発生に伴い、多くの青少年赤十字メンバー、ボランティア、企業の方々から義援金が寄せられた。





▲全校集会で東日本大震災の義援金を呼び掛ける 高松市立檀紙小学校児童



▲校門で募金の呼び掛けを行う さぬき市立志度中学校生徒



JRC メンバーが作製した寄せ書き・千羽鶴は救護班に託され、現地の救護所に掲示された。

東日本大震災ボランティア派遣一覧

氏名		派遣期間	活動場所
1	金森 仁	3月11日～3月16日	福島県田村市総合体育館 宮城県仙台市陸上自衛隊霞目駐屯地
2	金森 仁	3月23日～4月12日	宮城県石巻市
3	大塚 友子	4月2日～4月5日	宮城県石巻市
4	小山 敬三		
5	久保 一男		
6	高橋 正光		
7	中西 俊明		
8	河野 好一	4月6日～4月11日	日本赤十字社宮城県支部
9	高橋 真里	4月7日～4月9日	日本赤十字社本社
10	川南久仁子	4月27日～4月30日	宮城県石巻市
11	荒谷 敬一郎	5月13日～5月16日	宮城県石巻市
12	荒谷 敬人		
13	小山 敬三		
14	金森 仁		
15	河野 好一		
16	阪入 剛裕		
17	荒谷 敬一郎	5月21日～5月28日	宮城県石巻市
18	金森 仁		
19	宮本 健三		
20	福家 恵美子	6月11日～6月14日	宮城県石巻市
21	三笠 薫		
22	山地 義忠	6月25日～6月28日	宮城県石巻市

赤十字防災ボランティアとは

災害時、さまざまな人や団体がボランティア活動に参加しますが、その時にそれぞれがバラバラに動いていたのでは、機能的に活動することができません。そこで災害を想定して、事前からボランティアの登録や訓練を行い、実際の災害において力を発揮できるようなボランティアを養成しておくという考えに基づいてつくられたのが、赤十字防災ボランティアです。

東日本大震災を振り返って

香川県赤十字防災ボランティア 金森 仁

3月11日、東北で地震があったということで、すぐTVを見ました。目に飛び込んで来たものは息を飲む光景でした。体が強張りました。私は身支度を軽くすませ、香川県支部へ向かいました。香川県支部では慌しく救護活動の準備が進められていました。私は救護担当者の大林係長に「一緒に東北へ行かせて下さい。」と頼みました。どうしても現地に行き、自分ができることをしたかったのです。今まで防災ボランティアとして培ってきたものをここで発揮しないでいつ活動するのかという思いで胸がいっぱいでした。私は国内型緊急対応ユニット（dERU）の取り扱いには慣れていたので、その補助要員として派遣されることが決定しました。19:00 出発です。私を含め救護班チームは15名でした。現地に行く途中で家族には連絡して了承をもらいました。家内は少し心配していました。

現地には24時間を要して到着しました。最初は福島県田村市総合体育館です。1,500人もの被災者が集まっています。私は医療行為をすることは出来ません。出来ることは何か？赤十字の救護員が円滑に活動出来るように後方支援だと考えました。医療資機材の運び出し、発電、通信連絡の構築、寝床等自分に出来ることは全力で行いました。

翌日は宮城県仙台市の陸上自衛隊霞目駐屯地でSCU活動の命令がでました。救護班も私も殆ど寝ていない状況で、私はトラックを運転していましたが、気が張っているせいか眠気は無かったです。でも救護班の皆さんが気遣ってくれ、班長の伊藤先生が自ら、トラックの運転を交代いただき、私は少し休むことが出来ました。仲間と認めていただき、本当に嬉しかったです。3月16日に全員無事帰ってきましたが、私は再度、香川県支部に無理を言って救護班第5班から第8班まで（3月23日～4月12日）一緒に現地で活動させていただきました。救護班はその都度入れ替わりますが、私は現地にずっと残り隙間を埋めることに専念しました。また香川県に帰ってからは仲間呼びかけ現地の土砂のかき出しボランティアも兼ねて香川県支部の救護資機材を撤収する活動として2回現地に入りました。

今回の東日本大震災は想像を絶する被害でした。明日来てもおかしくない南海地震に備えるため防災意識の高揚の啓発に香川県支部と仲間たちと共に、これから熱を注ぎたいです。

被災者の皆様方には1日も早い復興を願ってやみません。



東日本大震災ボランティア活動に参加して

香川県赤十字安全奉仕団 福家 恵美子

平成23年3月11日（金）午後、テレビで大地震のニュースから大津波の映像を目にすることになり、未曾有の災害と感じました。仕事の帰り、日赤香川県支部に寄りました。午後7時に第1班救護班出発という。支部職員2名、奉仕団1名が加わるのを手伝い見送りました。支部では、会社帰りの方々が高額紙幣を募金箱に押し込んで下さいました。土曜も日曜も無いと奉仕を決めました。募金に感謝し、募金活動をして下さる方々に感謝し、募金業務に携わって下さる方々を募り、月曜からは日本赤十字社の旗の下に奉仕活動をした。職員2名の補助はできませんが、募金活動に奉仕団一丸となり活動し、講習活動もこなしていきました。

募金が一段落した6月初め、県社会福祉協議会が募集した第4次ボランティアに応募し、宮城県石巻市に赴きました。6月12日は、牡鹿半島小湊地区表浜の小さな漁港の清掃。港は山の上から2回と海からの津波で大渦を巻き、漁の神を祀っていた小さな島が壊れ、家具の残片、漁具の残骸、漂着物等、3ヶ月手つかず状態でした。帰るとき漁協の組合長は、新しく神も祀ってくれ、これだけ綺麗になったので、漁を再開するとお礼の言葉をくれました。

13日は、死といくつも書かれた道を通り、鮎川のデイサービスの施設の物品を出し、泥出しに携わりました。潮を含み泥を纏った品々は、涙を誘いました。お礼にもならないがと、老人が抹香鯨の歯を下さいました。半島の沖は、鯨の漁も産業で、鯨の博物館も有ったと聞きました。

11月、再び行った仲間から、漁船が復興し、仮設住宅が並んでいた港の話と、壊れた疵はそのままで、まだ使われていない施設のことを聞きました。鯨の歯は、新しく出来た店で土産物として並んでいたと言います。事実を踏まえて、1日も早い復興をされることを心から祈っております。

募金活動には、災害の名称が必要であります。名称を変更することによって複雑な障害が起こります。関係機関は名称を熟慮して付けて欲しいと感じました。



平成 24 年 4 月 7 日～9 日 日本赤十字社本社ボランティアセンター（201 大会議室）

全国の赤十字ボランティアを被災地へ派遣する業務

香川県赤十字防災ボランティアリーダー 高橋 真里



平成 23 年度から再開された赤十字防災ボランティアリーダー研修を 2 月に受講したばかりでした。研修では、赤十字ボランティアとして、災害時のボランティアセンターの運営シミュレーション等を行い、今後の活動時にどう行動すべきかを話し合いました。その研修からちょうど一ヶ月後、東日本大震災が起こりました。

あまりの被害の大きさに、被災地・本社・支部からの情報が錯綜し、どれが正しい情報なのかさえ分かりません。そのような中、被災地 VC（※ 1）と本社の VC で活動出来る人員が足りないとの話を聞き本社 VC での活動に参加しました。本社 VC は、首都圏の支部が輪番制で担当しており、参加した三日間は東京支部が担当でした。主な業務としては被災地（以後、現地）で活動を希望しているボランティアの派遣先・日程と交通手段の調整、本社職員との連係、活動ボランティアとのミーティング等。まず、各支部から活動希望者の名簿が送られて来ます。現地 VC との調整をしながら、支部と本人に日程確認の連絡を入れ、本社からのシャトル便を利用するため、各人に本社出発日時と現地出発日時の連絡をします。文字にすると、簡単な作業の様に感じるが、作業手順のマニュアルはあるものの、使いづらい点も多くあり改善の必要性を感じながらの業務でした。本社 VC は、大会議室の一角に仮設で設置しているため占有できるパソコンが 3 台しかなく、混乱しているし、現地 VC は資材の不足、回線確保の問題、VC の引っ越し等連絡を取ることすら難しいこともありました。全国から集まったボランティアで運営しているため、手法が違うなどセンターとしてのまとまりに欠けていたことが大きな原因と思われます。また、本社の災害対策本部会議にも出席させていただき、ボランティアの活動状況を説明しました。活動の多くは報道されておらず、瓦礫撤去作業以外にも、救護班に寄り添って、赤十字ボランティアにしかできない活動もあることを伝えることができました。

東海～南海の運動型大地震が懸念されており、今回の震災を上回る被害が予想されています。香川の被害もですが、太平洋沿岸の被害は甚大なものになると思います。その時に私たちが出来ることを考え、整備しておく必要があります。今回のことで「人との繋がり」の大切さを痛感しました。研修仲間が、被災者となり、ボランティアセンター長となりました。研修と一緒に活動した全国のボランティアとの繋がりを大切に、本社・支部との連携をとりつつ今後の活動に繋げていきたいと思っています。

※ 1：ボランティアセンター

香川県災害ボランティア活動に参加して

香川県赤十字安全奉仕団 中西 俊明



日 時：平成 23 年 4 月 2 日（土）～5 日（火）

現地活動：4 月 3 日（日）～4 日（月） 場所：宮城県石巻市

活動内容：● 4 月 3 日（日）石巻港近く門脇地区

津波被害の韓国料理店と一般住宅のヘドロ掻き出し及び家財等の撤去作業

● 4 月 4 日（月）北上川河口 河北地区福地

津波被害の農家にて、ヘドロ掻き出し及び家財等の撤去作業

出発までの経過と活動について 3.11 のテレビニュースで流された映像、大津波が海岸から住宅地へ農地へと、家が人が車が次々と押し流されて行く映像が、ずっとまぶたに焼き付いていました。阪神淡路大震災を凌ぐ大震災ということ、私たちにも何かできることはないのかと、日々逸る気持ちでいっぱいでした。阪神震災の時と重なる、あの時も仕事が終わると日赤香川県支部に立ち寄りしました。そんな時、一回目の香川県災害ボランティアとしての活動の場が与えられました。短期間ではありますが、少しでも何かの役に立てればという思いで参加しました。

石巻市まで 18 時間、行程は宿泊を含み全てバスで、4 日分の食料・水・そして寝袋をザックに詰めまるで山行のような出で立ちでした。現地に近づくにつれ阪神大震災との違いにただ唖然としました。あの時は、神戸に近づくに連れて倒壊した建物や高速道路の様子が、まるで映画のセットのようでしたが、今回は、瓦礫の残骸のみの風景が突然目の前に現れた感じで、その悲惨さは言葉では表現の仕様のない有様でした。水害に対する活動はかつて高松水害で経験しました。しかしヘドロの量、瓦礫の量、住宅の間に積重なった車、そして自衛隊員の行方不明者の搜索活動の最中などと、その規模の大きさは比較にはなりません。どこから手を付けたらいいのか、これから先どうするのだろうか、多くの生命が奪われ、なお且つ行方不明者がいるという現実の中での活動は格別な思いでした。4/3 の韓国料理店ではご主人が流されてなくなり、特に 4/4 の活動の場所は、報道でも大きく取り上げられた小学生 76 名が犠牲になった大川小学校のすぐ近くであり、私が担当した農家のお年寄り夫婦の津波が押し寄せてきたときの実体験談は、本当に胸の詰まる思いで聴きました。いつの時も退き際が悲しい、もう帰らなくてはならないとき社交辞令的な「がんばってください」とは決して言えず、ただ、「お身体を大切にしてください」とだけ声をかけるのが精一杯でした。

今後の取組 定例の防災訓練及び研修会等は、今後も継続して行わなくてはなりません。また、いかなる災害が時と場所を選ばず起きる可能性を考えると、私たち赤十字防災ボランティアとして、どのように考え行動するのかを早急に詳細かつ具体的にしておく必要があります。

東日本大震災 ボランティア活動報告

香川県赤十字安全奉仕団 河野 好一



4月5日(火) 14:20 発 羽田行き 15:40 羽田着 17:40 日赤本社着

日赤本社、5F 会議室にて仮眠。この時点でも、現地の状況説明や活動内容の説明が無く、翌朝の出発時間の連絡だけでした。

4月6日(水) 5:30 起床 8:55 本社出発

2台に分乗し、宮城県支部に向けて出発しました。同乗は沖縄・福岡・愛知からのボランティア4名、同じくボランティアのドライバー2名の合計7名でした。

11:15 上川内 SA

これより先は食料・飲み物は無いとのことでした。那須を過ぎるあたりから、屋根にブルーシートをかけた家が見え始め、北上するとともに数が増えました。(阪神淡路大震災よりはかなり少ない)

14:15 宮城県支部(宮城県仙台合同庁舎)着

外見上、仙台市内に地震の影響は見られません。電気・水道は復旧されており、ガスの復旧がまだの状況でした。時間も遅い関係上、この日は仙台周辺の被災状況を確認のため、ボランティアセンター長の案内で見て回りました。名取市から多賀城市、塩釜と回ると津波の被害の甚大さに驚愕し、最初は驚きの声を上げていた同乗者も、徐々に声を無くしていきました。

18:30 支部 10F のボランティア室でミーティング

当日の活動報告。明日で活動を終了し帰路につく者と私たち明日から活動を開始する者の紹介と引き継ぎ。宮城県支部の防災ボランティア(スタッフ)は、センター長と女性スタッフ1名だけでした。活動終了まで宮城県防災ボランティアは両名の他に2名程度だけです。津波以外の被害が少なかったことや、宮城県の規模からして少ないと感じました。宮城県支部のボランティアセンターの運営方法は、ボランティアの数に応じて市町のボランティアセンターに派遣しているだけであり、私の明日の活動場所は東松島のボランティアセンターと決まりました。

4月7日(木)

今朝になって急に活動場所が東松島から亶理に変更になりました。東松島では、自衛隊・消防・警察等による一斉捜索が有り、ボランティアは立ち入り禁止とのこと。亶理のボランティアセンターは、社会福祉協議会により運営されており、女性のセンター長が見事に切りまわしていました。ここでは、赤十字のボランティアは被災現場には赴かず、センター内で活動してほしいとのことで、衛生管理と環境整備が主な任務でありました。私が最初に行ったのは、ボランティアの受付で、地元の婦人会の方と一緒に担当しました。仙台育英高校のラグビー部員、テニス部員など、高校生や中学生が多く、活動期間も長いようで、スタッフと顔見知りとなっていました。午後からは、ボランティアの使った手袋や長靴の洗浄とサイズの仕分けを行いました。高松水害の時のように消毒することまではされていなかったため、センターにはアドバイスしておきました。被災地の若い人が明るく活動しているのを見て、東北人の強さを見たように感じました。

19:00 支部帰着

ミーティングで明日の活動が、東松島に10名で向かうこととなりました。深夜に震度6強の余震が有り、仮眠していた会議室の机や椅子が倒れ、ボランティア室や支部事務所も書類や物資が散乱しており、ボランティアはそれらを分担して片づけましたが、ボランティアの連携の良さに宮城県支部の職員の方が驚いておられました。

4月8日(金)

昨夜の余震で停電したらしく、信号が消えた道を通って東松島のボランティアセンターに到着しましたが、東松島は地震のため活動を休止していました。センター長に連絡を取り、石巻に向かいましたが、そこでも活動を休止しているとのことでした。海沿いを通って支部まで戻り、各地の被災状況を見て回りました。

4月9日(土)

今日は、長崎県からの看護師2名と、塩釜 VC、多賀城 VC、七ヶ浜 VC を巡回することになり、私はドライバーとして不慣れな道を運転して回りました。ところどころ信号が消えた道をナビを頼りに運転しましたが、何度か道に迷い、思いがけず時間がかかりました。地元のボランティアがいれば有りがたいとつくづく思いました。各ボランティアセンターでは、看護師の人がボランティアの血圧を測り、お話を聞く間、私はボランティアセンターの運営状況の把握に努めました。どのセンターも、「ニーズは減ってきている」「ニーズに対してボランティアは足りている」「今後は地元のボランティアでの対応を考えている」といったことを話されましたが、被災の状況から、ニーズが無いのではなく上がってきていないだけではないかと思いました。まだ、立ち上がる気力の湧かない被災者が多く、家の片づけや流れ込んだ土砂をかき出すことに思いがけないのではないかと感じました。

4月10日(日)

看護師さんとのドライブは昨日だけで堪忍してもらい、看護師さんと同じく長崎県からのボランティアと2名で山元町のボランティアセンターに向かいました。ここも被害が甚大で、道路から海に向けて見渡す限り津波の痕跡が広がっていました。今日はバザーを行い、集まった救援物資を被災者の方にお配りする日でした。品目毎に広場に広げ、訪れる被災者の方に自由に持って帰ってもらう方法でした。人気はトイレットペーパーやティッシュペーパーの紙類、インスタントラーメンなどの手軽な食料であり、人気のある品は小出しにすることで、後から来る人にも当たるように配慮しました。

4月11日(月) 9:15 宮城県支部出発 14:05 日赤本社帰着

4月12日(火) 9:48 浜松町発 12:40 高松着



あれから1年

さぬき市立志度中学校 校長 佐野 禎彦

卒業式が終わり、感動がさめやらぬまま昼食。職員室で談笑していた時に“それ”は起こりました。テレビに映し出される、とても現実とは思えないような映像に、釘付けになりました。未曾有の大震災です！

翌日、生徒会の担当者から相談がありました。「生徒から、災害に遭われた東北地方の人たちのために、募金活動をしたいという希望が出ています。すぐにやりたいのですが…。」

本校は平成21・22年度の2年間、JRC研究指定校を委嘱され、「気づき、考え、行動する」を合い言葉に、生徒のボランティア活動への意識向上に取り組み、その成果を12月1日の発表会で披露したばかりでありました。前年には、ニュージーランドを襲った大地震に対して、生徒たちの発案で復旧に向けた募金活動を行っていました。あの惨状を目にした生徒たちが、我々教員が意図するよりも早く、直ちに「自分たちにできること」を考え、行動に移そうとした姿に、これまでの取り組みの大いなる成果を感じることができました。

その日の夕方、学校近くの店舗で、震災の様子を伝える新聞写真や募金箱を手手に、声をからして呼びかける生徒有志の姿がありました。「直接被災された人々には渡せないで…」と言いながら、1万円札を入れてくださったお年寄りがいました。「思っていた以上にたくさんの人たちが、僕たちの活動に協力してくれました。大声で呼びかけるのは少し恥ずかしかったけど、たくさんの人たちの温かい励ましの言葉を聞いて、やってよかったと思いました。(生徒の感想より)」



先日、生徒会主催により、被災地に赴き、活動された社会福祉協議会の方を招いて講演会を開きました。“3.11 あれから1年募金活動”に向けて、被災地の今を知っておきたいという生徒たちの思いが、この講演会を実現させました。生徒たちは忘れていません。「気づき、考え、実行する」ことで、自分も、他人もみんなが幸せになれることを。このような素晴らしい伝統を紡ぎ出すきっかけを与えてくださった研究委嘱に感謝します。そして、この活動がますます広がることを願います。

最後になりましたが、東日本大震災によって亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被害に遭われ、不自由な暮らしを余儀なくされている被災者の方々に、改めてお見舞いを申し上げます。



わたしたちにとってのボランティア

高松市立檀紙小学校 校長 赤松 よし子

平成23年3月11日(金)三陸沖を震源として東北・関東地方に大きな地震が発生しました。連日、新聞やテレビで流れるニュースで、少しずつ明らかになっていった悲惨な状況を知り、驚きと悲しみで心が痛みました。

本校では6年生が中心に3月14日(月)から募金活動を行い、プルタブの収益金と合わせて義援金を日赤へ届けました。さらに、他にもできることはないかと、新聞記事を見ながらアイデア会議も開きました。この会議は「気づき 考え 実行する 会議」と名付けました。

そんな中「思い出は流れない写真救済プロジェクト」の記事と出会いました。「家で眠っているポケットアルバムをNPO法人に送ってもらいたい！」この一文を契機に、子どもたちは、6月からポケットアルバム回収活動を開始。多くの協力があり、ポケットアルバムをたくさん集めることができました。『写真は持ち主にとっての宝です。なぜかという、その写真には思い出が写し出され身近に感じることができ、癒されると思うからです。その宝物の写真を納めるポケットアルバムを送れたことは、とても嬉しく、東北の方と少し絆ができたと思いました。』と6年生は感想で述べていました。

平成24年2月に入り、5年生が、自分たちの育てたもち米を使った東日本大震災の募金プロジェクトを開始しました。募金に協力してくれた人に、手作りの地震対策パンフレットやもち米料理のレシピを添えて、もち米一合をプレゼントするというものです。東日本大震災から約1年たつ今も、報道には震災関連のニュースが絶えません。少しでも復興の役に立ちたいと提案したものです。企画した子どもの中には、『あきらめないで頑張ろうという気持ちも一緒に届けたい』と話す子が多くいて、JRC活動の継続の大切さを感じました。



私たちは、日ごろから人の痛みや苦しみを敏感に感じる心を持ち、その思いを受け止めながら、自分たちに何ができるか考え、これからも行動に移していきたいと思えます。

第5章

義 援 金

国内義援金受付状況

地震発生後、救護班の派遣等に対応する中、義援金の問い合わせの電話が次々とあり、赤十字本社からの指示を待たずに受付を開始しました。

ボランティアの方々が次々と駆け付けて、準備、受付の手伝いをしてくださいました。

半年余りで受付金額が15億円となり県民の皆様の助け合いの心を強く感じました。

義援金の受付、送金状況は下記のとおりです。

- 日本赤十字社全体受付 平成24年3月30日現在
2,749,360件
313,448,043,885円
- 香川県支部受付 平成24年3月30日現在
13,215件
1,591,756,810円
- 義援金送金状況 平成24年3月9日 現在
349,160,635,278円

義援金送金状況

(平成24年3月9日現在)

(単位：円)

	送金合計額
北海道	9,938,072
青森県	735,729,316
岩手県	32,431,269,176
宮城県	170,821,310,230
山形県	8,310,060
福島県	118,735,828,024
茨城県	16,179,426,580
栃木県	1,995,254,400
群馬県	4,994,036
埼玉県	151,945,096
千葉県	7,433,183,580
東京都	221,355,596
神奈川県	106,506,764
新潟県	189,177,364
長野県	136,406,984
合計	349,160,635,278

送金額は、中央共同募金会なども含まれます。

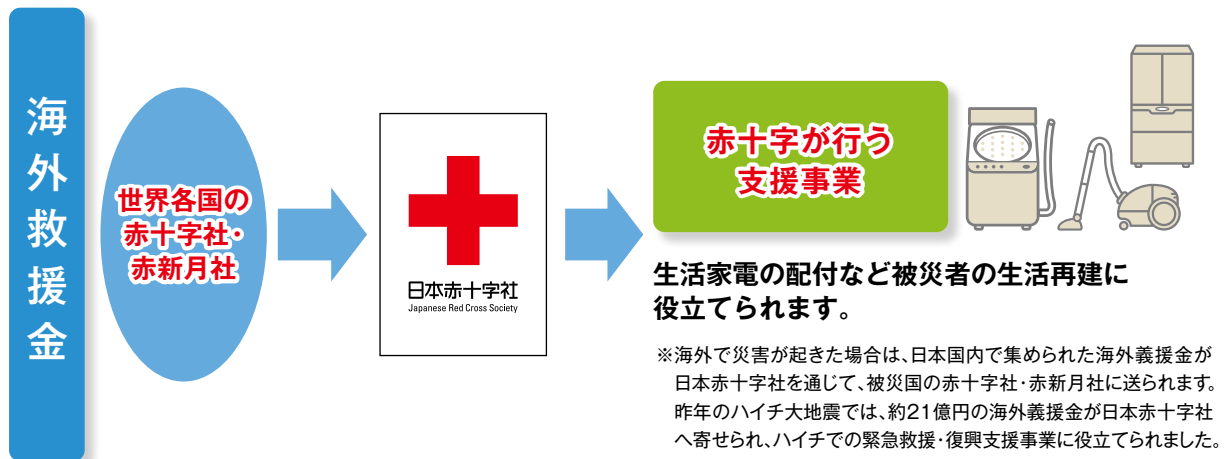
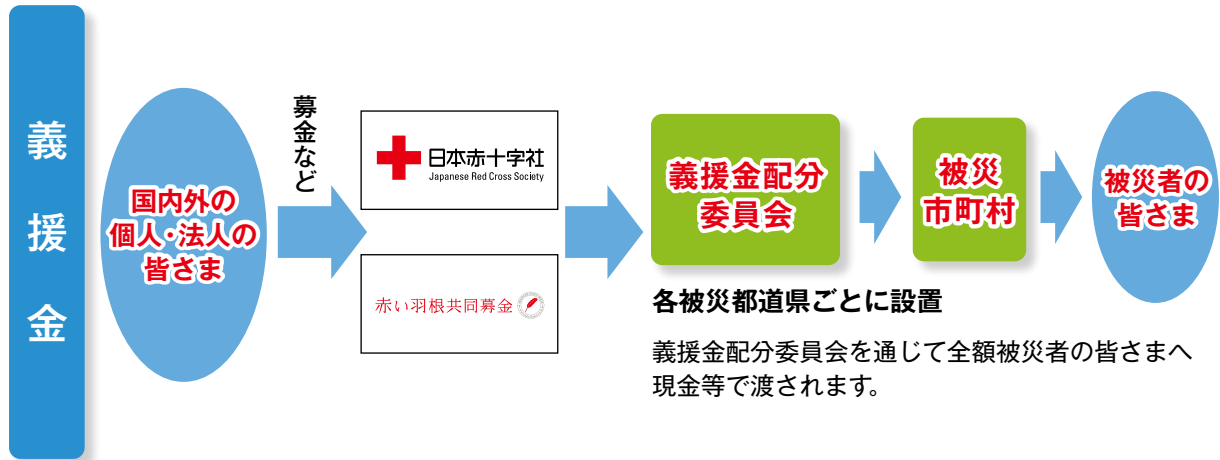


▲ ボランティアによる義援金領収証の発行作業

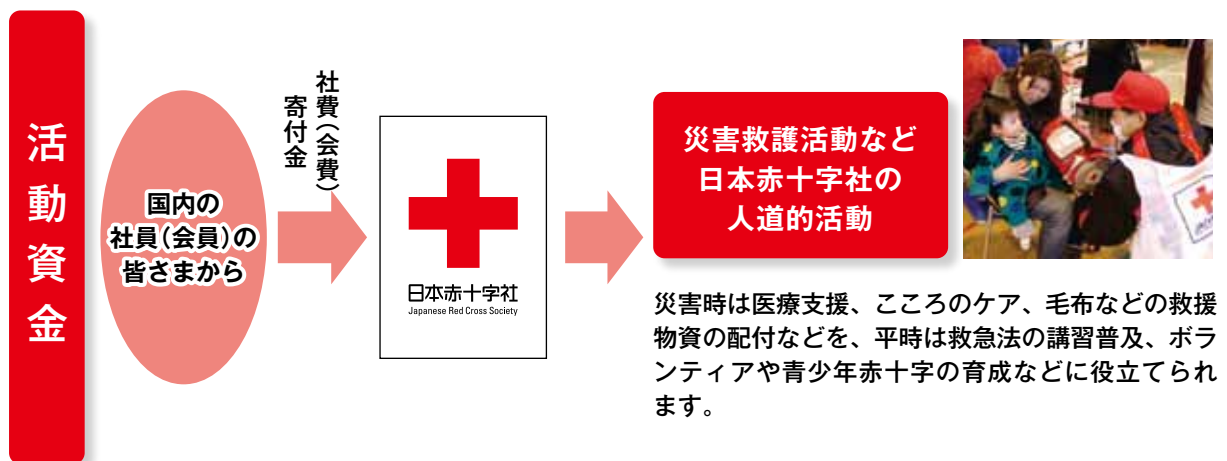
日本赤十字社にお寄せいただいた「義援金」は、被災県に設置される義援金配分委員会に全額送金され、同委員会で定める配分基準に従って被災者へ届けられます。

義援金が国や自治体が行う復旧事業や、日赤の災害救護活動・被災者支援活動などに使われることは、一切ありません。

● 東日本大震災における義援金と救援金の流れ



● 赤十字活動資金の流れ



「社員」とは、赤十字の精神や事業の目的を理解して、毎年一定額の活動資金を納めて頂く方をいいます。その活動資金を「社費」といいます。

■ 海外救援金受付状況

日本赤十字社には世界各国の赤十字・赤新月社等を通じて「海外救援金」が寄せられています。これは、世界各地の人々が日本の被災者のためにお寄せ下さったご寄付であります。この救援金で被災された方々への支援を行っています。

- 平成 24 年 3 月 8 日現在 51,547,472,359 円
このほかにクウェート政府からの原油 500 万バレル（約 400 億円相当）

現在までに行った支援内容は次のとおりです。

避難所・仮設住宅の方々への支援

- 仮設住宅への生活家電 6 点セット（冷蔵庫、洗濯機、炊飯器、テレビ、電子レンジ、電気ポット）の寄贈
- 避難所で共同で使用する空気清浄機、掃除機、洗濯機、乾燥機を設置
- 避難所へ手洗い場の給水設備及び仮設シャワーの設置
- 仮設コミュニティセンターを建設し、テレビ、座布団、ホワイトボードなどの備品を提供
- 社会福祉施設へ介護士の派遣、介護ベットの整備、福祉車両の提供
- 交通手段がない人のためコミュニティバス（無料）の運行
- 季節対策セット（冷却タオル・防水スプレー）の配布



こどもたちへの支援（日赤キッズクロスプロジェクト）

- 学校保健室へ身長計、体重計、視力計、ベットなどの備品を整備
- 仮設体育館を作り体育の授業や学校行事に活用
- こどもたちの通学の足を確保するためのスクールバスを運行
- 校舎の外での活動が制限されている地域の学校にパソコンを整備
- 学校の給食室、市町村の給食センターに食器、保管庫、冷蔵庫などの備品を整備



その他 保険医療サービスの支援

- 病院再建への支援として仮設診療所（夜間診療所等）や病院の再建など地域医療のインフラ復興の支援
- 地域の保健医療支援として肺炎球菌ワクチンの予防接種の支援（医療機関で接種を希望される方に無料で実施）
- 原子力発電所事故への対応として全身の放射線量を測定するホールボディ・カウンター、甲状腺モニター等の資機材を整備
- 高齢者、障害者への支援として被害を受けた社会福祉施設へ介護士の派遣、介護ベットの整備及び福祉車両の整備

第6章

東日本大震災災害救護に関する 派遣状況名簿

■ 第1班救護班名簿 >>>> 平成23年3月11日(金)～3月16日(水)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	伊藤辰哉	救急科部長
〃	医 師	末澤知聡	第一循環器科副部長
〃	看護師長	宮田みゆき	看護係長
〃	看護師長	古賀くみこ	看護係長
〃	看護師	竹本由加理	看護師
〃	看護師	藤川啓子	看護師
〃	看護師	山田加奈子	看護師
〃	看護師	新池真祐美	看護師
〃	薬 剤 師	平井聡史	薬 剤 師
〃	助 産 師	十河 亜 希	看護師兼助産師
〃	主 事	前田秀樹	経 理 係 長
血液センター	主 事	秋山 淳 也	主 事
支 部	主 事	大林武彦	事業推進係長
〃	主 事	嘉藤 整	主 事
〃	防災ボランティア	金森 仁	ボランティア・リーダー



■ 第2班救護班名簿 >>>> 平成23年3月14日(月)～3月19日(土)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	山本晃義	呼吸器科部長
〃	看護師長	村井由紀子	看護係長
〃	看護師	佐藤麻衣	看護師
〃	看護師	竹林真希	看護師
〃	薬 剤 師	岡野愛子	薬剤管理指導係長
〃	主 事	西原 賢	主 事
血液センター	主 事	白井 隆	供給二係長
支 部	主 事	石井博喜	主 事



■ 第3班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 3 月 17 日 (木) ~ 3 月 22 日 (火)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	井 陽 輝	脳神経外科副部長 兼 救急科副部長
〃	医 師	森 川 朋 子	研 修 医
〃	看 護 師 長	宮 瀬 貴 子	看 護 係 長
〃	看 護 師	土 居 大 剛	看 護 師
〃	看 護 師	村 井 明 菜	看 護 師
〃	薬 剤 師	三 木 容 子	薬 剤 師
〃	主 事	樽 茶 直 人	主 事
血液センター	主 事	徳 田 修 太 郎	経 理 係 長



4 班 ~ 12 班ルート
(高松 ~ 東京 ~ 秋田間は飛行機)

■ 第4班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 3 月 20 日 (日) ~ 3 月 24 日 (木)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	吉 岡 正 博	内 科 医 師
〃	医 師	森 岡 広 嗣	研 修 医
〃	看 護 師 長	大 嶋 和 代	看 護 係 長
〃	看 護 師	浮 田 知 里	看 護 師
〃	薬 剤 師	六 車 政 晃	入 院 調 剤 係 長
〃	助 産 師	石 淵 純 子	看 護 師 兼 助 産 師
〃	主 事	光 家 努	医 療 機 器 管 理 第 二 係 長
血液センター	主 事	漆 原 慎 司	主 事



■ 第5班救護班名簿 >>>> 平成23年3月23日(水)～3月27日(日)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	三 代 卓 哉	整形外科医師
〃	医 師	森 岡 弓 子	研 修 医
〃	看 護 師 長	藤 井 美 幸	看 護 係 長
〃	看 護 師	菅 友 美	看 護 師
〃	看 護 師	倉 鋪 加 奈 子	看 護 師
〃	薬 剤 師	中 村 和 宏	薬 剤 師
〃	主 事	柳 生 大 介	主 事
血液センター	主 事	篠 田 達 仁	供 給 一 係 長
支 部	防災ボランティア	金 森 仁	ボランティア・リーダー



■ 第6班救護班名簿 >>>> 平成23年3月26日(土)～3月30日(水)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	小 川 力	内 科 医 師
〃	医 師	郷 司 彩	小 児 科 修 練 医
〃	看 護 師 長	林 美 紀	看 護 師 長
〃	看 護 師	富 家 朋 美	看 護 師
〃	看 護 師	鈴 江 佳 子	看 護 師
〃	薬 剤 師	野 村 勇 介	薬 剤 師
〃	主 事	石 橋 武	主 事
血液センター	主 事	眞 鍋 知 裕	主 事
支 部	防災ボランティア	金 森 仁	ボランティア・リーダー



■ 第7班救護班名簿 >>>> 平成23年4月1日(金)～4月5日(火)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	石 川 順 英	第一消化器外科副部長
〃	医 師	郷 沙 織	産 婦 人 科 修 練 医
〃	看 護 師 長	松 原 由 美	看 護 師 長
〃	看 護 師	佐 々 木 真 弓	看 護 師
〃	看 護 師	山 下 明 花 莉	看 護 師
〃	薬 剤 師	田 口 真 奈 美	薬 剤 師
〃	助 産 師	窪 田 綾	看 護 師 兼 助 産 師
〃	主 事	多 田 羅 尚 也	技 術 員
血液センター	主 事	川 崎 浩 幸	渉 外 係 長
支 部	防災ボランティア	金 森 仁	ボランティア・リーダー



■ 第8班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 4 月 8 (金) ~ 4 月 12 日 (火)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	松 中 寿 浩	内 科 医 師
〃	医 師	高 橋 朋 子	小 児 科 医 師
〃	看 護 師 長	亀 山 由 美	看 護 係 長
〃	看 護 師	橋 本 麻 美	看 護 師
〃	看 護 師	黒 木 み き 子	看 護 師
〃	薬 剤 師	黒 川 幹 夫	外 来 調 剤 係 長
〃	主 事	碓 石 竜 一	調 理 師
血液センター	主 事	富 家 直 樹	主 事
支 部	防災ボランティア	金 森 仁	ボランティア・リーダー



■ 第9班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 4 月 20 日 (水) ~ 4 月 24 日 (日)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	神 余 泰 宏	産 婦 人 科 医 師
〃	医 師	徳 野 貴 子	皮 膚 科 医 師
〃	看 護 師 長	大 西 順 子	看 護 係 長
〃	看 護 師	平 山 朋 美	看 護 師
〃	看 護 師	安 藤 佐 和 子	看 護 師
〃	薬 剤 師	合 田 哲 子	薬 剤 管 理 指 導 課 長
〃	主 事	崎 川 雄 介	主 事
血液センター	主 事	細 谷 淳	主 事



■ 第10班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 4 月 28 日 (木) ~ 5 月 2 日 (月)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	環 正 文	第 一 胸 部 ・ 乳 腺 外 科 副 部 長
〃	医 師	岸 夏 子	小 児 科 修 練 医
〃	看 護 師 長	小 林 キ ヨ	看 護 係 長
〃	看 護 師	富 田 万 記 子	看 護 師
〃	看 護 師	福 家 里 江	看 護 師
〃	薬 剤 師	柴 田 麻 佑	薬 剤 師
〃	主 事	川 西 賢 治	情 報 シ ス テ ム 係 長
血液センター	主 事	二 宮 宏 樹	主 事



■ 第 11 班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 5 月 9 日 (月) ~ 5 月 14 日 (土)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	山岡 竜也	外科 医師
〃	医 師	山崎 亜樹	内科 修練医
〃	看護 師長	藤沢 佐加恵	看護 師長
〃	看 護 師	片山 明美	看 護 師
〃	薬 剤 師	住吉 加奈	薬 剤 師
血液センター	主 事	鏡原 吉之	業 務 係 長

《こころのケア》

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	看 護 師	山田 陽子	看護 係長
〃	看 護 師	石井 睦子	看 護 師
〃	主 事	真鍋 剛弘	主 事



■ 第 12 班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 5 月 22 日 (日) ~ 5 月 27 日 (金)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	香月 教寿	脳神経外科 医師
〃	医 師	宮本 由貴子	内科 修練医
〃	看護 師長	秋月 典子	看護 係長
〃	看 護 師	唐渡 美帆	看 護 師
〃	薬 剤 師	野村 勇介	薬 剤 師
血液センター	主 事	中西 義徳	主 事

《こころのケア》

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	看 護 師	西村 美智子	看 護 師
〃	看 護 師	宮武 千陽	看 護 師
〃	主 事	田中 智也	営繕家政係長 兼 購買第二係長



■ 第 13 班救護班名簿 >>>> 平成 23 年 6 月 10 日 (金) ~ 6 月 15 日 (水)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	医師：班長	勢井 洋史	耳鼻咽喉科 修練医
〃	看護 師長	藤原 正美	看護 係長
〃	看 護 師	西山 寛子	看 護 師
〃	主 事	蜂須賀 保明	経営企画 第二係長
血液センター	主 事	小河 敏伸	学 術 係 長



■ 撤収班名簿 >>>> 平成 23 年 5 月 21 日 (土) ~ 5 月 28 日 (土)

所 属	職	氏 名	職 名
支 部	主 事	大 林 武 彦	事業推進係長
〃	主 事	海 野 陽 大	主 事

《ボランティア》

所 属	職	氏 名	職 名
支 部	防 災 ボランティア	金 森 仁	ボランティア・ リーダー
〃	防 災 ボランティア	荒 谷 敬 一 郎	ボランティア・ リーダー
一 般	防 災 ボランティア	宮 本 健 三	ボランティア



■ こころのケア 19 班名簿 >>>> 平成 23 年 6 月 21 日 (火) ~ 6 月 27 日 (月) (全国 19 番目の派遣)

所 属	職	氏 名	職 名
病 院	こころの ケア要員	島 津 昌 代	社会係長 (臨床心理士)
〃	こころの ケア要員	酒 井 智 子	看 護 師
〃	こころの ケア要員	敷 島 雅 子	看 護 師
〃	連絡調整員	藤 川 唯 啓	主 事



■ 支援要員派遣者 >>>>



石巻赤十字病院支援（主事）
3月24日（木）～3月31日（木）
主事／三好 英文



新潟県血液センター支援（薬剤師）
3月30日（水）～4月12日（火）
製剤課付係長／濱田 秀誠



石巻赤十字病院支援（こころのケア）
4月2日（土）～4月8日（金）
看護師／牛尾 由美子



石巻赤十字病院支援（助産師）
4月3日（日）～4月10日（日）
看護係長／篠原 雅子



放射線サーベイ要員
4月13日（水）～4月17日（日）
診療放射線技師／藤原 直人



石巻赤十字病院支援（助産師）
4月13日（水）～4月20日（水）
看護師兼助産師／熊野 明江



石巻赤十字病院支援（救急外来看護師）
4月18日（月）～4月25日（月）
看護師／中本 裕子



石巻赤十字病院支援（救急外来看護師）
4月23日（土）～4/30（土）
看護師／谷 節子



本社支援 現地広報要員
4月24日（日）～5月3日（火）
人事係長／鳥越 大輔



石巻赤十字病院支援（薬剤師）
5月3日（火）～5月10日（火）
薬剤管理指導係長／岡野 愛子



石巻赤十字病院支援（臨床工学技士 透析）
5月3日（火）～5月10日（火）
臨床工学技士／別府 政則



石巻赤十字病院支援（救急外来看護師）
6月12日（日）～6月24日（金）
看護師／山本 美也子



石巻赤十字病院支援（薬剤師）
6月28日（火）～7月8日（金）
薬剤師／平井 聡史



石巻赤十字病院支援（救急外来看護師）
8月3日（水）～8月15日（月）
看護師／本井 裕子

東日本大震災 災害救護活動記録冊子 編集会議

1 日本赤十字社香川県支部

- ・近藤 彰介／事務局長
- ・藤原 淳子／事業推進課長
- ・近藤 浩子／総務係長
- ・大林 武彦／事業推進係長
- ・石井 博喜／主事

2 高松赤十字病院

- ・吉澤 潔／副院長
- ・井 陽輝／脳神経外科副部長兼救急科副部長
- ・岡田 論子／看護副部長
- ・松原 由美／看護師長
- ・岡野 愛子／薬剤管理指導係長
- ・久保田洋子／医療社会事業課長
- ・鳥越 大輔／人事係長

3 香川県赤十字血液センター

- ・川崎 浩幸／渉外係長
- ・二宮 宏樹／主事

発行日 平成24年3月31日